第４章　杉崎章による考古学研究と結びついた「新しい郷土教育」実践

第１節　本章の課題

第２，３章での事例検討を通じて，1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程に関わる郷土全協の小学校教師の取り組みの特質について検討してきた。これまでの先行研究においても，1950 年代前半における郷土全協の活動については，「主な活動主体が研究者・学者主催ではなく小学校教師であり，小学校教師自身のための実践交流活動が行われていた」[1]として論じられている。小学校教師の立場から取り組まれた教育実践に着目して，前章までに論じたように，1950 年代前半における相川日出雄実践に関する研究[2]や，1950 年代後半における渋谷忠男実践に関する研究[3]など，小学校段階における「新しい郷土教育」実践に関する研究が多くなされてきた。

ところで，1950 年代前半には，戦後初期新教育批判を自らの立場とし，郷土全協の活動に加わって「新しい郷土教育」実践を展開していた中学校の教師たちもいた。そのような中学校段階における「新しい郷土教育」実践が注目されてこなかった理由の一つには，郷土全協の歴史的性格があったためだと考えられる。郷土全協は，郷土教育論争を背景として，1958 年 8 月に 35 号をもって歴史教育者協議会との機関誌『歴史地理教育』の共同編集を打ち切り，1960 年代以降には教育学研究の表舞台にはほとんど現れなくなる。ゆえに，「その活動や理論は埋もれた形になっている」[4]ともされている。

序章でも論じたように，戦後日本の民間教育団体による教育実践を捉える視座として，臼井嘉一は，「『教育実践』というものを単に『反権力』の立場からの教育実践と位置づけることになれば一面的であり，これらの教育実践がそれぞれの時期の社会的歴史的課題とどう切り結びどのような教材構成や授業展開を進めつつ，子どもや父母地域住民とどのような学校をつくりあげているかという観点から位置づけ直すことも重要な課題である」[5]と述べている。すなわち，この臼井の指摘に学びつつ，1950 年代前半の中学校における「新しい郷土教育」実践が，どのような形で，何をめざして取り組まれていたかについて，検討する必要があるだろう。

以上のような問題意識に基づき，本章では，1950 年代前半において，愛知県知多郡横須賀中学校の社会科教師であった杉崎章によって取り組まれた「新しい郷土教育」実践に着目し，中学校における郷土教育実践の特質について考察を深めたい。杉崎の取り組みは，1953 年 9 月に，郷土全協が主催した第２回郷土教育研究大会において紙上発表が行われ，当時においても注目を集めた実践であった。また，そのことがきっかけとなり，当時の郷土全協の会長であった周郷博より，「考古学と郷土教育」の原稿指導指導を受け，相川の実践とともに和島誠一編『日本考古学講座 第１巻』（河出書房，1955 年）において，「考古学と郷土教育 実践例Ⅱ 中学校の部」として所収されていた[6]。さらに，杉崎は，自ら「新しい郷土教育」実践に取り組むだけではなく，愛知県豊橋市瓜郷遺跡の発掘調査に関わった現場教師たちを中心として，『野帳の会』という考古学研究サークルを結成するなど，愛知県知多半島における郷土全協を代表する実践家であったといえる。この杉崎の取り組みは，1950 年代前半の中学校における「新しい郷土教育」実践の特質を示していると考えられる。

そこで,本章では,1950 年代の中学校における「新しい郷土教育」実践として,愛知県知多郡横須賀中学校の杉崎章の取り組みの事例に即して分析を行い,その創造過程の特質について考察することを目的とする。

第２節　杉崎章による「新しい郷土教育」実践の成立背景

（１）　杉崎章と「新しい郷土教育」論との出会い

まず,1950 年代前半に,杉崎章が中学校における「新しい郷土教育」実践を行った背景について,必要な限り論じておきたい。

敗戦後の 1947 年 5 月に,『中学校学習指導要領 社会科編Ⅱ（試案)』が発表された。試案という位置づけにより,教師は,「教科書を教える」のではなく,「教科書で教え」ればよいということになり,教材を自ら編成する必要に迫られた[7]。教師たちは教材の自主編成の中で教授法についても工夫を重ねており,中でも小･中学校でフィールドワークが取り組まれていたことが特徴的であった。1950 年代前半において,その指導的役割を果たしたのが,桑原正雄,和島誠一らを中心として結成された郷土全協であった。郷土全協は,「地域の生活現実を重視し,科学･学問の系統性を尊重して,教育にとり入れる」[8]ことを活動理念とし,民主主義科学者協会歴史部会や歴史教育者協議会とともに,一定地域の地誌から原始･古代をへて現代にいたるフィールドワークを展開していた民間教育研究団体であった。

愛知県下においても,1950 年代前半において,教師たちによる教育研究活動の胎動が起こっていた[9]。1951 年 10 月には,愛知作文の会が戦前の名古屋綴方連盟の教師たちを中心として名古屋と尾張部において結成されていた[10]。また,1947 年より,豊橋市の瓜郷遺跡の発掘調査が行われ,その調査に基づいて和島誠一が執筆した小学生用の図書『大昔の人々：瓜郷遺跡の発掘』(岩波書店,1953 年)により,多くの「考古ボーイ」[11]が出現することにもなっていた。このように,1950 年代前半の愛知県下では,民間研究団体が主体となった発掘調査が進められていたのである[12]。

そのようななかで,杉崎は,1952 年 10 月に行われた瓜郷遺跡の発掘調査に参加し,「新しい郷土教育」論と出会うことになる。杉崎は,その出来事について,次のように振り返って述べている。

> 豊川下流のデルタで発見され,当時の考古学界にいろいろな意味でのエポックを画した瓜郷遺跡の調査に参加して,久永春男先生から和島誠一先生を紹介された。そして，新しい郷土教育にはフィールドワークを武器とし手段とした教育方法が必要であること,それは戦前からの長い試練と伝統を受け継いできた生活綴方の方法と,考え方を同じくするものであることを教えられた。(中略)
> 私たちの社会科教育を生活綴方の方法で鍛えあげたものが,子どもの目をのばす教育方法ではなかろうか。自分の目でものを見て,自分の頭で考える子どもをそだてる教育こそ新しい社会科教育ではないか。「いうはやすし行うはかたし」,実践はなかなかはかどらないのであるが,一かどの青年教師を自任していた私の胸はたかなるのであった。[13]

このように,杉崎は,「新しい郷土教育」について,「フィールドワークを武器とし手段とした教育方法が必要であること,それは戦前からの長い試練と伝統を受け継いできた生活綴方の方法と,考え方を同じくするものである」ととらえ,「新しい郷土教育」実践に取り組もうとしていくのである。

（２）　知多半島における「新しい郷土教育」実践への着手

また,杉崎は 1949 年のころから,横須賀中学校において郷土クラブを組織し,フィールド・ワークに取り組んでいた。杉崎は,特別活動としての特色をふまえて,郷土クラブの活動の運営を行っていたのである。

> 中学校におけるクラブ活動は,三年間の課程であるが構成員は毎年交代していくのが現実であり,累積される成果の処理とともに顧問教師の役割は,ＯＢもふくめたクラブ員の人間的な統一でもある。杉崎君はいう「発掘調査の事業は,計画から実施・整理そして報告の執筆・刊行と一連の総合芸術である」と,学問的な問題は別としても参加する人間の融和はもちろん周囲の人々の支持にもこまかい配慮が必要である。[14]

このように,杉崎は,郷土クラブの活動を通して生徒たちが,計画から実施･整理といった全体を見通した計画性を身につけることや,クラブ員同士の人間関係を構築することをめざしていた。つまり,杉崎は,郷土クラブの活動を,教育活動としての位置づけのもとに取り組んでいたのである。

そして,そのような取り組みを進めるなかで,和島からの紹介を受け,1953 年 2 月に,千葉県成田市で開催された第 1 回郷土教育研究大会(郷土全協の結成大会)に参加し,大会における当時の郷土全協の会長であった周郷博による次のような講演に深い感銘を受けたという。

> 会議のまん中ごろ,お茶の水大学の周郷博先生が壇上にたたれて,郷土の現実から真実をつかみさせるフィールドワークの考え方を強調され,「もの」を通して自分の認識を創造していく学習,青いリンゴを赤く塗らない真実の教育,リアルな郷土教育の運動を提唱された。「青いリンゴはあくまで青いんだ」と訴えられる先生の真実へのきびしいせまり方には深い感銘をうけた。[15]

そして,「おしつけられた既製品ではなく,現実をリアルに歴史的に把握していこうとする教育,『青いリンゴは青い』といいきれる教育をめざし,高くかかげた希望の灯をかざし」[16]たという。そして,杉崎は,1950 年代前半の中学校における「新しい郷土教育」実践に着手していくことになる[17]。

表 17　杉崎章による「新しい郷土教育」実践・関連年譜

年	年齢	杉崎章の個人史年譜	関連する歴史的事件
1945 (昭和 20)	23	8 月　横須賀町立横須賀国民学校訓導として敗戦を迎える。	
1947 (昭和 22)	25	4 月　知多郡横須賀町立横須賀中学校に教諭として赴任する。	3 月　『中学校学習指導要領社会科編 Ⅱ（試案）』が発表される。
1948 (昭和 23)	26	3 月　柳ヶ坪貝塚において弥生土器片を収集する。 10 月　豊橋市瓜郷遺跡の第 1 次	

		発掘が開始される。	
1951 (昭和 26)	29	秋　久永春男より柳ヶ坪貝塚採集の土器片の重要性について指摘を受ける。	7 月　『中学校学習指導要領社会科編（試案）』が発表される。
1952 (昭和 27)	30	3 月　久永春男より柳ヶ坪貝塚の観察方法の示唆を受ける 5 月　柳ヶ坪貝塚の予備調査を行う。 6 月　柳ヶ坪貝塚の発掘調査を行う。 10 月 豊橋市瓜郷遺跡の発掘調査に参加する。 12 月 郷土クラブ員の早川鉄也が社山古窯の報告を行う。	
1953 (昭和 28)	31	2 月　第 1 回郷土教育研究大会に参加する。 4 月　名古屋大学文学部へ内地留学する(愛知県教育委員会より一年間の派遣)。 4 月　『柳ヶ坪貝塚』（杉崎章編著,愛知県横須賀中学校発行）を発表する。 9 月　第 2 回郷土教育研究大会に参加する。	2 月　郷土教育全国連絡協議会が結成される。 9 月　第 2 回郷土教育研究大会において杉崎実践が報告される。
1954 (昭和 29)	32	3 月　社山古窯の第 1 次調査を行う。 7 月　社山古窯の第 2 次調査を行う。 11 月 「知多半島における郷土教育の実践」（『教育愛知』第 11 号）を発表。	
1955 (昭和 30)	33	1 月　「考古学と郷土教育　実践例　中学校の部」（和島誠一編『日本考古学講座』第一巻,河出書房）を発表。 6 月　社山古窯の第 3 次調査を行う。	
1956 (昭和 31)	34	11 月　「知多半島における古代漁村集落の土器」（『古代学研究』第 15,16 号）を発表する。	
1958 (昭和 33)	36	9 月　「歴史教育における考古学の役割」（『私たちの考古学』第 18 号）を発表する。 12 月　「考古学と郷土教育(懇談)」（『野帳』第二期第三冊）を発表する。	10 月『中学校学習指導要領社会科編』において,考古学的記述に制限が加えられる。
1960 (昭和 35)	38	4 月　常滑市立西浦南小学校教頭として赴任する。 4 月　日本考古学協会員となる。	

（「杉崎章年譜」知多古文化研究会『知多古文化研究 1 －杉崎章先生退官記念論文集』ぎょうせい,1984 年,184～187 頁を参考に筆者作成。）

第３節　考古学研究を活用した教材研究

（１）　古代海浜集落へのフィールド・ワーク

当時,知多半島における一かどの青年教師を自覚していたという杉崎は,戦後間もない頃より,フィールド・ワークとしての「考古学研究」を活用し,主体的に教材研究に取り組んでいた。

それは,杉崎が,郷土クラブの生徒たちの活動成果を社会科の教科指導に持ち込んでいたためである。杉崎は,「実践的な学習を尊重する」方法として,郷土クラブの生徒たちによる「体験発表」や「幻灯のスライド」を活用することにより,社会科の教科指導を行っていた[18]。当時の教え子であった北川元志郎氏は,杉崎の社会科授業実践について,「歴史の授業の中でも重点的に郷土の遺跡の話をされた」[19]という印象を振り返って語っている。このように,杉崎にとって,郷土クラブの活動は,社会科の教科指導に向けての「考古学研究」を活用した教材研究としても取り組まれていたのである。

そのような「考古学研究」に,杉崎が取り組むようになったきっかけについては,次のように述べている。

> 私たちの学校では昭和 24（1949）年のころから,郷土クラブを作り郷土研究の活動をしてきた。もともと知多半島の私たちの地域には,知多郡史もあれば横須賀町誌もできている。それらが資料として真先きに取りあげられたことはいうまでもないが,そのいずれもが数十年前の編纂であり,実証的･科学的な研究態度ですすむ歴史研究の立場からは,満足できないものであった。できあがっている書物にたよるもののない私たちは,自分たちの手で資料の検討をしなければならなかった。ここでおどろいたことは,郷土における文献資料である。古文書のほとんどすべてが,江戸時代中期以降に限られ,中世までのぼりうるものは,室町期の鰐口一点にすぎず,鎌倉以前は先史時代のつづきといった有様であった。
>
> こうした歴史の谷間をうめ,確かな資料にもとづいて郷土研究をすすめるには,原始時代や古代はもちろん中世にいたるまで,遺跡や遺物による考古学的方法に,よらねばならない分野が大きいことを知った。[20]

この発言からは,杉崎が,郷土史資料の自主編纂活動に「考古学的方法」を活用して取り組んでいた姿を確認することができる。彼のような研究的態度は,1950 年代前半における意識的な歴史教師に共通する態度であったと考えられる[21]。

さらに,杉崎は,「フィールドワークを武器とし手段とした教育方法が必要である」と考える立場から,郷土クラブ活動の中でも,フィールド・ワークに取り組んでいた。

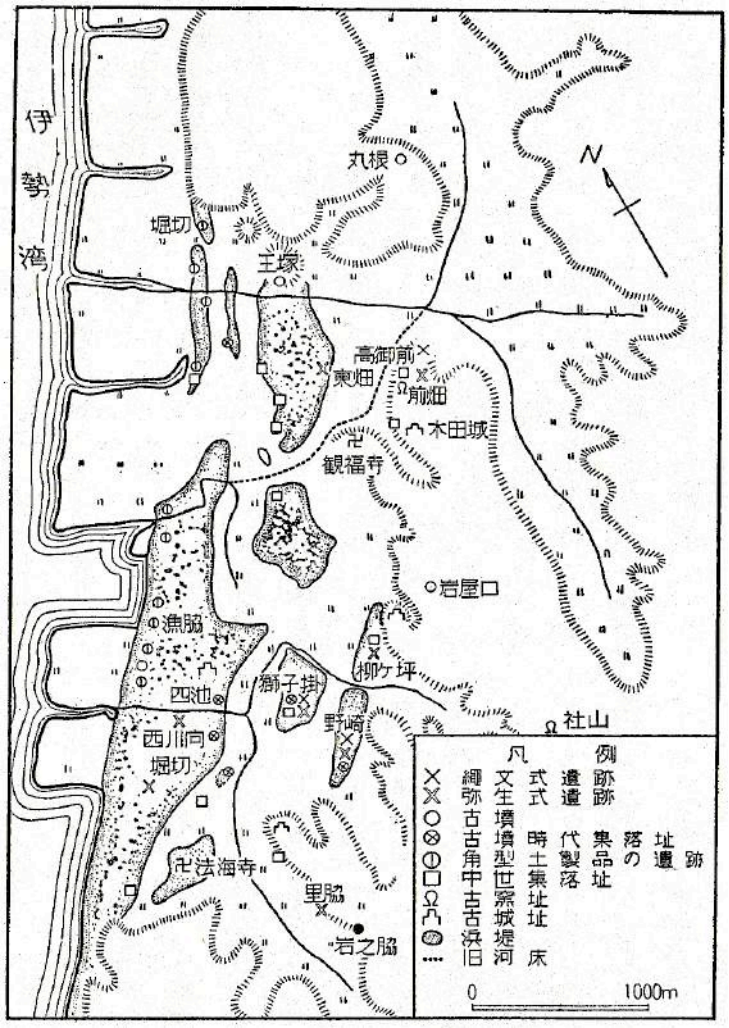
当時のフィールド・ワークには,次の二つの型が見られたという。一つには,戦前の郷土教育を批判的に継承したもので,小学校における相川日出雄の実践に見られるように,社会科という教科指導の中に位置づけたものであった。もう一つは,中学・高校に多いもので,課外活動としてのクラブ活動として行われたものであった[22]。それは,1951 年度に公示された『中学校学習指導要領』において,全ての生徒に対して毎週２～５時間ずつの特別教育活動の時間が配当され,時間配当に関する限り,特別教育活動の「黄金時代」[23]であったという。杉崎は,この特別教育活動の時間を利用して,横須賀中学校において郷土クラブを組織し,フィールド・ワークに取り組んでいたのである。つまり,杉崎は,郷土クラブ活動におけ

るフィールド・ワークの活動に,教育的意義を認めていたのである。

そして,1953 年度の郷土クラブ活動の運営においては,いくつかのテーマをもってフィールド・ワークを行い,生徒たちは,縮図の大きな地図に知多半島における古代漁村集落の位置や横須賀町の古代遺跡の分布状況を記入していったという。その分布地図を表したものが,図４である。

（２）　海岸線移動の歴史的変遷についての調査

図４　知多半島の古代漁村集落分布図



（杉崎章「考古学と郷土教育 実践例Ⅱ 中学校の部」和島誠一編『日本考古学講座 第１巻』河出書房,1955 年,269 頁。）

図４からは,当時の横須賀町が集中して古代漁村集落が発見された地域であったことがわかる。また,横須賀町の古代漁村集落が,外沖に向かって順次に形成されていった様子もわかる。つまり,郷土クラブの生徒たちは,フィールド･ワークを通じて,海岸線の移動や,海を隔てた文化の交流の様子についても,歴史的に認識していたのである。

では,なぜそのような横須賀町の古代集落の歴史的変遷が,杉崎や,郷土クラブの関心事となったのか。それは,横須賀町における土地利用の歴史の把握が,当時の現実的課題の探求と結びついていたためだと考えられる。

当時の横須賀町は,1944 年,45 年と続いた震害により,海底の地盤沈下が起こった問題や,1952 年に元浜の埋め立て工事が着工されたことにより,臨海部一体の井戸に塩分が混入し,住民から「塩辛い」という声が起こり始めた問題,また,1953 年に知多半島を襲った台風 13 号による堤防の決壊の被害などといった社会問題[24]が発生していた。それは,横須賀町における土地利用の歴史と結びついていたのである。そのために,杉崎は,地域住民と現代的な課題意識を共有し,横須賀町の土地利用の歴史的変遷をとらえようとしていたと考えられる。このことより,杉崎によるフィールド･ワークは,「郷土」における現実的問題の解決をめざすための研究としても展開されていたといえる。

そのような郷土クラブを主体とした教材研究の様子について,クラブの生徒が資料 17 の

ような生活綴方（詩）を残している。

資料 17　海岸線移動調査の中の生活綴方

第二の砂丘ができ
第三の砂丘ができ
木曽川は海の向こうから砂を送り
鈴鹿おろしは砂を吹きあげて
浜はだんだん沖へでた
やがて入江はうまって
やがて入江はうまってしまい
真直ぐな海岸となった

戦時中に防空壕を掘った時
家の下に貝層がみつけられた
サルボウにハマグリ・シオフキ
木曽川の砂の上に発展した町の歴史
今も地面の下から語られている

（秋田昇・中学３年）

この指紋、この指のあと
力強い手のあとが残っている。
真剣に生きぬいた先祖たちが
千何百年前,この海岸で
沖をにらんで生きた海の生活

（秋田昇・中学３年）

（杉崎章「知多半島における郷土教育の実践」愛知県教育委員会編『教育愛知』第 11 号,1954 年 11 月,29 頁。杉崎章「考古学と郷土教育 実践例Ⅱ 中学校の部」和島誠一編『日本考古学講座 第 1 巻』河出書房,1955 年,272～273 頁。）

資料 17 の詩からもわかるように,杉崎は,郷土クラブの生徒たちと共に,フィールド・ワークを行い,海岸線移動の歴史的変遷の調査を行っていたのである。そして,杉崎ににによる郷土クラブの運営は,「郷土」の現実的問題の解決をめざした学習にもなっていたことを確認することができる[25]。つまり,杉崎にとっての海岸線移動の歴史的変遷の調査の目的は,社会科の教科指導に向けての「考古学研究」を活用した教材研究として,あるいは,「郷土」における現実的問題の解決をめざした学習として取り組まれていたのである。

第４節　杉崎実践における発掘調査と生活綴方

（１）　柳が坪貝塚の発掘調査と生活綴方

また,郷土クラブの活動として,実際に発掘調査の作業が行われることもあった。1952 年度の横須賀町の柳ケ坪貝塚の発掘調査は,教育活動としての位置づけのもとに,郷土クラブの生徒たちが中心となって行われたものであった。以下,発掘調査日誌より,その取り組みの様子を引用する。

資料 18　柳ヶ坪貝塚の調査日誌

1952 年５月 15 日
　数日前より,町助役で郷土史の一権威である,久野九兵衛氏の御ほんそうによって,地主・耕作者の承諾を得られ,町当局の副申もできて,文化財保護委員会に提出する書類は全く完備,地方事務所の桑山芳延氏に依頼して直ちに県教育委員会に発送。

５月 30 日
　知多西地区警察長小柳録衛氏,中部日本新聞記者森義男氏来校,学校長と同道して杉崎現地へ案内する。

6 月 1 日
　県教育委員会主事高橋録太郎氏,現地視察のため来校。

６月７日（土）　晴
　調査第１日,学術指導者の池上年氏は早朝より来校され遺跡の分布調査を開始,続いて久永春男氏,田中稔氏も参加,地元の久野九兵衛氏に何かと目に見えざる援助をうける。
　中学校郷土クラブの生徒は午前中授業のため,午後発掘を開始した。
　発掘に当り,先ず以て発掘区に選んだのは先般の予備調査に現れた竪穴の拡張である。あるいは住居址であるかも知れないのでそこへトレンチを入れた。それを第一トレンチとする。けれども,私たちがこの遺跡に期待するものはこの地域の最古の弥生式土器である長床式または貝田町式の遺物層であって,欠山式の竪穴によって決して満足するものではない。即ち長床式のベースを求めて,それに属する長床式土器を採集していた所の西方道路上に第二トレンチ,更に第一トレンチより南方の畑に向って第三トレンチ,発掘可能の条件において最大のトレンチを設定した。而して西よりＡ区,Ｂ区,Ｃ区とし,Ａ区は池上氏,Ｂ区は田中氏,Ｃ区はその項勤務先よりかけつけてくれた加藤岩蔵氏の担当により作業を進める。
　発掘作業と平行して中学校教官の早川宗雄氏・伊藤芳彦氏等の手により測量が進められた。
　Ａ区の上層では復元可能と考えられる中世の鍋・釜を見る。Ｂ区では人骨が散乱状態として出土。
　早川氏・久永氏・伊藤氏は写真を撮影する。
　本日の横中郷土クラブ員の参加,六〇名。作業を終って学校に帰り,調査員一同その資料を中心として検討討談を続ける。

６月８日（日）　曇後雨
第一日の好天気にひきかえ今日は雨だ。しかし雨で作業を中止しては全ての予定が苦しくなるので小雨をついて続行する。
　本日の主眼点は第三トレンチの東端に近く発見された長床式のピットを
　北に拡張すると共に,昨夜の討議の中心となった三地区における層位の差の解明である。そのため,第二・第三両トレンチを結ぶと共に第一トレンチを南に延長して第三地区の接点を求めることである。

芳賀陽氏豊橋から応援に来る。一同,新鋭の参加に勇躍する。
池上氏は久野氏の案内により,周辺寺院の石塔調査にでかけ,加藤氏は勤務のため夕刻去る。
夜は横須賀町役場の一室にて有志の人の参集を得て懇談会を催す,総て久野九兵衛氏の配慮による。

６月９日（月）　曇後雨
期待していた昨日の日曜日がはっきりしない天候により作業の進捗は充分でない。今日は予定した最終日であるが一度崩れた空模様は晴れるかと見えたが又しても雨である。勿論,作業を強行して有終の美を求めんとする次第である。
前日より明らかになって来た長床式を包含する二つの層の資料を確実にするために努力した。即ち混貝土層の下の黒色有機砂層と黄褐色有機砂層のそれである。このため,第二日において接続した第二・第三両トレンチを南へ拡張する。
別の班は第三トレンチの東端を北に拡張していたのを更に第一トレンチの東に向けて延長するトレンチを作った。
ますますひどくなる雨の中を杉崎は久野氏の援助のもとに平板測量をやりとげる。
砂丘が水をふくんで軟弱となり,断面図の測図をする芳賀氏はずぶぬれになりながら,仕事を進めるがトレンチの壁は測図の進度に容赦なく,しきりに異様なひびきを立てて足元に崩れて,落砂に膝をとられるなど悲壮な状況を展開しながら―まず発掘作業の終止符を打った。

（杉崎章『柳ケ坪貝塚』愛知県知多郡横須賀中学校,1953 年,６～９頁。下線部は筆者。）

この柳が坪貝塚の調査日誌からは,発掘調査の目的が,東海地方における弥生時代後期の欠山式土器（東海地方西部の弥生時代後期後半の土器形式）より古い,長床式土器（三河地方における弥生中期後半の土器形式）や,貝田町式土器（尾張地方における弥生時代中期中頃の土器形式）という遺物を求めたものであったことがわかる。これまで明らかになっていなかった知多半島の弥生時代中期という歴史の谷間をうめる郷土資料を求めていたのである。

この調査を通じて,「柳ヶ坪式土器」が発見され,尾張地方における弥生時代中期の指標土器として位置づけられたことは,特筆すべき出来事あった。また,報告書では,杉崎によって,知多半島の弥生時代に関して,「寄道期をへて,それに次ぐ時期になると,阿久比谷のようなデルタ地帯や,各所に成長した海岸砂丘の後背湿地に水田農耕が普辺化されてきたものがあり,柳ヶ坪の土器をメルマークとして,半島一帯に篠島・日間賀島など,南方の海岸よりの文化をうけいれた文化圏が成立していたことを認めるのである」[26]というように,古代の知多半島における交流史について考察がなされている。このような知多半島における古代の交流史についての認識は,郷土クラブ員たちにも共有されていたと考えられる。

また,発掘調査が,民間の考古学研究者との協力・共同のもとで行われていたことも特徴的である[27]。杉崎は,発掘調査を通じて,「私たちにとっては数片の弥生式土器をもととして,その時代の地形を復元し,祖先の生活を考察していくということは,始めての体験であり,学問とはこれなんだと科学の世界へすいこまれるような魅力を感じた」[28]と述べる。杉崎は,郷土クラブの生徒たちとともに,民間の考古学研究者との協力・共同のもとで,「考古学研究」を通じた「科学の世界」を体感し,その魅力を共有していったと考えられる。

そして,杉崎実践において特徴的な点は,発掘調査の作業の後に,郷土クラブの生徒たち

に対して,その日の調査を通して考えたことを書く生活綴方に取り組ませていたことがある。資料 19 は,その一部を示したものである。

資料 19　柳ケ坪貝塚の発掘調査の中の生徒たちによる生活綴方

―貝塚の調査といっても,家でイモを掘る時のように掘っていけば,簡単にやれると思っていたが,掘っても掘っても砂である。その中にまじって土器がでる。名古屋の先生は「砂の色の変化や,粒の大いさまで見抜いて下さい。」といわれた。

（石浜　正一・中学３年）

―トランシットや平板をかりに行ったら,「穴掘りをやるのに,こんな道具を使うのか」と笑いながら出してくれた。僕は説明するのに困ってしまった。

（春田・学年不明）

―貝塚は砂畑であるので,地面がしめってくると砂崩れがある。砂が崩れては土器を層により区別できないので作業の中止もできない。雨はますますひどくなって来た。僕たちは皆,上へあがってしまった。先生たちはずぶぬれになりながらやりつづけられ,下の方から弥生式の古い層・新しい層・奈良時代・鎌倉時代と重なっている。この砂の上に先祖は生活していたのだ。

（山下　登・中学３年）

－教室に一杯,土器をひろげて包み毎に数をかぞえるのです。僕の区域の上層は無紋の土器片が千八十七と有紋が五十六であった。

（白羽・学年不明）

―日本史の時間に原始社会の勉強をしても,今まではよその国のことのように考えていたが,柳ヶ坪を調べてからは,僕らの祖先の生活だということがわかり,何度も土器の写真のでているページを見かえしている。本を開くたびにすぐ見る。

（久野　寛・中学２年）

（杉崎章「知多半島における郷土教育の実践」愛知県教育委員会編『教育愛知』第 11 号,1954 年 11 月,31～32 頁。杉崎章「考古学と郷土教育　実践例Ⅱ　中学校の部」和島誠一編『日本考古学講座　第１巻』河出書房,1955 年,270 頁。）

これの生活綴方からは,生徒たちが発掘調査を通じて,郷土の歴史を学ぼうとする意欲をもっていることが感じられる。杉崎は,これらの生活綴方に対して,「石浜の記録では学問の研究における真剣な態度が印象づけられ,春田や白羽は科学的な研究法を素直にうけ入れ,山下もその体験から具体的に祖先の歴史を知って,苦しい仕事の中で文化財の重要性を買う人し,二千年も前より開拓されて来た郷土に対する正しい愛情を抱くにいたった」[29]と述べている。そうした生徒たちの姿が現れた背景には,杉崎が,次のようなねらいをもって,発掘調査の中での生活綴方に取り組んでいたことがあったと考えられる。

> 教師や生徒が遺跡や遺物の調査をすすめていくその過程の中で,自然をつかみ社会を理解していく態度をうちたてたいと考えておるのであり,そこには遺跡を研究して歴史や考古学の専門家になるということは問題でなく,ただ郷土の共通経験の場にたって物をあつかう学問としての方法論にまなぶことから,主体的な生活の姿勢を確立していきたいと求めているのである。[30]

このように杉崎は,生徒による遺跡や遺物の調査を進めていくその過程の中で,生徒の

「主体的な生活の姿勢を確立したい」と述べる。それは,発掘調査の中での生活綴方といった教育方法を通じて,「郷土」の具体物に触れることにより可能となっていた。

（２） 社山古窯址の発掘調査と生活綴方

次に,郷土クラブは,町史編纂事業の一環として,1954～55 年の間に計三回,横須賀町内の社山古窯址の発掘調査[31]を行っている。この発掘調査自体,中世古窯址が発掘調査の対象として認識されることが少なかった頃における学術的にも貴重な取り組みであったといえる。

この発掘調査に至るまでの経緯は,当時中学２年生の郷土クラブ員であった早川鉄也の次のような報告に基づいている。

資料 20　社山古窯址の調査経緯

―終戦後の食糧難のころに,山の奥にひらかれた畑へいく道を作る時,幸か不幸か,一部が古窯にかかったらしく,道の下に瓦の破片が散っている。後になって僕は,ここを掘ってみたが窯らしきものはなかった。でもこんなにたくさんの瓦を見つけながら,問題にもしなかったころのことが残念でたまらない。そうした有様であった社山の古窯に,私がどうして関心をもってきたか,その動機は例の柳ヶ坪貝塚の調査である。地下に埋まっていて,今まで目もくれなかった土器の破片が,郷土の歴史をとくのに,そのカギとなることを知った。私の家でも,たまたまその話がもちあがり,瓦のかけらなら家の裏山にもあるという話がでた。もしやと思った私は,一応そのあたりを調べてみたが,雑草におおわれた山の中で,何もつかむことはできなかった。けれどもその後のクラブの話では,どうしてもだまっておれなかった。友だちの久野寛君や春田修生君に協力をもとめ,再調査の結果,数個の瓦を発見しクラブへ報告した―

（早川 鉄也・卒業生）

―瓦の破片は早川君の家の裏山一帯に散っていた。早川君に地名をきいて,社山古窯址と名づけることにきめた。土地の人は古窯からでてくる山坏や鉢などのことを,藤四郎焼きといっているので,先生もお百姓さんにあうと藤四郎はありませんか,といってきいてみた。この日の反省として一番強く話し合ったのは,遺跡の保存の問題である。早川君のお母さんも,以前はもっとたくさんあったといわれた。谷一つ東の丘陵にも多くの古窯が分布しているのを知り,日を改めてまたでかけたが,この丘陵は砂防・植林の工事中で,大部分がこわされていた。今なら分布の様子はわかるが,一日おくれればそれだけ,遺跡が失われていく。

（秋田 昇・中学三年）

（杉崎章「考古学と郷土教育 実践例Ⅱ 中学校の部」和島誠一編『日本考古学講座』第１巻,河出書房,1955 年,276～277 頁。）

このように,社山古窯址の発掘調査は,生徒によって調査の計画が推進・実行されたことが特徴としてあげられる。生徒たちは,遺跡の破壊を食い止めるべく,発掘調査を計画,実行したのである。

資料 21 には,社山古窯址の発掘調査における郷土クラブの活動の様子が分かる部分について,調査日誌より引用した。

資料 21　社山古窯址の調査日誌

第１次調査（昭和 29 年）

1954 年３月 15 日　晴

中学校の方へきていただいた久永先生・役場の久田さんとともに社山へ到着したのはもう十時をすぎていた。現地にはすでに役場の岡戸さんをはじめ町史の委員の方々,常滑古窯調査会・報道機関・その他の研究者があつまってみえて,山は大にぎわいである。楢崎先生・田中先生も相ついで到着され,早速活動を開始した。

まず全体の資料を数量的につかんでいきたいと考え,周辺の草刈りをする班と併行して,表面にちっている瓦や山坏などの遺物を種類別に採集する仕事にとりかかった。林道にかかっている地点と２地点の破壊坑よりの観察から,一応３基からできている古窯群と仮定し,西の方からＡ・Ｂ・Ｃの窯と名付けることにした。調査はそれらのうち,もっとも破壊のはげしいＡの窯・Ｂの窯の２基を予定し,Ｃの窯は遺跡として保存することにした。

午後になり,楢崎先生の指導により卒業生の早川鉄也,生徒では大森・森岡が手つだってトランシットでの地形測量をはじめるとともに,まずＡの窯から発掘にとりかかった。――破壊されている所から斜面にそってトレンチを掘り,窯にあたったらそれをひろげていこうとする作戦である。少し掘っていくと層のかわっている所へ達した。それは昔の地肌で笹の葉のくさったのがたくさんみられた。これからが本物だと意気ごんでかかったが,何度,目をみはらしても思うような瓦はでてこない。（高橋　良祐）――でも破壊坑からみるともうすぐ遺層である。明日からは遺物層をおって横にひろげることにする。指導にきていただいた３人の先生の宿舎には,加木屋小学校の一室を借用する。

３月 26 日　晴

測量係は今日も楢崎先生の指導で地形測量をつづける。発掘の方は第一日にひきつづいて,Ａの窯の床面をあきらかにしていくこととして,Ａ区で窯のあり方が大体了解できたので,予定したＢの窯の調査をはじめることであった。

――Ａの窯では山杯がほとんどであり,瓦は丸瓦が少しでた程度であった。それでも一番上の方から巴文の軒丸瓦がでた時は,皆が歓声をあげてみにいった。でてくる状態を写真にとるので,移植ゴテをうごかす竹内君も真剣である。僕は鬼瓦の鼻を掘りだした。普通の瓦にしては変であるので,先生にみせたら鼻の穴だと大わらいされた。そういえば下に歯がある。（伊藤　高光）―今日からはじめたＢの窯では,下村時・下村啓・永島・永井・及川ら八人して分担したが,―私たちの班は八人で,窯の上の方に四人,中間に二人,下に二人である。上のものが掘りかえした土を下へながすと,下の方では遺物をみながら道の下段へほうりこむのだが,両の窯に一日おくれているので表土の土取りも大変である。Ａ区からはめずらしいものがでるらしく,歓声が聞こえるがこちらは意気があがらない。それでもやがて遺物層となり,窯のたき口近くでは炭がみつけられ,中央よりは軒平瓦のほとんど完全なのがでてきた。文様は唐草であるが菊の葉のようである。（下村　時康）

最初の遺物層がなくなると,赤く焼けた層があり,その下にまた新しい遺物層があらわれた。この日もおわり近くなってから,窯の中央で平瓦がかさなりあって姿をあらわしてきた。どれもが文様のないものばかりであるが,すこしもかけていない完全な平瓦である。つづいて３枚また２枚とでてくる。平瓦と平瓦の間には小さい平瓦の破片がはさんである。先生方は天然色写真の準備をしてみえる。

（永島　朋泰）――

発掘は毎日できるだけ早くきりあげて,その日その日の検討をしているのだが,今日の討議は問題が多かった。養父で瓦の製造をしてみえる早川益一郎氏は前に遺跡の下の谷で,瓦をつくる粘土をとったことがあるといわれ,この土地の粘土は比較的に高熱に対して弱い質である点や,粘土にもそれぞれ個性があり,それが長所とも短所ともなっておって,現代の瓦を焼く時には,あらゆる気候の変化にもたえられるように,各種の粘土を配合していることなど,その職業の方でなければわからない苦心を説明して下さった。さらに榊原隆近氏は前に採集してみえる資料の中から杏葉唐草の軒平瓦を持参していただいた。

３月 27 日　晴

第３日である。昨日発掘をみにこられた久野九兵衛・加古新平両氏の案内により先生方は谷のむこうの古窯群の視察にでかけられる。むこうの論田古窯でも社山古窯と同じ文様の瓦を採集でき,窯の構造・遺物の相異などについても,これからの研究をすすめる上に参考になる資料をうることができた。中学の早川巌先生がみえてさかんに天然色の写真をとってみえる。――むこうの山からかえってみえた先生は,まっ先きに僕にむかって「君が昨日こなかったから,仕事がはかどらなかったよ」といわれた。やはり力仕事は僕でないとできないらしい。

青空は雲一つなく,澄みきった春の空
郷土の知識,僕はまだ何もしらない。
澄みきった頭に,社山で
うんと,知識をつめこんでかえろう。

午後は中央より少し下で,何かコツツというので,苦心して全体の姿をあらわすと蓮花文の軒丸瓦である。（下山　敬三）――Ａ区ではほぼ中央の線で断面をつくり,西半分は端まで調整した。長さは約１３メートル,中央はややふくらみをもち上下両端はしぼられていて窯の規模の全体がわかってきた。Ｂ区では前日の平瓦の出土状況を明らかにしていったが,林道とのさかい目から合わせれば完全になる巴文の軒丸瓦が四つにわれてでてきた。Ａ区の巴文と巻き方が反対である。

午後は先生方が床面の実測図をつくってみえるので,私たちは出土遺物の集計をおこなった。表面採集・Ａ区・Ｂ区と地区別にわけて,さらにそれらを種類別にしていくのである。丸瓦は筒先・山坏と山皿は底部でかぞえたが,平瓦は外角四個で一個体にする必要があった。町役場での議会にでてみえた町長高津元治氏と町会議長阿知波安兵衛氏が町史編纂委員岡戸さんの案内で視察にこられた。

３月 28 日　曇り

最初は３日で調査をおわる予定であったが,しらべていくと新しい問題がつぎつぎとうまれてきた。そこでもう一度計画をたてなおして,再調査をすることにして,遺跡はしばらく仮保存の手配をした。発掘の成果が大きく報道されているので,遺跡の安全が心配である。
心ない人によって遺跡が掘られねばよいが,残された窯・残した壁…私たちの研究にとってはかけがえのない資料である。

第２次調査（昭和 29 年）

1954 年７月 26 日　晴

今度の調査の目的は,Ｂの窯を上端まで掘りのぼり,その全体をとらえることとして,もう一つはＡ・Ｂ両方の窯の相互関係をしらべることである。

朝から炎天をおして仕事をすすめる。待つ程もなく楢崎先生ついで久永先生も到着されて作業は本格的となってきた。Ｂ区の方では前の調査の床面の下に,さらに一層の遺物層があり,そこから大きな鬼瓦があらわれ,一同歓声をあげてよろこび作業も小休止の状態である。前の調査の時にでている脚部片とうまく接合してほとんど完全となった。

一方のＡ区では東に残した断面の測図をとるために,田中先生とともに壁面を清掃していたが,上端をさらに追求することにより煙出しを確認した。窯がちぢんできた上端に焼台を２個すえてくぎり,煙道はその間をのぼりつめて,いよいよ地上へでる部分は粘度で固めてあった。

第一次調査の時に,宿舎として提供をうけた加木屋小学校は新築工事中のために,今度の調査にあたっては宿舎として町長高津元治氏宅の好意をうけることになった。

７月 27 日　晴

第１日につづいてＡ区東壁の断面測量をとりながらＢ地区の調査をおしすすめたわけである。Ａの窯でもそうであったが,とくにＢ窯では下部に炭が多く,燃焼室と思われる所からはじまった傾斜のゆるい部分と,そこから急角度をなしてのぼっていき煙道におよぶ部分の二つにわけることができるが,遺物は両方のほとんど限界まででてきて,それら全体が焼成場としてつかわれていたようである。注意して観察してみたが,傾斜のかわる附近に施設としてみとめるようなものは何もなかった。

Ａ区の測図がすんだので,一方でＢ区西壁の測図をとるとともに,主力は両方の地区の間に残してあった隔壁を,Ａ区の方から切断してトレンチをいれた。横断面からＡ・Ｂ両方の窯の相互関係をみようとしたのであり,遺物の包含層はだいたい三層にわかれており,最上部の遺物層よりは一本の角をもつ鬼瓦が出土した。
正午すぎ,遠く東三河の北設楽郡より夏目一平・岡田松三郎の両氏が視察にこられる。

７月 28 日　晴
中央の隔壁を切り通して,Ａ・Ｂ両区をつなぐトレンチの仕事を継続した。
断面の最下部で,Ａ・Ｂ両方の窯が約五十糎の間隔をもって床面がくぼんでおり,二つの窯の区別が明らかとなった。そこでＢ・Ｃ両窯の境界,Ａ・Ｂ両窯の床幅をしるために,断面の下をさらに左右へ延長してＡ・Ｂ両区の地山にいたるまで掘りさげてみた。この観察により,東端のＣの窯が未調査であるが,発掘の当初に三基の窯が併列しているということを,仮りに考えたのが妥当であったことが裏付けられた。
しかもなお,中央隔壁の断面を注意深く観察すると,二度目・三度目の焼成を示す遺物包含層に問題を残しているのをしった。Ａ・Ｂ両窯の床がそれらの層序ではたがいに切り合っている点であり,これでは同時の焼成は不可能と考えざるを得ない。この問題についての解明は,この遺跡の調査の焦点の一つでもあり,さらに隔壁を横位に数個所切り通して断面を精密に観察する必要をみとめた。
予定した期日もきており,残っている中央残壁には松の木が数本あるので,仕事の能率も意のごとくすすまず,３度の計画を期して下山することにした。

第３次調査（昭和 30 年）
６月２５日　晴
昨秋以来,第３次調査について何度か計画をもち,資源科学研究所の和島誠一氏には東京からわざわざ足を運んでいただいたりもしたが,そのたびに時期にめぐまれず,結局最終調査は春すぎて六月になっ（ママ）しまった。
今度の仕事は２回の調査に残してある隔壁の取りこわしである。この作業を通じて窯と窯との相互関係の確認と,層位別採集による遺物の変化の検討という二点を課題として期待したのである。
土曜日の午後,学校を出発し現地に到着,とりあえず松の木を切っている間に久永・楢崎・立松・新美・白井の各先生も集っていただいた。しっかりと根をはった株をとりはずすことは仲々の辛苦な仕事である。
窯と窯の相互関係によりよい考察をもつために,Ａ・Ｂ両区をつないだ横断トレンチの上と下で,さらにそれぞれ一地点をえらび,断面を観察することにした。すなわち上部の断面では前回の横断面より三十糎程けずりおろし,下部では林道より約一メートルのぼったところで切り通した。
今日は何とか晴れてくれたが,梅雨の候であるので明日の天気を念じながら下山する。

６月 26 日　曇
現地にはすでに田中・加藤の両先生も到着していて下さって,仕事は急ピッチにすすみだした。
いずれの層位からも,瓦とともに山杯・山皿が併出しており,同一時間に両方ともが焼かれたことを示しているが,各層位の間に遺物の変化はみられず,これらがごく短期間のうちに大量生産されたものと考えられる理由である。
上部の断面を観察しながら,最上部の表土をはいでいくと,二次調査の時にＡ窯の煙出しを確認したときから,いわゆる煙出しのあり方に注目していたことでもあり,昨日も横断面のところどころに黒い炭化物の多い間層がはいっているのに留意していた点であったが,その間層を追っていくと細長い管状になっており煙出しの遺構が姿をあらわしてきた。わずか二メートルの幅にすぎない隔壁の間に八基の煙出しを確認することができた。煙出しの構造はきわめて多岐であり,粘度で固めてあるもの,焼台の凹部を利用しているもの,山杯・山皿の丸みを応用したもの,一基毎に同じものはなく変化にとんだ趣向である。　中央より下の部分からは,数多くの資料を得ることができたが,従来一片も採集していない種類の唐草文

軒平瓦をとりだした時には一同が歓声をあげた。今まで軒平瓦で一種でるはずでででてこなくて何かわりきれない気がしていたが,これで不満も吹きとんだ。
　夕やみせまるころ予定を完了し遺跡とわかれる。一年半の思いでの遺跡,社山をふりかえりながら山を下った。

（杉崎章「横須賀町の遺跡－社山古窯－」横須賀町史編集委員会編『横須賀町史 別冊』横須賀町,1956 年,10～13 頁。下線部は,中学生の作文。）

この発掘調査日誌からは,郷土クラブの生徒たちが掘削や測量,遺物の観察,記録,接合などの作業を行っていたこともわかる。発掘調査の作業を通じて郷土クラブの生徒たちは,考古学的な研究手法を体得していったと考えられる。また,調査日誌からは,郷土クラブの生徒たちが,社山窯址より出土した鬼瓦や唐草文の軒平瓦に関心を抱いている様子もわかる。後の調査からは,社山古窯の生産主体や瓦の供給先が判明している[32]。このように,調査日誌からは,知多半島における郷土文化の交流史についても,生徒たちが関心を深めた様子もわかる。

また,社山古窯址発掘調査の作業の後にも,杉崎は,郷土クラブの生徒たちに,その日の調査を通して考えたことを書く生活綴方に取り組ませていた。

資料 22　社山古窯発掘調査の中の生活綴方

社山へ行って

―今日は先生が向うの谷を視察に行かれたので,自主的に仕事にかかった。中学の早川先生がみえて,盛んに天然色の写真をとってみえる。久永先生は真先きに,僕に向って君が昨日こなかったから,仕事が仲々はかどらなかったよ,といわれた。矢張り力仕事は僕でないとできないらしい。

青空は雲一つなく澄みきった春の空
郷土の知識,僕はまだ何一つ知らない。
澄みきった頭に,社山で
うんと,知識をつめこんでかえろう。

午後は中央より少し下で,何かコツというので,ていねいに全体の姿をあらわすと,蓮花文の軒丸瓦である。先生は,ＯＫ・ＯＫの連発である。

（下山　敬三・中学３年）

社山のかまあと

山の中腹にある,社山のかまあと
先生もぼく等も目をサラにして
鍬やスコップを動かす
　発掘がすむと,討議がはじまる。
　一日の汗をふきながらみんなが考える
　一体,瓦の布目はどうしてだろう
　山茶わんは何枚くらいつまれているか
　茶わんの間に何がこめてあるのか
　もっと考えて掘ろう
　布目の上にクスリが流れているから
　焼く前の
　粘土のやわらかいうちだと考えるが
　明日はもっと観察しよう

（永島　朋泰・中学２年）

（杉崎章「知多半島における郷土教育の実践」愛知県教育委員会編『教育愛知』第 11 号,1954 年 11 月,32～33 頁。）

資料 22 の生活綴方からは,郷土クラブの生徒たちが,共通の課題をもちながら作業に取り組み,一日の終わりに討議を行っていた様子も知ることができる。これは,杉崎が「歴史・地理・道徳についての既成の概念くだきと,創造的な人間の再生」[33]を意図し,発掘調査の中で作文や詩の指導を組み入れた成果であった。さらに杉崎は,発掘調査を通して生徒による文集の刊行の必要性を主張していた。それは,文集の刊行を通して,「生徒たちの協力を具現化する意味」[34]があるからだという。このことにより,郷土クラブの生徒たちは,発掘調査の中の生活綴方により,書くことを通した人間的成長を可能にしたのだろう。

なお,この実践の評価は, 調査に加わった考古学者・和島誠一が次のように述べている。

> 中学校の郷土クラブが中心となって,一つの地域の遺跡を系統的に取扱い,発掘も行った杉崎氏の実践例では,単に弥生式土器の一形式の内容や古墳や窯址の構造が明らかにされたというだけでなく,例えば浜堤列と集落の問題に切り込んで,「貝塚でない遺跡からは,海岸線の異動を簡単に考えることはできない」と安易な常識論を越える結果に達している。古墳群と集落との関係も系統的に分布調査されたので,壊された横穴式石室を清掃してその石材の問題を取り上げても,組合せ式石棺が角型土製品を出す海浜の集落址に伴う事実を指摘しても,それが地域性の問題として正しく提起されるのである。社山古窯址で近くの寺址の銀杏唐草の瓦が発見されたことも,東大寺瓦を渥美半島で焼くような古代的な形態に対して,中世的な生産形態を示すものとして正しくとらえられている。これらの仕事は専門学者と正しく結びついてすすめられたのであるが,新しい発見と事実の生き生きとした把握が生徒によってなされていることと,郷土の歴史を明らかにする遺跡を大切にする気持が強く出ていることは特徴的である。日本の文化財を守るものは一片の法令ではなく,正に彼らであろう。[35]

この和島の評価のように,郷土クラブの生徒たちは,遺跡や文化財の保存を考えようとする問題意識をもち,社山古窯址の発掘調査に取り組んでいたのである。それは,杉崎による,これまでの郷土クラブでのフィールド・ワークの活動や,発掘調査の中での生活綴方といった取り組みを通して育まれてたものであったといえるだろう。

第５節　本章のまとめ

本章では,1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程に関わる中学校教師による取り組みの事例として,愛知県知多郡横須賀中学校の杉崎章による「新しい郷土教育」実践を取り上げ,検討してきた。本章での検討を通じて,研究の視点を深めた点は,以下の三点がある。

第一に,杉崎における「新しい郷土教育」実践の背景として,郷土クラブを主体として,郷土のフィールド・ワークを行っていたことである。杉崎は,特別教育活動の時間を利用して,郷土クラブを組織し,そして,郷土全協の考え方にもとづいて実践的な学習を重視し,郷土クラブの活動としてフィールド・ワークに取り組んでいた。それは,1950 年代前半における横須賀町の現実的問題の解決をめざした取り組みとしても結びついていた。

また,第二には,杉崎における教材研究の取り組みとして,「考古学研究を活用した教材研究」が行われていたことである。杉崎は,発掘調査の作業を中学校における教育活動として位置づけていた。そして,杉崎は,考古学の方法論に学ぶことの重要性を認め,郷土クラブの生徒たちは,実際の発掘調査の作業に取り組んでいた。そのような発掘調査の作業を通じて郷土クラブの生徒たちは,考古学の研究手法を体得していたのである。

第三に,杉崎が発掘調査の中で,「発掘調査と生活綴方の結合」をさせた取り組みを行っていたことである。杉崎は,発掘調査の中において教育方法として生活綴方的教育方法を活用して,詩や作文の指導を行っていた。杉崎実践では,生徒における「主体的な生活の姿勢の確立」をねらいとして,発掘調査の中の生活綴方に取り組んでいたのである。そのような教育方法の特色は,郷土全協の立場から取り組まれた「新しい郷土教育」実践に共通する特質でもあった。

以上,本章で述べてきたように,1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程に関わる郷土全協の中学校教師の取り組みの特質として,杉崎実践の事例からは,郷土クラブを主体とした「郷土」のフィールド・ワークによって,「考古学研究を活用した教材研究」が行われていたことや,「発掘調査と生活綴方の結合」をさせた取り組みが行われていたことをあげることができる。

なお,これまでの先行研究においては,廣田真紀子が,1950 年代の郷土全協の活動について,「主な活動主体が研究者・学者主催ではなく小学校教師であり,小学校教師自身のための実践交流活動が行われていたこと」[36]について論じていた。しかし,杉崎の実践のように,1950 年代前半において「新しい郷土教育」実践を創造した中学校教師が存在していたことも確認することができた。

また,1950 年代における郷土全協の運動的特質として,板橋孝幸は,「フィールドワークを行いながら『教育内容と教育方法の統一』に取り組もうとしていた」[37]として論じているが,杉崎実践の事例についての検討を通じて,教育実践レベルにおける考察を深めることができたと考えている。

なお,本章では,1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程に焦点を当てたため,杉崎がいなくなった後の横須賀中学校の教育活動がどのように取り組まれていったかについての検討は,行うことはできなかった。そうした点は,今後の研究課題としたい。

表 18　杉崎章による論文・著作リスト

年	年齢	論文名・著作名・出版社・発行年月日
1953 (昭和 28)	31	杉崎章『柳が坪貝塚』愛知県知多郡横須賀中学校, 1953 年 4 月。
1954 (昭和 29)	32	杉崎章「愛知県知多郡上野町三ツ屋一号墳の子持勾玉について」日本考古学会『考古学雑誌』第 42 巻第 3 号, 1954 年 2 月。 杉崎章「知多半島における郷土教育の実践」愛知県教育委員会編『教育愛知』第 11 号, 1954 年 11 月。 杉崎章『社山古窯発掘調査のあらまし』愛知県知多郡横須賀中学校, 1954 年。
1955 (昭和 30)	33	杉崎章「実践例 中学校の部 考古学と郷土教育」和島誠一編『日本考古学講座』第 1 巻, 河出書房, 1955 年。
1956 (昭和 31)	34	杉崎章「愛知県知多郡知多町獅子懸遺跡第 4 地点調査概要」『瓜郷遺跡発掘調査会編『野帳』第 1 期第 1 冊, 1956 年 2 月 杉崎章「知多半島における古代漁村集落の土器」『古代学研究』第 15・16 号, 1956 年 11 月。 杉崎章「横須賀町の遺跡－社山古窯－」横須賀町史編集委員会編『横須賀町史 別冊』横須賀町, 1956 年。 杉崎章『町史資料 八幡のむらのおいたち』八幡町史編纂会, 1956 年。
1957 (昭和 32)	35	杉崎章・伊藤芳彦「黒鍬・玉葱・愛知用水―知多半島における一農村のあゆみ」『歴史地理教育』第 30 号, 1957 年 10 月。 杉崎章『佐治氏の記録－尾張横須賀町大田－』佐治氏同族会, 1957 年。
1958 (昭和 33)	36	杉崎章「歴史教育における考古学の役割」『私たちの考古学』第 18 号, 1958 年 杉崎章「考古学と郷土教育（懇談）」瓜郷遺跡発掘調査会編『野帳』第 2 期第 3 冊, 1958 年 7 月。
1960 (昭和 35)	38	清田治・芳賀陽・杉崎章「知多・渥美半島における古代海浜集落」『考古学研究』第 27 号, 磯部幸男・井関弘太郎・杉崎章『咲畑貝塚』師崎中学校, 1960 年 1 月。 杉崎章『町史資料 巽が丘古窯址』八幡公民館郷土史編纂部, 1960 年。
1961 (昭和 36)	39	杉崎章「東海地方における古代海浜集落とその墳墓」『日本考古学協会発表要旨』1961 年。 杉崎章「日本考古学協会第 27 回総会ニュース」瓜郷遺跡発掘調査会編『野帳』通巻第 8 冊, 1961 年 2 月。 杉崎章「愛知県知多郡東浦町石浜貝塚調査報告」瓜郷遺跡発掘調査会編『野帳』通巻第 9 冊, 1961 年 12 月。 杉崎章『町史資料 西屋敷貝塚』八幡町史編纂会, 1961 年。
1962 (昭和 37)	40	杉崎章「尾張国日間賀島下海古窯址の調査」『日本考古学協会発表要旨』1962 年。 杉崎章・広瀬栄一・久永春男『愛知県知多郡知多町佐布里加世端第 4 号窯』白菊古文化研究所, 1963 年 7 月。 常滑市教育委員会編『石瀬貝塚』常滑市教育委員会, 1962 年。
1963 (昭和 38)	41	杉崎章『加世端第四号窯』白菊古文化研究所, 1963 年。 瀬戸市教育委員会編『瀬戸市第六遺跡』瀬戸市教育委員会, 1963 年。
1964 (昭和 39)	42	杉崎章「尾張国知多郡横須賀町権現山古窯址の調査」『日本考古学協会発表要旨』1964 年。 八幡公民館編『梶廻間古窯』知多町教育委員会, 1964 年。
1965 (昭和 40)	43	杉崎章「尾張知多万才」愛知県教育委員会編『教育愛知』第 12 巻第 10 号, 1965 年 1 月。 杉崎章「三河国篤見皿山古窯址調査概要」『陶説』第 143 号, 1965 年 2 月。

		磯部幸男・杉崎章・久永春男「愛知県知多半島南端における縄文文化早期末～前期初頭の遺跡群」『古代学研究』41 合併号, 1965 年 9 月。 杉崎章『愛知県知多郡横須賀町 権現山古窯址』白菊古文化研究所, 1965 年 12 月。 愛知県教育委員会編『東禅寺第一・第二号墳（東名高速道路埋蔵文化財調査）』愛知県教育委員会, 1965 年。 渥美町教育委員会編『皿山古窯址（豊川用水関係遺跡調査報告）』愛知県教育委員会, 1965 年。 春日井市教育委員会編『高蔵寺ニュータウン遺跡調査（春日井市文化文化財第一集）』春日井教育委員会, 1965 年。
1966 (昭和 41)	44	宮川芳照・磯部幸男・杉崎章「尾張国日間賀島北地古墳群の調査概要」『古代学研究』42・43 合併号, 1966 年 3 月。 杉崎章「愛知県知多郡知多町大知山旭大池古窯址群」『日本考古学協会発表要旨』1966 年。 瀬戸市教育委員会編『瀬戸市の古窯第 1 集－平安期－』瀬戸市教育委員会, 1966 年。
1967 (昭和 42)	45	杉崎章『愛知県半田市椎之木古窯址群』『日本考古学協会発表要旨』1967 年。 春日井市教育委員会編『潮見坂古窯址群調査（春日井市文化財第 2 集)』春日井市教育委員会, 1967 年。 愛知県教育委員会編『東大寺瓦場古窯址群（渥美半島埋蔵文化財調査)』愛知県教育委員会, 1966 年。
1968 (昭和 43)	46	杉崎章「西の宮貝塚」『半田市誌 資料編 1 』愛知県半田市, 1968 年。 杉崎章『三河湾・伊勢湾漁撈習俗緊急調査 1 （漁撈具)』愛知県教育委員会, 1968 年。 杉崎章編集『原をかたる』土井佐一, 1968 年。 高木志朗・宮川芳照・杉崎章『上野古墳郡』犬山市教育委員会, 1968 年。 愛知県教育委員会編『知多半島道路県道半田・南知多公園線遺跡報告』愛知県教育委員会, 1968 年。
1969 (昭和 44)	47	杉崎章「半田市内の知多窯」『半田市誌 資料編 2 』愛知県半田市, 1969 年。 杉崎章「原始・古代・中世－素稿－」横須賀町史編集委員会編『横須賀町史 本文編』横須賀町, 1969 年。 杉崎章『三河湾・伊勢湾漁撈習俗緊急調査 2 （漁撈具)』愛知県教育委員会, 1969 年。 杉崎章『知多町民俗誌－沿岸漁撈・知多木綿－』知多町教育委員会, 1969 年。 愛知県教育委員会編『知多半島道路埋蔵文化財調査報告』愛知県教育委員会, 1969 年。 瀬戸市教育委員会編『瀬戸市の古窯第二集－八幡古窯－』瀬戸市教育委員会, 1969 年。
1970 (昭和 45)	48	杉崎章『常滑の窯』学生社, 1970 年。 杉崎章編集・主著『近世出かせぎの郷』知多町教育委員会, 1970 年。 杉崎章編『愛知県知多郡知多町大知山・旭大池古窯址』東海古文化研究会, 1970 年。 瀬戸市教育委員会編『菱野団地古窯址群』瀬戸市教育委員会, 1970 年。 春日井市教育委員会編『潮見坂第 4 号窯（春日井市文化財第 3 集)』春日井市教育委員会, 1970 年。
1971 (昭和 46)	49	杉崎章「伊勢湾・三河湾の漁労具」日本常民文化研究所編『常民文化叢書・民具論集 3 』, 慶友社, 1971 年。 杉崎章「原始・古代・中世」『半田市誌 本文編』愛知県半田市, 1971 年。 杉崎章「考古資料」『尾張旭市誌』尾張旭市, 1971 年。 杉崎章『毘沙クゼ古窯址群』常滑市教育委員会, 1971 年。

		東海市教育委員会編『柳が坪遺跡』東海市教育委員会,1971 年。
1972 (昭和 47)	50	杉崎章「知多・渥美半島の土器製塩」『日本考古学協会発表要旨』1972 年。 杉崎章「東海地方における古代海浜集落の文化」愛知学芸大学歴史学会『歴史研究』第 10 号,1972 年。 杉崎章「妙意寺大般若経」『半田市誌 資料編３』愛知県半田市,1972 年。 杉崎章『奥田製塩遺跡』美浜町教育委員会,1972 年。
1973 (昭和 48)	51	杉崎章「考古」『春日井市誌』春日井市,1973 年。 杉崎章『上野５号墳』愛知県犬山市教育委員会,1973 年。 杉崎章『知多古窯址群（日本古代遺跡便覧)』社会思想社,1973 年。 杉崎章『三郎谷西古窯址群』常滑市教育委員会,1973 年。 常滑市教育委員会編『柴山古窯址群』常滑市教育委員会,1973 年。 武豊町教育委員会編『自然公園第１号窯』武豊町教育委員会,1973 年。 東海市教育委員会編『かぶと山遺跡－第一次調査－』東海市教育委員会,1973 年。
1974 (昭和 49)	52	杉崎章「知多古窯製品の流通販路と用途」財団法人徳川黎明会『徳川林生史研究所研究紀要―昭 48― 』1974 年 3 月。 杉崎章「知多半島における先史時代の地形変遷と土地利用」愛知学芸大学歴史学会『歴史研究』第 7 号,1974 年。 杉崎章「常滑窯業誌」『常滑市誌 別巻』常滑市,1974 年。 杉崎章『美浜町民俗誌１（藁細工－製品と道具－)』美浜町教育委員会,1974 年。 杉崎章「愛知県犬山市白山平東之宮古墳の調査」『日本考古学協会発表要旨』1974 年。 東海市教育委員会編『カブト山遺跡－第２次調査－』東海市教育委員会,1974 年。 愛知県教育委員会編『内海鈴が谷古窯址群』愛知県教育委員会,1974 年。
1975 (昭和 50)	53	杉崎章『大廻間遺跡』知多市教育委員会,1975 年。 杉崎章『美浜町民俗誌２（野間の千石船)』美浜町教育委員会,1975 年。 杉崎章『窯業民俗資料調査報告２・常滑市（生産関係)』愛知県教育委員会,1975 年。 杉崎章『民具マンスリー（常滑焼の大カメ生産)』７巻 12 号,常民文化研究所,1975 年。 大府市教育委員会編『野々宮古窯発掘調査報告』大府市教育委員会,1975 年。
1976 (昭和 51)	54	杉崎章「原始・古代・中世」『常滑市誌 本文編』常滑市,1976 年。 杉崎章『知多市のおいたち』知多青年会議所 JC デー特別委員会,1976 年９月。 杉崎章編集『森岡のあゆみ』久野幸作,1976 年。 小牧市教育委員会編『桃花台ニュータウン遺跡調査報告』小牧市教育委員会,1976 年。 南知多町教育委員会編『清水ノ上貝塚』南知多町教育委員会,1976 年。 武豊町教育委員会編『二ツ峯古窯址群』武豊町教育委員会,1976 年。
1977 (昭和 52)	55	杉崎章「食酢醸造」『半田市誌 文化財編』愛知県半田市,1977 年。 杉崎章「常滑窯業誌」『常滑市誌 別巻』常滑市,1977 年。 杉崎章編集『脚下照顧』岩田先生退官記念館公開,1977 年。 東海市教育委員会編『松崎貝塚』東海市教育委員会,1977 年。 美浜町教育委員会編『下高田遺跡』美浜町教育委員会,1977 年。 南知多町教育委員会編『日間賀島の古墳』南知多町教育委員会,1977 年。
1978 (昭和 53)	56	杉崎章「近世村絵図総説」『知多市誌 資料編１』知多市,1978 年。 新巽が丘団地遺跡調査団編『福住古窯址群』新巽が丘団地遺跡調査団,1978 年。

		常滑市教育委員会編『ニノ田古窯址群』常滑市教育委員会,1978 年。
1979 (昭和 54)	57	杉崎章「近世村絵図総説」『武豊町誌 資料編１』武豊町,1979 年。 杉崎章『法海寺遺跡』知多市教育委員会,1979 年。 南知多町教育委員会編『日間賀島の古墳』南知多町教育委員会,1979 年。 小原池古窯群調査団編『小原池古窯群』小原池古窯群調査団,1979 年。 常滑市教育委員会編『金色東古窯址群』常滑市教育委員会,1979 年。
1980 (昭和 55)	58	杉崎章「知多の浦の海浜集落」『古代学研究』第 94 号,1980 年 10 月。 杉崎章「尾張・三河の古代海浜集落」愛知県教育委員会編『教育愛知』第 28 巻第 9 号,1980 年 12 月。 杉崎章「近世村絵図総説」『美浜町誌 資料編１』美浜町,1980 年。 常滑市教育委員会編『清水山古窯址群』常滑市教育委員会,1980 年。 南知多町教育委員会編『先苅貝塚』南知多町教育委員会,1980 年。
1981 (昭和 56)	59	杉崎章「中世・民俗」『知多市誌 本文編』知多市,1981 年。 杉崎章『日間賀島古墳群（探訪日本の古墳）』有斐閣,1981 年。 杉崎章総括・編集『知多半島の民具』知多社会科研究会,1981 年。 常滑市教育委員会編『松渕古窯址群』常滑市教育委員会,1981 年。 常滑市教育委員会編『高坂古窯址群』常滑市教育委員会,1981 年。
1982 (昭和 57)	60	杉崎章『細見遺跡』知多市教育委員会,1982 年。 杉崎章『常滑市・知多市・東海市の歴史（愛知―上巻―）』講談社,1982 年。 杉崎章『民具マンスリー（大野鍛治）』15 巻２号,常民文化研究所,1982 年。 杉崎章『中部地方の民具（常滑焼の大がめ）』明玄書房,1982 年。 知多古文化研究会編『三郎谷第１号窯調査報告』常滑市,1982 年。 東海市教育委員会編『中ノ池遺跡群』東海市教育委員会,1982 年。
1983 (昭和 58)	61	杉崎章「民俗行事」『半田市誌 祭礼民俗編』愛知県半田市,1983 年。 杉崎章「考古・民族・祭礼棟札」『常滑市誌 文化財編』常滑市,1983 年。 杉崎章「有形文化財」『知多市誌 資料編２』知多市,1983 年。 杉崎章「古地名」『知多市誌 資料編３』知多市,1983 年。 杉崎章「中世・民俗」『武豊町誌 本文編』武豊町,1983 年。 杉崎章「中世・民俗」『美浜町誌 本文編』美浜町,1983 年。 杉崎章編集『原山教育への道』杉崎先生退官記念会,1983 年。 杉崎章総括・編集『知多市地名考』知多市教育委員会,1983 年。 常滑市教育委員会編『濁池古窯址群調査報告』常滑市教育委員会,1973 年。 常滑市教育委員会編『出発田古窯址群調査報告』常滑市教育委員会,1973 年。 東海市教育委員会編『法秀古窯』東海市教育委員会,1973 年。
1984 (昭和 59)	62	杉崎章「知多古窯の終末と常滑窯の出現」『常滑市民俗資料館研究紀要』1984 年。 杉崎章「民俗」『武豊町誌 資料編２』武豊町,1979 年。 杉崎章『知多の浦の海浜集落（万葉集の考古学）』筑摩書房,1984 年。 杉崎章総括・編集『常滑市域の神社棟札調査』常滑市教育委員会,1984 年。 知多市教育委員会編『細見遺跡－第二次調査報告－』知多市教育委員会,1984 年。 東海市教育委員会編『松崎貝塚－第二次発掘調査－』東海市教育委員会,1984 年。 武豊町教育委員会編『山崎古墳』武豊町教育委員会,1984 年。
1985 (昭和 60)	63	杉崎章「民俗」『美浜町誌 資料編２』美浜町,1985 年。
1988 (昭和 63)	66	杉崎章・村田正雄『常滑窯』名著出版,1988 年。

1989 （平成元）	67	杉崎章・石川玉紀監修『西知多いまむかし』名古屋郷土出版会, 1989 年。
1995 （平成７）	73	６月 19 日逝去。

（「杉崎章年譜」『知多古文化研究１－杉崎章先生退官記念論文集』ぎょうせい, 1984 年, 184～187 頁を参考にして筆者作成。※ 共著・短報・編集についても掲載した。）

[1] 廣田真紀子「郷土教育全国協議会の歴史―生成期 1950 年代の活動の特徴とその要因―」東京都立大学『教育科学研究』第 18 号, 2001 年, 33 頁。

[2] 相川日出雄による小学校における「新しい郷土教育」実践の特質については, 拙稿「相川日出雄による郷土史中心の小学校社会科授業づくり―『新しい地歴教育』実践の創造過程における農村青年教師としての経験と意味―」(全国社会科教育学会『社会科研究』第 79 号, 2013 年) を参照。

[3] 1950 年代後半における渋谷忠男による「郷土」をふまえる教育実践については, 渋谷忠男『郷土に学ぶ社会科』(国土社, 1958 年) にまとめられている。なお, 渋谷実践については, 臼井嘉一・板橋孝幸編『渋谷忠男教育実践資料集 (第 1 集) 』 (「2007-2009 年度科学研究費［基盤研究(B)］戦後日本における教育実践の展開過程に関する総合的調査研究」＜研究代表 臼井嘉一＞研究成果報告書第 1 集, 2008 年) を参照。

[4] 前掲, 廣田真紀子「郷土教育全国協議会の歴史―生成期 1950 年代の活動の特徴とその要因―」, 34 頁。

[5] 臼井嘉一「戦後日本の教育実践の全体像を捉える視点」臼井嘉一監修『戦後日本の教育実践―戦後教育史像の再構築をめざして―』三恵社, 2013 年, 2 頁。

[6] 杉崎章による「新しい郷土教育」実践は, 「知多半島における郷土教育の実践」 (愛知県教育委員会編『教育愛知』第 11 号, 1954 年 11 月) や, 「考古学と郷土教育 実践例Ⅱ 中学校の部」 (和島誠一編『日本考古学講座 第 1 巻』河出書房, 1955 年) において報告されている。なお, 「考古学と郷土教育」について論及している先行研究は, 以下のものがある。西川宏「学校教育と考古学」『岩波講座 日本考古学 7 ―現代と考古学』(岩波書店, 1986 年)。山下勝年「敷波の寄せる半島 1 」知多古文化研究会編『知多古文化研究 9 』 (知多古文化研究会, 1995 年)。斎藤嘉彦「歴史教育 (郷土教育) のあり方を求めて－杉崎章さんの教育実践から学んだこと－」知多古文化研究会編『知多古文化研究 10』(知多古文化研究会, 1996 年)。大橋勤「郷土史学習」『愛知県における考古学の発達』(親和プリント, 2005 年)。白井克尚「中学校における歴史研究と歴史学習の協働に関する史的考察―愛知県横須賀中学校『郷土クラブ』の実践の分析を通して―」 (愛知教育大学歴史学会『歴史研究』第 57 号, 2011 年) 。しかし, 中学校における「新しい郷土教育」実践としての位置づけのもとに, 論じているわけではない。

[7] 前掲, 西川宏「学校教育と考古学」, 186 頁。

[8] 郷土全協事務局『戦後郷土教育の歩み』郷土全協事務局, 1966 年, 1 頁。

[9] 村田徹也『戦後愛知の民間教育研究運動の歩み』風媒社, 2006 年, 32～51 頁。

[10] 香村克己『戦後愛知の教育運動史－地域から綴る運動と教師群像－』風媒社, 2006 年, 81～84 頁。

[11] 前掲, 西川宏「学校教育と考古学」, 187 頁。

[12] 大橋勤『愛知県における考古学の発達』親和プリント, 2005 年, 26～31 頁。

[13] 杉崎章『常滑の窯』学生社, 1970 年, 10 頁。

[14] 「序」文中の杉崎の発言より (愛知県知多郡横須賀町立横須賀中学校長・阪野弥生著, 白菊文化研究所『権現山古窯址』白菊文化研究所 第二集, 1965 年。)

[15] 杉崎章『常滑の窯』学生社, 1970 年, 10 頁。

[16] 同前,11 頁。なお杉崎は,この大会への参加が機縁となり,当時の郷土全協の会長であった周郷博より,「考古学と郷土教育 実践例Ⅱ 中学校の部」の原稿指導を受けることになったという。

[17] 杉崎章「知多半島における郷土教育の実践」愛知県教育委員会編『教育愛知』第 11 号,1954 年 11 月,29～33 頁。

[18] 杉崎章「考古学と郷土教育(懇談)」瓜郷遺跡発掘調査会編『野帳』第二期第三冊,1958 年 7 月,24 頁。

[19] 元横須賀中学校郷土クラブ員・北川元志郎氏からのインタビュー記録より(2013 年２月 23 日に,知多市歴史民俗博物館において聴取した)。

[20] 杉崎章「考古学と郷土教育 実践例Ⅱ 中学校の部」和島誠一編『日本考古学講座 第 1 巻』河出書房,1955 年,268 頁。

[21] 佐藤伸雄『戦後歴史教育論』青木書店,1976 年,75 頁。

[22] 前掲,西川宏「学校教育と考古学」,188 頁。

[23] 磯田一雄「学習指導要領の内容的検討(２)」肥田野直・稲垣忠彦編『教育課程(総論)〈戦後日本の教育改革 第６巻＞』東京大学出版会,1971 年,459 頁

[24] 横須賀町史編集委員会編『横須賀町史』横須賀町,1969 年,767 頁。

[25] 1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践が,「郷土」の現実的問題の解決をめざすための学習をめざしていたということは,相川日出雄実践にも通じる点であった。相川実践の小学校における歴史授業構成の特質については,小原友行が詳細な分析を通して明らかにしている(小原友行「小学校における歴史授業構成について―相川日出雄『新しい地歴教育』の場合―」広島史学研究会『史学研究』第 137 号,1977 年)。

[26] 杉崎章『柳ケ坪貝塚』横須賀中学校,1953 年,30 頁。

[27] 久永春男は,愛知県蒲郡市在住の在野の考古学研究者であり,月の輪古墳発掘運動にも関わった人物であった。池上年は,愛知県在住の考古学協会会員であり,田中稔は,職場において考古学サークルを結成し,継続的に考古学研究を行っていた人物であった。

[28] 前掲,杉崎章「考古学と郷土教育 実践例Ⅱ 中学校の部」 269～270 頁。

[29] 前掲, 杉崎章「知多半島における郷土教育の実践」,32 頁。

[30] 杉崎章「考古学と郷土教育(懇談)」瓜郷遺跡発掘調査会編『野帳』第二期第三冊,1958 年 7 月,22 頁。

[31] 杉崎章「横須賀町の遺跡－社山古窯－」横須賀町史編集委員会編『横須賀町史 別冊』横須賀町,1956 年, 9 ～13 頁。

[32] 杉崎章「知多半島における先史時代の地形変遷と土地利用」愛知学芸大学歴史学会『歴史研究』第 7 号,1974 年,339 頁。

[33] 杉崎章「歴史教育における考古学の役割」『私たちの考古学』第 18 号,1958 年,14 頁。

[34] 前掲,杉崎章「考古学と郷土教育(懇談)」,24 頁。

[35] 和島誠一「考古学と郷土教育 あとがき」和島誠一編『日本考古学講座 第 1 巻』河出書房,1955 年,283～284 頁。。

[36] 前掲,廣田真紀子「郷土教育全国協議会の歴史―生成期 1950 年代の活動の特徴とその要因―」,34 頁。

[37] 板橋孝幸「戦後の郷土教育運動と『地域と教育の会』」,前掲『戦後日本の教育実践―戦後教育史像の再構築をめざして―』,138 頁。

第５章　中村一哉による地域運動と結びついた「新しい郷土教育」実践の成立背景

第１節　本章の課題

第４章での事例検討を通じて,1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程に関わる郷土全協の中学校教師の取り組みの特質について,考察を深めてきた。本章では,岡山県・月の輪古墳発掘運動の中で取り組まれていた岡山県英田郡（現美作市）福本中学校の中村一哉による「新しい郷土教育」実践の事例を取り上げ,その特質について考察することを目的とする。

周知のように,月の輪古墳発掘運動は,1950 年代前半の国民的歴史学運動の一環として,考古学分野において取り組まれたものである。これまで,月の輪古墳発掘運動運動の教育的側面については,主に歴史教育論についての研究[1]を中心に進められてきた。ところで,この岡山県･月の輪古墳の近隣に位置していた福本中学校の教師であった中村が,戦後の郷土教育運動の一環として,「新しい郷土教育」実践に取り組んでいたことはあまり知られていない。

月の輪古墳発掘運動の中の教育実践について論及している先行研究として,小国喜弘による研究をあげることができる。小国は,月の輪古墳発掘運動の中の教育活動に着目し，文集『月の輪教室』の中の教師たちの手記や生徒による生活綴方の分析を通して,「民族の歴史」という歴史認識の枠組みを明らかにしている[2]。しかし,小国の研究では,月の輪古墳発掘運動の中の教育実践の実態について,必ずしも焦点を当てて論じているわけではない。そのため,教師たちによっていかなる教育活動が取り組まれていたのか,また生徒たちはどういった学習活動を展開していたのか,そのような教育実践レベルでの実態については,検討されていない[3]。

戦後の郷土教育運動については,これまでに郷土全協の活動を中心に語られてきた[4]。郷土全協は,1952 年に結成され,1950 年代前半において戦後の郷土教育運動をリードしていた民間教育団体である。しかし,郷土全協は,歴史教育者協議会との論争を発端として,「1958 年 8 月に 35 号をもって機関誌の共同編集を打ち切り,また 1963 年 12 月には,日本民間教育団体連絡会（略称 民教連）からの脱退を経て,1960 年代以降には,教育学研究の表舞台にはほとんど現れなくなる。ゆえに,その活動や理論はあまり注目されず,歴史的にも埋もれた形となっている」[5]とも指摘されている。そのため,これまでに 1950 年代前半における戦後の郷土教育運動の地域的展開の実態については,十分検討されてこなかった部分もあったと考えられる。

序章でも論じたように,最近の教育史研究では,このような研究の枠組みを転換させようとする動きが見られる。臼井嘉一は,戦後日本の民間教育団体による教育実践を捉える視座として,「これらの教育実践がそれぞれの時期の社会的歴史的課題とどう切り結びどのような教材構成や授業展開を進めつつ,子どもや父母地域住民とどのような学校をつくりあげているかという観点から位置づけ直すことも重要な課題である」[6]ことについて指摘している。

以上のような問題意識にしたがい,本章では,1950 年代前半における戦後の郷土教育運

動の地域的展開について,岡山県・月の輪古墳発掘運動の中で,中村一哉によって取り組まれた「新しい郷土教育」実践に着目し,具体的な事例として取り上げ,検討する。

第２節　中村一哉による地域運動と結びついた「新しい郷土教育」実践への取り組み

（１）　月の輪古墳発掘運動の中の福本中学校

月の輪古墳発掘運動の中の教育活動の概要については,先述した小国による先行研究に学ぶところが多い。そこで,本稿では,その中の教育実践の展開に関わる事項に絞って述べておきたい。

岡山県・月の輪古墳発掘運動とは,1953 年の８月から 11 月にわたり,勝田郡飯岡村（現・久米郡美咲町)にあった月の輪古墳が,地元の多くの住民たちにより発掘された運動のことである。この運動は,国民的歴史学運動の一環として,考古学分野で取り組まれた活動として位置づけられている[7]。一つの地域をたんねんに研究するという活動が生じた背景には,当時の「国民的歴史学運動」という思想的動向があったと考えられる[8]。

また,1951 年 7 月に告示された『中学校学習指導要領・社会科編日本史Ｃ（案)』の第一単元においては,「遺物や遺跡を見学・調査し,歴史を科学的に取り扱おうとする習慣・技能」を身につけることによって,「神話や伝説を正しく批判する態度」を養うとする視点が示されていた。このような戦後社会科教育の考え方に賛同したのが岡山県英田郡福本中学校の校長の岩本貞一と教頭の重歳政雄であった。岩本は,岡山大学の近藤義郎に月の輪古墳を紹介した人物であり,重歳は,日本歴史学習の単元構成や学習に,教科書『日本の成長』[9]を利用しながら教育実践に取り組んでいた人物であった。福本中学校では,戦後早くから研究指定を受けて積極的に社会科教育に取り組み,度々自主的な研究会を開くなど,地域の学校の中心的存在として知られていた学校であったという[10]。

表 22 は,1950 年代前半における福本中学校の教師たちによる教育実践に関連する年譜を示したものである。この表からは,福本中学校の教師たちによる郷土史研究や教育実践が,発掘運動の進展とともに展開されていたことがわかる[11]。

そして,同校の社会科教師であった中村一哉は, 月の輪古墳の発掘調査以前の 1951 年度より,校内に郷土室をつくり,郷土誌や資料を集めて郷土の調査活動を行っていたという[12]。つまり,福本中学校の教師たちは,郷土史研究を活用した社会科歴史教育に関心をもっており,郷土史研究にすすんで取り組んでいたのである。

表 19　福本中学校における「新しい郷土教育」実践の展開・関連年譜

年	福本中学校の教師たちの取り組み	関連する出来事
1951 (昭和 26)	1 月　重歳政雄「日本の成長を利用して」 『社会科歴史』No.1(1) 4月　郷土研究クラブの活動を始める。	7 月 1 日『中学校学習指導要領社会科編（試案）』が発表される。
1952 (昭和 27)	11 月　中村一哉手記「みんなで,みんなのために」	3 月 1 日　近藤義郎編『佐良山古墳群の研究』(津山市）が刊行される。 11 月 14 日　福本中学校・岩本貞一,重歳政雄,岡山大学・近藤義郎,飯岡村教育委員会・角南文雄らが訪れ,月の輪古墳の第一回踏査が行われる。
1953 (昭和 28)	2 月　中村一哉手記「準備のための共同研究」 5月　重歳政雄「社会科日本史 研究会記録」『社会科歴史』No.3(5) 6 月　中村一哉「郷土史研究グループ実践の素描」　『社会科歴史』No.3(6) 7 月　中村一哉手記「いっしょに学んでいくのには」 9月　学校の新学期が始まり,生徒の自主的参加は,放課後と日曜日に行われる。福本中学校では,教師たちの討議によって,発掘現場への参加計画が社会科の授業の一環として再編される。 10月　中村一哉手記「子供の成長を軸として」 10月　中村一哉手記「見学案内書をつくる」 10月　中村一哉手記「古墳は動いている」 10月　「野井戸」の朗読指導を行う。 11月　中村一哉手記「月の輪のひろがり」 11 月　郷土研究クラブが和島誠一指導により,約10日間,福本中学校裏のタタラ遺跡の発掘調査を行う。 12 月　中村一哉「封建社会の農村の実態」『社会科歴史』No.3(12) 12月　中村一哉手記「教師としての反省」 12月　中村一哉手記「月の輪の子ら」	1 月 28 日　飯岡村文化財保護同好会が結成される。 5 月 5 日　月の輪古墳の発掘を決定する。 8 月 15 日　発掘調査が開始される。 9 月上旬　和島誠一,久永春男が加わる。 9 月 26 日　古墳斜面の調査の一段落とともに墳頂部の調査が開始される。 10 月　16 日　内部主体の発掘に取りかかる。 10 月 27 日　三笠宮崇仁が訪れる。 11 月 14 日　発掘の総括的な報告と発掘運動の経過報告をかねた総会が開かれ,700 人近い参加者がある。 12 月 31 日　最終的点検,発掘終了。
1954 (昭和 29)	1 月　中村一哉手記「郷土研究をすすめるために」 2 月　中村一哉手記「噴煙となって」 2 月　重歳政雄「月の輪古墳と村の歴史をつくる運動」『地方史研究』No.11	1 月中旬　記録映画『月の輪古墳』(北星映画）が完成する。 3 月 1 日「月の輪古墳と国民的課題」が『歴史評論』No.53,において特集される。

	3 月 重歳政雄・中村一哉「月の輪への道-新しい郷土観をはぐくむー」『歴史評論』No.53 6 月 中村一哉「月の輪古墳と福本扇状地の研究」『郷土教育月報』No.6 8 月 中村一哉「夏休みの郷土史研究実践の報告」『社会科歴史』No.4(6) 8 月 中村一哉「夏休みの郷土史研究実践の報告」『社会科歴史』No.4(6) 8 月 中村一哉が郷土教育第三回研究大会（お茶の水女子大学）において実践報告を行う。 9 月 中村一哉「事実から真実を」『私たちの考古学』No.2 11 月 中村一哉「月の輪古墳 発掘の仕事のなかから」『教師の友』No.4	4 月 1 日 「古ふんをつくった人々」が，小学校社会科教科書『あかるい社会』４年上(中教出版)に掲載される。 6 月 9 日 文部省による記録映画『月の輪古墳』の推薦撤回問題が起こる。 7 月 26 日 月の輪古墳刊行会編『月の輪教室』(理論社)が刊行される。 9 月 1 日 「月の輪古墳」が『吉備地方史』No.8 において特集される。
1955 (昭和 30)	3 月 中村一哉「社会科と考古学的方法について」『私たちの考古学』No.4	
1960 (昭和 35)		11 月 1 日 近藤義郎編『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会,が刊行される。

(近藤義郎「発掘の経過」近藤義郎編『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会,1960 年,401～417 頁。中村一哉「月の輪教室」美備郷土文化の会・理論社編集部編『月の輪教室』理論社,1954 年,8～71 頁より教育実践の事実を中心に筆者作成。)

（2）　中村一哉における「新しい郷土教育」実践への着手

福本中学校の教師たちの中でも,郷土研究クラブの中心的指導者であった中村一哉は,1950 年代前半において,「郷土」をふまえる社会科歴史教育のありかたを模索していた教師であった。中村は,郷土研究クラブの活動成果を,社会科歴史教育において活用しようとしてクラブ活動の運営を行っていた。その中村にとっての教育観の転換の契機となった出来事が,月の輪古墳発掘運動への参加の経験であったという。中村は,その経験について,次のように振り返っている。

> 郷土史研究グループの活動が社会科学習の中に生きてこなければならないのにちぐはぐになってしまいます。私の反省はいつもそこに帰着する。この誤った行き方をはっきりと自覚させ,真に新しい道のあることを示唆してくれたのは,数千人の大衆が,大衆自身のために積極的に参加してつづけた古墳月の輪の発掘という大渦巻であった。すすんで古墳の発掘に参加し,古墳を学び,古墳で学んだ子供達は具体的な事物の中に,何が真実であるかという問題意識を育くみ,活々と瞳を光らせた。[13]

このように中村は,月の輪古墳発掘運動の参加の経験を通して,共に参加していた郷土研究クラブの生徒たちが問題意識をもちながら歴史を学んでいく姿に教育的な意義を認めていく。また,そうした中村の考えを補強したのが,当時の郷土全協の指導者であった桑原正雄による「新しい郷土教育」論であった。当時の桑原は,「生活の中から真実をつかみ,郷土を変えていく子供を作る」[14]といった「新しい郷土教育」の考え方を主張しており,それは社会科歴史教育において郷土史研究を位置づけようとするものであった。中村は,桑原との印象的な出会いについて,次のように振り返って述べている。

> そういう中に初めて,教師だけの集いをもったのは,「郷土教育の会」の桑原氏を迎えた夜のことだった。月の輪で働く教師のみが集まった淋しい会であった。もっと早く,発掘以前からもつべき会であった。（中略）教師自身が,互いの立場を理解し合い,広場をつくって立ち上がろう,そういう話合いで私達は『月の輪教師の会』をつくった。[15]

このように,中村は,桑原と出会ったことを契機として「月の輪教師の会」をつくり,「新しい郷土教育」実践にすすんで取り組んでいったことを印象的に振り返っている。そして,中村は,郷土研究クラブの生徒たちと取り組んだ「郷土研究」の実践を通じて,「新しい郷土教育」実践への手応えを,次のように感じていくのである。

> 私共は,知識の科学性という事と同時に,指導の科学的方法がとられてこそ,新しい郷土教育が前進するものである事を,はっきりと知ったわけである。それまでは,博識の郷土史家に全く頭の上らぬ思いをしてきた私も,こうして子供達といっしょに,考えながら土器を拾い,子供達の自由活発な動きの中で調査をしていくと,決して博識だけでは正しい歴史はつくられず,歴史教育とはなり得ないという事を,感じとるようになった。[16]

こうして中村は,1950 年代前半における戦後の郷土教育運動を,岡山県田郡福本村という地域において「新しい郷土教育」実践を通じて推進していたのである。中村は,1954 年 8 月に東京都・お茶の水女子大学において開催された第 3 回郷土教育研究大会に報告者とし

て登壇し,月の輪古墳の中の「新しい郷土教育」実践について発表を行っている。このような事実からも中村は,1950 年代前半における郷土全協における実践家を代表する教師であったといってよい。

では,そのような形で取り組まれることとなった月の輪古墳発掘運動の中の「新しい郷土教育」実践は, 岡山県英田郡という地域において,当時の社会的歴史的課題とどのように結びつき,生徒たちにとってどのような学習活動として組織されていたのであろうか。

以下,月の輪古墳発掘運動の中の中村一哉による「新しい郷土教育」実践の実態を解明し,1950 年代前半における戦後の郷土教育運動の地域的展開の特質について考察していくこととしたい。

第３節　郷土研究を活用した教材研究

（１）　地域教材の自主編纂活動と結びついたフィールドワーク

当時の中村は,月の輪古墳発掘運動以前より,社会科歴史学習における研究問題解決的な単元学習のあり方を模索していた。そして,郷土研究クラブの運営を通して,地域教材の自主編纂活動に取り組んでいたのである。中村による郷土研究クラブを主体とした最初の代表的な取り組みが,「福本扇状地の研究」の実践[17]であった。表 20 に示したのは,その実践の展開である。

表 20　郷土研究クラブによる「福本扇状地の研究」の展開

段階	教師の指示・発問・説明	学習活動・学習内容
第1次	・古墳とは何か―。外にはないのか。なぜあんな大きいものをつくったのか。古墳の近くから土器のかけらが出るがあれは何か。いつ頃造られたものなのか―。興味から出発する疑問。その疑問に答えるための活動を行わせる。	・それじゃ,地図と年表をもち,ノートと巻尺と小さな土かきのこてをもっていこうじゃないか,いってみよう。
第2次	・何か土器の破片はころがっていないか。 ・集まったものを分けてみる。 ・それでは古墳のしくみをしらべよう。 ・石のつみ方,石の大きさ,石の種類,粘土の使用をくわしく調べてみよう。 ・20 年程昔,ここをほりかえしていろんな物を掘り出したんだ。直刀が出た。鏡が出た。陶棺が出,埴輪が出土したという話だ。残念ながら,学問的な良心で掘られていないため,みんなちりぢりになってしまったんだ,おしいことだ。 ・いや,盗掘してなかったら,その頃の事がくわしく判るだろう。おしいことだ。 ・今度は外を削ってみよう。盛土はどこからか。 ・さあ,天上石の上に立とう。そうして当りを見わたそう。 ・昔はあの平野の中を流れている。川もずっと向こうの山すそを流れていたんだ。地図でどの位あるか,面積を計ってごらん。古墳はあの山のふもとにある。この丘あの畑と点々とあって,この平野だけでも 40 近くあるんだ。けれどもこんなに大きくはないんだ。	・ある日の午後,希望者の何人かが,学校の近くの一番大きい古墳（筆者注:丸山古墳）に集まっている。 ・ある,ある。もっとさがしてみろ。 ・青いうすいかけら須恵器,赤くてもろいかけら土師器,その中でもぶ厚いかけら。陶棺の破片。型の小さいものは－埴輪。 ・横穴の口に立つ。 ・高さ,奥行き巾をはかって記入。 ・たいして役に立たんだろ。 ・歩いてみる。盛土の高さ,長さ直径方角は,つぎつぎに記入していく。

	・どうしてここだけこんなに大きいのだろう。 ・まてまて。年表で見ると古墳時代は何年位つづいているかな。原始時代縄文時代－から弥生時代－それから古墳時代だね。いまから何年位昔なのか－この時代は4百年もつづいているね。4 百年。短い年じゃないぞ。ところで奈良県－大和地方についで,この岡山県吉備地方は多いのだ。岡山県だけで1万はあるという。その中の9 割以上は,4百年の終りの方なのだ。後期のものだね。ここでも後期のものがだんぜん多い。しかしこの古墳は中期のものなんだ。このずっと奥には,堅穴の中期でも早い頃のものがある。中期と後期とどんなに違うか。なぜ古い時代のものが少ないのか。これは一つ帰ってから考えてみよう。 ・ところでこれだけの古墳をつくるのにどれだけの人夫がかかっただろうか。それを計算してみるのもおもしろいぞ。なぜかってそれだけの労働力－奴れい－をつかう豪族がここに住んでいたから。そうしてどのくらいの人がここにすんでいたか。考えつけるじゃないか。	・えらい人がいたんだ。その人の墓がここなんだ。
第3次	・室内での調査を行わせる。	・土をつくり,発見した順に地図に記入していく。年表に記入していく。 ・出土品の原型を考え,用途をしらべる。 ・その頃の人々はどんな生活をしていたか調べたり考えたりする。 ・川のうつりかわり,地形の変化,集落の変動等を調べる。 ・次に実地踏査すべき古墳について,かつての発掘のもようをたずねる。
第4次	・土地の成り立ちの調査を行わせる。	・簡易測図をつくりながら岩をしらべ,地形を観察する。 ・荒れかけた畑の中に,山麗の野井戸の中に,土地の成立条件を求めつつも,祖先が歩いてきた歴史の足跡をたずねて今の自分達の生活と対比する。 ・地下水を測り,沖積地をしらべ,水害と水の利用を話し合いつつ,土地の動きと人の生活とを結び付けて調査をすすめていく。

（中村一哉「郷土史研究グループ 実践の素描」『社会科歴史』No. 3（6），1953 年6月,24～25 頁。中村一哉「月の輪古墳の発掘と福本扇状地の研究」『郷土教育月報』No. 6，郷土全協事務局発行,1954 年6月，5～6頁より教育実践の事実を中心に筆者作成。）

本実践の特質として,以下の二点を指摘することができる。

一点目は,「古墳とは何か」「何か土器の破片はころがってないか」というように生徒たちの興味にもとづいて,郷土研究クラブを主体としたフィールドワークが計画的に行われていることである。1951 年度に公示された『中学校学習指導要領』では,全ての生徒に対して毎週２～５時間ずつの特別教育活動の時間が課され,時間配当に関する限りでは特別教育活動の「黄金時代」[18]であったという。この特別教育活動の時間を利用して,中村は,生徒と共にフィールドワークを行っていたのである。すなわち,郷土研究クラブのフィールドワークの活動は,福本中学校の教師たちによる地域教材の自主編纂活動[19]と結びついたと考えられる。

二点目は,フィールドワークや室内での調査を通して,「川のうつりかわり」,「地形の変化」,「集落の変動」などの福本扇状地の地理的・歴史的特質を生徒たちがすすんでとらえようとしている点である。それは,生徒たちの問題意識にもとづいた主体的な調査活動が組織されたためであったと考えられる。中村は,この「福本扇状地の研究」について次のように振り返って述べている。

> 『いたずらに多くのものに目を奪われず,物事の本質をみぬき,現実の社会を前進させようとするもとの力をもった子たちを』という私のねがいは福本扇状地の研究でありましたが,それは又述べてきたところの郷土教育的方法であると思っています。[20]

このように中村は,「福本扇状地の研究」の実践について,当時,郷土全協が主張していた「郷土教育的方法」[21]を活用した典型的な教育実践であったと位置づけているのである。そして,その実践の展開過程では,生徒たちによって主体的な郷土の認識がめざされ,フィールドワークを活用していたところに教育方法面での特質があったといえよう。

以上のことより,この「福本扇状地の研究」の実践は,福本中学校の教師たちによる地域教材の自主編纂活動と,郷土研究クラブの生徒たちによる調査研究活動とが,フィールドワークを通じて結びついていたといえるだろう。そして,「福本扇状地の研究」の実践の中では,「郷土教育的方法」が活用され,主体的な郷土の認識を可能にした実践であったとしてとらえてよいだろう。

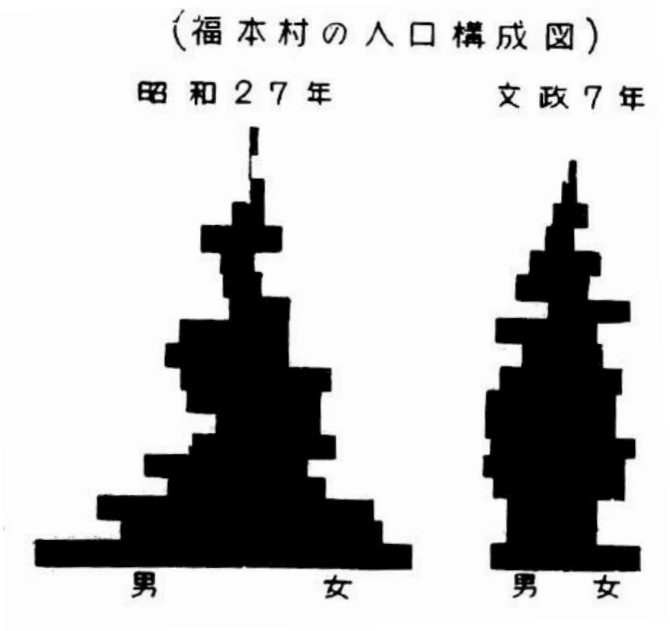
（２）　福本村における地域的課題の解決をめざした調査研究活動

次に中村は,「具体的な身辺の事物を通して問題を見,その中にひそむ真実をたずねあてようとする新しい郷土研究の歩みは古墳の発掘がかなりすすんでから始められた」といい,「封建社会の農村の実態の研究」の実践[22]に取り組んでいったという。

生徒たちは,学校近くの旧庄屋の納屋から発見された「文政７（1824）年２月当申宗門人別御改帳」「美作国英田郡福本村」という一冊の古文書を丹念に読み取り,性別年齢階層別に整理して,人口構成を明らかにしていった。なお,古文書とは別に村役場世帯別人員簿を借りてきて,昭和 27(1952)年の男女別の人口構成も明らかにして比較検討を行っている。そして,この封建社会の農村の実態の研究実践には,「発掘には余り積極的でなかった生徒たちもすすんで参加した」[23]という。

図５は,生徒たちが作成した福本村の人口構成図である。文政７年の表が棒状型で,昭和27年の表がひょうたん型を示していることがわかる。この表の比較を通して,生徒たちは文政７年の表の各年齢別の変化のない数字を読み取り,過去に福本村において「まびくという人道上の重大な問題」[24]が行われていた歴史的事実を明らかにしていった。そして,「自由なき封建社会の村人の生活の苦しみ」という福本村に残る地域的課題が,現代の生活者である生徒たちに理解されていったのである。

図５　生徒たちの調べた福本村の人口構成図



(中村一哉「封建社会の農村の実態」『社会科歴史』No. 3 (12),1953年12月,30頁。)

さらに表21に示したものは,「封建社会の農村の実態の研究」の展開である。この表からは,実践の特質として,以下の二点を指摘することができる。

一点目は,「古文書」や「宗門改帳」などの郷土の具体的事物を学習材として,生徒たちが現代につながる労働人口の問題といった地域的課題に眼を向けている点である。中村は,福本村の地域的課題について,「共同作業場で輸出品製作の不安定な作業に従う未亡人やかつての失業者たちは,鉱山労務者に比すれば驚く程の低賃金でかなり苦しい仕事にとりくんでいる。次第に荒らされていく扇状地の畑の中に自分自身の不安がひそんでいないか,村の問題は直接日本の問題とつながって」[25]いるとしてとらえていた。当時の福岡村の住民の多くは,近くの柵原鉱山に従事していたが[26],一方で失業者や反失業者,戦争未亡人や困窮者の仕事の確保[27]などといった地域的な問題が顕在化していた時でもあった。そのために,当時の労働人口の問題は,地域的な問題の解決を志向する意識は,生徒たちに共有されていたと思われる。

二点目は,生徒たちが,「村人の生活はまことに不自由極まるものであった」「農民たちの中にも,自ら身分の上下は生じていた」というような「科学的認識」[28]を形成している点である。それは,福本村に残る前近代的な封建的社会関係の克服をめざした認識の仕方であり,現代に生きる生徒たちの生きる姿勢の変革につながる考え方であった。また,そうした「科学的認識」は, 月の輪古墳発掘運動に参加した人たちの「民衆による民衆のための歴史」[29]を探究したいという願いと結びついていたように思われる。

以上のことより,「封建社会の農村の研究」の実践は,地域的課題の解決をめざした調査研究活動を通して,生徒たちに農村の労働人口の問題や,封建的社会関係の克服に関心を向けさせ,「科学的認識」の形成を可能にした教育実践であったとしてとらえることができる。

表 21　郷土研究クラブによる「封建社会の農村の研究」の展開

段階	教師の指示・発問・説明	学習活動・学習内容
第1次	・かつて大庄屋であった田中さんの家に行き,古文書を借りて来て読ませる。 ・古文書『文政７年２月当申宗門人別御改帳・美作国英田郡福本村』の調査を行わせる。 ・性別年齢別に人口を整理していき,人口構成を知らせる。グラフに記入させる。 ・現在の村役場世帯別人員簿を借りてきて同様の作業を並行して行う。	・古文書と現在の戸籍を活用して,農村の人口構成についての比較研究を行う。 ・昭和 27 年の表は,ひょうたん型。 ・壮年層男子の僅少な点が,現代の農村労働の大問題として関心をよんだ。 ・文政７年の表は,棒状型。 ・各年齢層の変化のない数字から,人口増加の見られぬ原因がどこにあるかが,議論の的となった。封建社会の農村における人口増加の問題は,生まれないのか育たないのか。 ・人口の間引きをしているという事実がわかった。
第2次	・古文書の調査を行わせる。 ・明記された事実から,当時の社会制度や社会生活の状態を生徒自身に発見させる。	・古文書から,封建社会の生活の様子を調べる。 ・宗門寺別戸数の計 98,他に無高無門１戸,人口合計 412 人,別に年齢不明の奉公人 15 人,姓を名乗りうる者は庄屋の田中一戸のみ,家来３戸,３人組６人組などの制度の存在,庄人と年寄２人とその職務,医師４人は何れも親子組,神宮二人も同じく親子,他はすべて持高をもつ百姓という事実を次々に列挙していく。 ・全村民が旦那寺に従属せしめられて,切支丹信徒ではないという証を明らかにすることを強要された信教の自由は認められなかった村人の生活はまことに不自由極まるものであった。 ・宗門改めを口実に,村にくぎづけにされ人々は,五人組制度による連帯責任を負わされ,年貢米絶対量の負担に日夜営々として土に向かって汗を流さなければならなかった。 ・自分の土地から逃れることも出来ず,職業の世襲下では新しい職を求めて生活の道を切り開くことも許されなかった。農民たちの中にも,自ら身分の上下は生じていた。
第3次	・調べたことをまとめさせる。 ・説明の文は教師が書く。 ・自分達の力で行うよう助言を行う。	・「自由なき村人の生活」と題して紙芝居を創作する。 ・絵は自分たちで書くことについての話し合いを行う。 ・効果音を入れながらテープレコードに吹き込む。

（中村一哉「封建社会の農村の実態」『社会科歴史』No. 3 (12),1953 年 12 月,30～32 頁より教育実践の事実を中心に筆者作成。）

第４節　中村実践における社会科歴史教育と生活綴方

（１）　月の輪古墳の発掘調査と社会科歴史教育

以下に,月の輪古墳発掘調査の調査日誌の中から,福本中学校・郷土研究クラブの取り組みの様子が分かるについて,引用する。

資料 23　月の輪古墳発調査の調査日誌

１．　1952 年月 11 月 14 日英田郡福本中学校岩本貞一・同重歳政雄・岡山大学近藤義郎・飯岡村教育委員会角南文雄などの一行は,飯岡村の山頂にその所在を伝えられていた大型古墳の確認調査を行った。山頂に到着後ただちに確認された釜の上古墳の大きさに一驚した一行は,まもなく,身の丈を没する草むらの中から月の輪古墳の巨姿に接し,おのずとわが眼をうたがったほどであった。草をかきわけて山頂に立った一行は,その足下に家形埴輪の一片を発見し,顔を見合わせて一しほの興奮をおぼえた。この小さな山間の村にこれほど大きな古墳が！しかもこんな高い山頂にあるとは！確認できた喜びとともに,一行は,村の座談会のためにまっている村役場へと急いだ。

人々は「自分達の村の歴史の本当の姿を知ろう」という点で一致した意見をもつようになり,まずできる範囲で,村内の遺跡遺物の現状と分布を調べてみようということがきまった。重歳政雄・中村一哉等の指導する福本中学校の郷土研究クラブでは,従来からの活発な活動を,村人達と共におこなう喜びの中でさらにつよめていった。

５月５日同好会は事業計画の主要な一環として月の輪古墳の発掘を行うことを決定した。同時に古代から現代までの村の歴史を明らかにする調査研究もあわせておこなうことにした。

２．　同好会はまず次のような発掘事業の基本方針をきめた。

（イ）　今までのような専門研究者本位の発掘でなく,専門研究者の学問的指導の下に,村民が自主的に自分たちの手で発掘をおこなうこと。この発掘を通じて,神がかりの歴史でない日本人の正しい歴史を,広く理解する。

（ロ）　古墳の発掘が,単に古い過去の事実を調べたり,お国自慢であったりするのでなく,事実の確認の態度と方法の中に,また事実のもつ意味の中に,現在の生活にはねかえる生きた指針をつかむこと。つまり,教師や生徒にとって,社会科教育の一環としてなされなければならないし,一般の村民にとっても生きた社会教育としてうけとめられなければならない。

（ハ）　村人・学者・教師・生徒が一体になって,古墳発掘に結集すること。

３．　８月 15 日午後２時から,総会をかねて発掘式を飯岡小学校講堂においておこなった。村内外から 500 名をこえる人々が出席。（中略）発掘は翌 16 日から開始されたが,７月９日にきまった当初の計画は参加者の熱意と結びついた学問上の要求によって大きく変更され,外部の全面をあらわす計画としてすすめられた。(中略）一方発掘に直接参加を希望する人々は,同好会を中心に,福本中学・備作高校・林野高校・和気高校などの生徒や村内外の人々など,数百人に達し,上の計画を実現にうつす条件にも生じていた。（中略）

福本中学校の生徒達は,山頂に氷菓や飲み物を運び上げ,作業員や見学者に販売して,発掘資金を提供するという創意的な努力をつづけた。城南中学・勝間田高校・勝央中学・吉岡中学・操山高校・津山高校・津山商業・津山工業・林野中学・湯郷高校など,近隣の先生生徒の参加が,いれかわり立ちかわり,おこなわれた。生徒達は,自主的な全体会議をひらき,発掘への協力と歴史の勉強討議を進め,機関紙「歴史」さえも発行していった。

４．９月に入り,学校の新学期がはじまり,生徒たちの自主的参加は放課後と日曜日を除いてはできなくなったが,近隣の学校－福本中学・備作高校・吉岡中学・城南中学・など－では,先生方の討議によって,現場への参加計画が社会科の授業の一環として再編された。勝田郡教組は,郡下の小中学校の先生に毎日２,３名から 10 数名ずつ交代で参加するよう呼び掛け

た。こうした高まりの中に,組織の主体が飯岡村文化財保護同好会では不充分であることが指摘され,９月５日の総会において美作南部備前北部の一帯の同好者を一丸とした「美備郷土文化の会」と名称を改めることになった。

同好会が最初計画した記録映画の製作は,16ミリ１巻か２巻で無声,教材的なものを中心にしたものであったが,運動の高まりにつれ,学術的及び教材的な面と発掘運動の展開を統一した文化映画に変更し,これを広く活用するために35ミリトーキー２巻の本格的な撮影にふみきった。しかしそのために要する資金は,莫大なものであった。まず勝田郡教組,英田郡教組などの努力によって県教組中央委員会が参加,つづいて部落解放岡山県連合会も参加し,飯岡村議会の補助金と共に,一応の見通しはできあがった。そのためにあらたに映画製作委員会が,美備郷土文化の会として発展した同好会・県教組・部落解放岡山県連合会・発掘本部・同青年団・同婦人会・勝田郡教組,英田郡教組・勝田郡婦人会,勝田郡青年協議会などが加わって結成された。映画製作委員会は,専門のシナリオ作家吉見泰や演出家杉山正美,荒井英郎,キャメラマン竜神隆正,川村浩士を中心にシナリオを討議検討し,撮影計画,資金の拡大をつづけ,自主的な映画製作活動という新しいケースを打ち立てる努力をおこなった。映画の製作は,こんどは,発掘運動の前進に驚異的な力をあたえた。すなわち映画製作運動は,こんどは逆に一層広範な人々を組織しはげましていった。

５．　９月26日古墳斜面の調査の一段落と共に墳頂部の調査が開始された。久永春男が指導担当者として造り出し調査の完了まで継続してあたった。(後略)

６．頂部施設の取り上げと点検の終了をまって,10月16日,内部主体の発掘にかかった。(後略)

７．　発掘の終了目標を11月14日とし,それまでに主要な調査目標を終了させ,それ以降は,会の調査班として発掘本部の機構を少し継続する。いわば,全体の非常体制から常時体制へと移行するという方法がきまった。特に学校では,それぞれの郷土教育活動の援助を行うという方向をとった。それはその後,講演会,懇談会など様々な形で継続され,福本中学校裏のタタラ発掘,湯郷池の奥の古窯址の発掘,周匝山方のフィールドワーク,勝間田植月のフィールドなどを導いていった。

８．　発掘の重要部分についてのおよその調査が終了した11月14日,予定通り,発掘の総括的な報告と経過報告をかねた総会が,700人近い人々の参加をえてひらかれ,運動としての非常体制の終結が決定された。本日をもって,参加者は１万,見学者は約３万人に達した。総会ではさらに,この日からはじめられた福本中学校裏のタタラ発掘など周辺一帯の調査をふくめて,月の輪のだめ押し調査の計画が検討され,発掘本部を縮小した上で継続させることになった。

９．　タタラ跡の発掘は,周辺調査の一環として,企画され庄司久孝及び和島があたり,福本中学校の先生・生徒と共に,約10日間にわたっておこなわれた。(中略)

発掘の全面的な終了と映画の撮影の事業は,ようやく完成に近づいた。12月31日,雪のふりつもる月の輪古墳で,最終的な点検がなされ,長期で困難だった発掘に終止符をうった。

７．　発掘の終了目標を11月14日とし,それまでに主要な調査目標を終了させ,それ以降は,会の調査班として発掘本部の機構を少し継続する。いわば,全体の非常体制から常時体制へと移行するという方法がきまった。特に学校では,それぞれの郷土教育活動の援助を行うという方向をとった。それはその後,講演会,懇談会など様々な形で継続され,福本中学校裏のタタラ発掘,湯郷池の奥の古窯址の発掘,周匝山方のフィールドワーク,勝間田植月のフィールドなどを導いていった。

８．　発掘の重要部分についてのおよその調査が終了した11月14日,予定通り,発掘の総括的な報告と経過報告をかねた総会が,700人近い人々の参加をえてひらかれ,運動としての非常体制の終結が決定された。本日をもって,参加者は１万,見学者は約３万人に達した。総会ではさらに,この日からはじめられた福本中学校裏のタタラ発掘など周辺一帯の調査をふく

めて,月の輪のだめ押し調査の計画が検討され,発掘本部を縮小した上で継続させることになった。

９．　タタラ跡の発掘は,周辺調査の一環として,企画され庄司久孝及び和島があたり,福本中学校の先生・生徒と共に,約 10 日間にわたっておこなわれた。(中略)
　発掘の全面的な終了と映画の撮影の事業は,ようやく完成に近づいた。12 月 31 日,雪のふりつもる月の輪古墳で,最終的な点検がなされ,長期で困難だった発掘に終止符をうった。

(近藤義郎「発掘の経過」近藤義郎編『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会,1960 年,401～417 頁より,発掘調査の事実を中心に筆者作成。下線部は筆者。)

この月の輪古墳の発掘調査の活動について,中村は,「何よりもの収穫は,郷土の正しい歴史事実をみんなで知った事だった。がもっと大切なことは,科学とは何かを,多くの人が身をもった学びとった事であった」[30]ととらえていた。そのような認識から,中村は,生徒たちと共に月の輪古墳の発掘調査の仕事に取り組んでいたのである。さらに,中村における教育観の変容に焦点を当てて,その意義を論ずれば,以下のような事実が中村によって語られている。

古墳の発掘は確かにその人間を変えた。今まで働くことに何の感興も持たなかった人間が,なぜ働くのかと考え出し,何でも人のいう事には反対するという男が,人の意見に耳を傾けだした。文など到底かけないと諦めていた私が,ともかくも誰にでも判ってもらいたいという気持ちをもちつづけて書くことに熱心になったのも,今迄の教師という職の上にあぐらをかいて安住していた気持ちから,子供と共に村の人々と共に,物を考えていこうとするようになった人間的変革が,あるいはそうさせたのかも知れない。[31]

このように,中村における月の輪古墳発掘の活動の意義には,きょういくかんの変容も含めた,「人間的変革」があったととらえることができる。

また,岡山県・月の輪古墳の発掘調査の活動自体は,社会科教材映画[32]として教材化され,全国的にも注目を集めることとなった。そして,小学校社会科教科書『新版 あかるい社会四年上』(中教出版,1955 年度版)には,「(二) こふんをつくった人びと 岡山県の『月の輪こふん』」の項目が割かれ,「郷土」の歴史を明らかにしようとする人びとの姿が記述された。それらのことには,教育史的な意義もあろう[33]。

しかし,報告書『月の輪古墳』(近藤義郎編,月の輪古墳刊行会,1960 年)のあとがきには,次のような課題も記されている。

本報告書の中心課題は,考古学的事実と理論化の報告であり,この点,編集言にも述べられているように,成果だけでなく,今後に残された課題を多く含んでいるが,この報告書をもって現段階における総括的な報告とした。反面,教育学的な問題点と教訓が,数多く含まれている月の輪古墳発掘の研究報告書としての本書に,この面からの論文や報告がまったく含まれていない点は,本書の刊行を前にした今となって,大へん惜しまれることである。この面に関しては,『月の輪教室』(理論社刊)が,“新しい歴史教育”の記録として,当時の生々しい情景を躍動的に,じかに伝えている点で重要な報告だといえるが,その後の社会科教育の実践を含めて,早急に整理され体系化されることが重要であると考える。この点,月の輪に参加した多数の教師の念願ではなかろうか。[34]

このような課題に応えるためには,月の輪古墳の発掘調査の意義について,社会科歴史教育の一環として取り組まれていた事実も含めて,より総合的な検討が必要になるだろう。

（2）　社会科歴史学習における郷土研究の活用

さらに,発掘運動の進展と並行して福本中学校の教師たちは,「新しい教育のあり方」としての社会科教育の指導に熱心に取り組んでいた。そして,「社会科指導の尊い経験と資料の集積は教師と生徒のたゆまぬ努力によってなされて行った」[35]という。

そのような過程の中で行われたのが,1953 年２月４日に実施された社会科日本史授業「鎌倉時代の新仏教」の実践である。表 22 には,実践の展開を示した。

表 22　社会科日本史授業「鎌倉時代の新仏教」の展開

段階	教師の指示・発問・説明	学習内容・学習活動
導入	・今日は時間が足りないので,１班から順に発表,後でまとめて私が議長でディスカッションします。各班は能率をあげて発表して下さい。	・生徒の班別発表 （１班）生徒は日曜日登校し,１万分の１の学区内の地図へ,教室の後方からでも分かる地蔵様の分布図を作成しこれで発表。 (a)この地蔵様は子どものヨーダレが出なくなるよう信仰されています。(b)これも同じ。(c)これは昭和の初め建てられたもので,この川で自殺した人が極楽へ行けるよう家の人が建てました。(以下略) （２班）郷土の偉人法然について,小黒板に要点を記入してこれで発表。法然上人源空は 1132 年美作国久米郡に生れ,15 歳で比叡山に登り,源光というお坊さん更に叡空について勉強し,源光の源,叡空の空の字をもらい,源空といっていました。 （３班）栄西及び道元,禅宗について３人で発表。これも小黒板で説明,特にこの地域の茶の栽培の歴史について。 （４班）日蓮宗の生徒３人が発表。(a)吉が原法経寺と訪ねて(b)日蓮の生い立ちと日蓮宗(c)全国・岡山県・この附近の日蓮宗の寺について （５班）郷土に鎌倉時代の新仏教の寺がどのように分布しているか。(a)２郡の分布図を作成して発表。英田郡（勝田郡）曹洞宗 0（1）日蓮宗 5（3）浄土宗（1）真宗 8（3）(b)旧仏教の真言宗は,25（17）天台宗（7）合計 49 寺もあり,新しい仏教の寺がわりあいに少ないので,研究して見ました。これは前々から仏教を信仰していたらたやすく改められない,ということと,天台,真言も新仏教に刺激され,だんだんと改められたからだと思いました。(中略)それにしても禅宗ですが,曹洞宗が唯一つということ,郷土の栄西の広めた臨済宗がなぜない

		か不思議でした。これも私なりの研究ですが,禅宗は鎌倉武士にあつく信仰され郷土の私達の方には多分こられなかったのでしょう。こうしたことが今日禅宗の寺が貧弱で少ないわけであろうと思いました。 （６班）鎌倉時代と平安時代の仏教の特色 （ａ）平安時代の仏教は,１.祈祷仏教２.貴族仏教３.深山で研究し修道した。４.一般の人々と関係が少ない。５.伝道や社会事業にあまり熱心でない。６.仏教芸術とは関係が深い７儀式的な仏教であった。(b)鎌倉時代の仏教は,１大変民衆的。２布教に熱心であった。３.関東や奥羽,九州へと地方へひろまった。浄土宗→鎌倉,奥羽へ,真宗→関東北陸,九州,禅宗→鎌倉武士。
展開	・教師が司会したディスカッションを行う。(残り 15 分間) ・確かに鎚ですが…よく見てごらん蓮の花だと思いますがね…今一度見学にして解決はあとまわし。 ・私もよい答えは出来ないかもしれない。これは６班の鎌倉時代の仏教の特色とも関係あり。物心のつかない子供の死。親の切ない心持。どうか地蔵様に助けられるよう,子供の冥福を祈る親心として,子供と地蔵さまが関係深いのだと先生は思います。	・生徒は,はいはいと指名してくれと挙手,実に活発である。質問→応答,誰も一生懸命,討議される問題は,１班の調べた村々に建てられている地蔵様に集中される。 ・(c)の地蔵様は手に鎚をもっているが,どういう意味ですか。 ・１斑もこれには答えられない。 ・地蔵様は今いろいろと信仰されています。 ・子供と関係深い理由は。 ・１班もいろいろ応答。
終末	・いそいで小黒板に書かれた仏教の宗派,開祖,年代を提示,反復させる。 ・今日はいつものようによくやったが先生ももっと話したいことがある。次は真木山,三重塔を見学してそこで勉強しようと予定していたが今一時間,今日の問題をやってもよい。週当番でみんなの意見をまとめなさい。	・まとめを行う。次の時間又本時の続きとし,新仏教の大要,宗教改革鎌倉時代の仏教の特色について,ディスカッションを実施した。

（重歳政雄「社会科日本史　研究会記録」『社会科歴史』No.３(５),1953.５,28～32 頁より教育実践の事実を中心に筆者作成。）

本社会科歴史授業の特質については,以下の二点を指摘することができる。

一点目は,地蔵様の分布図の作成や,実際に寺を訪問するなどの調査研究活動が,生徒たちによって取り組まれていることである。授業者の重歳政雄は,「地方史研究こそ本質的な

社会科教育の唯一の道です」[36]と考え,地方史研究を活用した社会科授業実践に取り組んでいたのである。重歳は,この授業の指導観として以下の項目をあげている。

A,指導観
※ 社会の姿というものを正しく見極め,これを正しく発展させる人を教育する,その場合,歴史的な観点に立ってものを見ていかねばならない。
※ といって生徒の能力や心理を無視した教育はありえない,しかも生徒の興味に捉われることなく,より高次な学習が指導されなければならない。
※ 地方に立脚した歴史教育をもっと真剣に考えさせられる。地方史の究明なくして中央日本史の歴史の認識は生徒には無味乾燥なものであろう。郷土に出発し中央史の学習をなし,また郷土にかえる学習こそ最も大切な学習形態ではなかろうか。而もこれは単なる中央理解のためのものでなく,反対により正しい中央史建設のための地方史と思っている。
※ どの地域でもどの学校でも進められるような教材で授業をすることに決めた。[37]

この項目からもわかるように,重歳は,生徒によって行われる地方史研究を,生徒の能力や心理の向上に結びつくものとしてとらえ,授業を行っていたのである。そして,生徒による地方史研究が,どの地域でもどの学校でも展開できることを望んで社会科日本史教育実践に取り組んでいたのである。

また,中村も,生徒たちによる考古学研究について,次のように考え,社会科歴史授業実践に取り組んでいたことについても述べている。

破壊の考古学から建設の考古学へ,若い世代の限りない努力は,考古学そのものをひとり前進させたのみでなく,みんなの考えを,とくにまじめな教師や生徒達の考えをしっかりしたものと思うのです。最近の動きが,単なる興味や気まぐれの労力奉仕で終わるのではなく,そしてそれが日常の教育と切り離された存在としてではなしに,あくまでも計画的な教育のつみ重ねの上に立つ教育としての,本当に新しいいのちのめをつちかい,のばすそこぢからのある教育実践でありたいと心からそう願う次第です。[38]

このように中村は,生徒たちによって考古学研究が行われることが,「そこぢからのある教育実践」を可能にするとして考えていたのである。

二点目は,地蔵様が建てられた理由についてのディスカッションを通じて,生徒たちが「質問→応答」というように,根拠づけながら論理的に思考している点である。すなわち,重歳は,生徒たちの思考力の育成をめざして社会科日本史授業実践に取り組んでいたといえる。

さらに,中村は,社会科歴史学習を通じた生徒の批判力,思考力の問題について次のように考えていた。

事物の直観から批判力,思考力を養う教育に高めていく考古学的な方法が,真にその効果をあげようとするならば,多くの人たちの変革されていない意識の変革に役立つものでなければならぬであろうし,又そのためには,変革されていない意識の立場への理解なくしては,考古学的な研究は単なる遊び事の,うしろ向きのままごと遊びと同じ結果になってしまうのではないかとおもう。[39]

このように,中村は,考古学的な研究が生徒の批判力,思考力を養うものとして考え,教育実践に取り組んでいたのである。そのように考えていた中村は,後に「系統的な歴史教育が,

子供達の生活を通して,感情に訴え,ちえを働かせて教えられてこそ,歴史は現代に生きる人たちになくてはならないものになる」[40]として,小学校からの系統的な歴史教育を主張していくこととなる。

以上のことから,中村や福本中学校の教師たちは,郷土研究の成果を活用して,社会科歴史授業実践に取り組んでいたことがわかる。なお,社会科授業において,生徒による郷土史研究の成果を活用しようとする教師による教材研究の態度は,1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程に関する取り組みに共通する特質であったといえる[41]。

（3） 月の輪古墳の発掘調査の中の生活綴方

また,中村は,生徒による主体的な生活の姿勢を確立していくために,発掘調査を通して,生徒たちに詩や作文を書かせていた。中村は,そのような「歴史教育と生活綴方の結合」という課題との出会いについて,次のように述べている。

> 戦後の社会科歴史教育に情熱的にとり組んでいる重歳政雄教頭を中核として,歴史教育のあり方を模索していたわたしが,迷った末に到達したのは,生活綴方教育への道であった。
> きびしい現実を正しく見つめ,未来への確かな夢を育てていく。生活綴方の教育から歴史教育を考えるとき,いままで見過ごしてきた課題が重要な意味をもって迫ってくる。歴史的見方や考え方を学ぶ教科としての歴史はもとより,それを全教育活動のなかで育てていくことが必要であると考えるようになった。具体的事象の奥にひそむ,根源的な本質をみずから求め,それを生きる力とする,そういう人間育成の歴史教育こそ,これからの教育の柱としなければならない。
> 歴史クラブから学級活動,そして全校教育へ。やがてそれは全村的な月の輪の発掘運動へ向かって前進していくこととなった。[42]

つまり,中村は「人間育成の歴史教育」との関連において,「歴史教育と生活綴方の結合」という課題をとらえていたのであった。そして,「きびしい現実を正しく見つめ,未来への確かな夢を育てていく」ために,発掘調査の中での教育方法としての「生活綴方的教育方法」を取り入れていく。生徒たちは,月の輪古墳の発掘調査の作業の中で,ポケットに手帳を忍ばせ,自分の見つけた小さな歴史を書き留めていったという[43]。発掘調査に参加した生徒たちが学習の記録を残すことができた背景には,中村による指導が存在していた。

資料 24,25 は,発掘調査の中の生活綴方（詩）の一部を抜粋したものである。引用したものは,発掘調査の中の福本中学校の生徒たちによる生活綴方の取り組みの様子が具体的に現れているものを示した。

資料 24 の「道の歌」の詩は,スライド『月の輪古墳』の冒頭に登場するものであるが,この作者・遠藤太郎氏に対して,当時の教え子であった角南勝弘氏は,「中村先生が熱心に作文指導していた」ことを振り返って語ってくれた[44]。また,「書けてしまった詩」という詩のタイトルや「詩が書けていた」「詩はこうして生まれるのですね」という内容からは,生徒たちによる生活綴方に対して,中村が熱心に作文指導を行っていたことを物語っている。

資料 24　福本中学校の生徒たちによる月の輪古墳発掘調査の中の生活綴方①

道の歌
誰かが歩いていく　／　何人かが　ぞろぞろ歩いていく
道　／　たった一本の遵ではあるけれど
民衆が歩いてきた道は　／　もっと細かったかな
いや　／　何十年何百年たつうちに
道は　／　今のように太ってきたのだろう
人の　／　人のちからが
こんなに道をひろくしてきたんだろうな　（福本中３年・遠藤太郎）

書けてしまった詩
先生　／　詩を作りに古墳へ登った
でも　／　良い詩が生まれなかった
何故でしょう　／　作業をしなかったからでしょう
いや　／　毎日働いている先生のすがた
熱心な人々のすがたに　／　恐怖して
追　／　思った通りに綴ったら
詩が書けていた　／　先生
詩はこうして生まれるのですね　（福本中３年・是末幸恵）

（美備郷土文化の会『スライド 月の輪古墳』1954 年。「月の輪にのぼって 詩と作文集」『歴史評論』No.53,1954 年３月,55～58 頁。）

資料 25　福本中学校の生徒たちによる月の輪古墳発掘調査の中の生活綴方②

古　墳
円い古墳,なぜ円い　／月の輪,なぜこの名前を持ったか
この中には何があるか　／　鏡があるか　　刀があるかな
なぞを持って,ねている古墳　（福本中２年・角南智史）

みんなの手で
飯岡村にある　月の輪古墳　／　私達は　今日も
息をきらしながら あの高い山 月の輪古墳で／竹ベラを持って　茶色の土　黄色の土を
おとしていく　／はにわをみがく　葺石をみがく
毎日毎日　みんなの手によって　／はにわがほりだされる
この太陽の下でとうぐわをふるとは　／普段ならなげだすところだ
僕は必死にがんばった歯をくいしばって。　／一人一人とへっていく
負けてたまるか 皆んなの気持はおなじだ ／太陽に力をうばわれたようにふるくわには
力が少しずつ増して来るのを感じた。　（福本中１年・田中康恵）

こふん
王子の山のこふん　／　一つ一つ土をはがす
汗が眼に入り　いたい　／太陽が運動シャツをつきさして
背中がいたい　／なんべん掘っても
はにわが　ころび出る　／こんなに埋めたのはだれだろう
ハサミで木の根をほって　／しゃがんで　竹べらを動かして
私は身体ごと　歴史を勉強する　／それにしてもこんな高いところへ
えらかったろうな　（福本中１年・豊福恵美子）

　小さな竹ベラ
初めて古墳へ登った時だった。　／古墳の説明を聞いて
いざこれから掘ろうとした時　／僕は
小さな　一本の竹ベラを握った。　／こんな　小さな竹ベラで
こんな大きな月の輪が，　／果して　何日かかったら掘れるだろうか。
古墳と　竹ベラを見くらべて，　／僕はうんざりした。
この小さな竹ベラには　／何か大きな責任がある。
＊　＊
真夏の暑い　太陽の光を　／麦わら帽子でさけながら
ただ，ただ一心に　竹ベラを動かした，　／隣の友達と　顔を見合わせて
何も言わずに　／ただ　ニッコリ笑っただけで
又一心に竹ベラを動かした。　（福本中３年・中村立己）

　とうぐわをふるつて
一生懸命でくわを動かしている人　／竹ベラを動かしている人
僕等は重いとうぐわをふる　／木の根木の株を取りながら
一くわ一くわと力をこめて　／背すじが汗を流れる
所々ではにわが出る　／こしの手ぬぐいは汗くさくなる
こんな高い山へ　これだけの　／はにわがいけられたものだ
これも昔の人の　手によって　／村のおじいさん達も　若い人といっしょに
よわい足を　一歩一歩　／はにわを持ち　登ってきたのだろうか？
もし私達が　昔の人にように　／たくさんのはにわを　この高い山へ
持ってあがることが　できるだろうか　／この月の輪古墳も　先生、村の人達の
手によって　／映画にもなり
自分達の作業した所を　／自分の目で見
耳で聞くことができる　（福本中３年・柳沢俊秀）

作備盆地
さくび盆地・・・・　／　いい名だろ
ぼくたちがつけたんだよ　／　いい名だろ
だから　先生もうれしいんだろ　／　さくび盆地は　ぼくたちの村だ
大きな古墳があるんだ　／　古生層の山もあるんだ
古い古い歴史もあるんだ　／　苦しい生活がながくつづいてきたんだと
先生がいってきかせてくれたんだ　／　縄文式土器を　昨日
子どもが見つけたんだ　／　三角台の平板で
測量しているんだ　／　村があるいているんだな
ぼくたちはそれを追いかけているんだよ　（福本中１年・赤畠　潤）

　古墳よお前は
草木の茂った山　これが古墳と言う物か　／木を切り　草をかり取る
大勢の人々の力で　土をはぎ　／葺石　ハニワを掘り出した，
我々は　古墳をサンパツしている，　／すると　古墳らしいすがたを現わした，
その時　私は何か言った，　／古墳よ　一人前にしてやったよ，
立派になったぞ　目を開いてみたまえ　／何千年間　お前は眠っていたね，
さあ　早く起きなさいよ，　／大昔　お前が生れた時
そして　お前はいつ眠ったのだ　／古墳よ　目をさますのだ
お前のみじめなすがた　／眠っていた間
お前は　何物かに流されたのだ　／古墳よ　目がさめたかね，
では　我々と話そうよ，　／お前の生れた時の歴史を 私に語ってくれ
大昔の歴史をほこりにして，　／そして　お前は語ってくれるのだ，
古墳よ　平和な日本が生れるぞ。　（福本中３年・是末幸恵）

近藤先生

思い出したように　古墳に登った　／　山路はなつかしい
古墳は　私をまねいてくれる　／　近藤先生に久しぶりに会った
先生は　かみの毛を長くのばし　／　どらんとつかれきった目で
いつものように笑っていた　／　きのどくだ
夜も昼も休まず　／　一心になる先生
先生の休まれる日はいつか　／　長いかみの毛はいつつむの
先生は一心に掘っている　／　風に吹かれて
さばかれるかみの毛を　／　土まぶれの手で
かき上げているすがた　／　たまらなく心にしみこんだ
今日は村祭りだよ　／　村人は楽しく舞っている
先生　／　村人は歌っているよ
一生懸命になっている先生　／　何事に気にせず
何の楽しさもなく　／　毎日墳頂に立って
自然としたしみ　／　古墳としたしまれる
先生のすがたは　／　おそろしく感じられた。

重歳先生

私達の授業を終えて　／飛ぶ様にして
校門を出て行かれる　／古墳にかけ登り
それきり　物を言わなくなった　／真白い紙の上に スラスラとスベラス鉛筆
先生の目は　／紙上からはなれなかった
無言のまま　／するどく目を光らせ
何か　一心になったすがたは　／おそろしい　人間の心眼であった
夕日が西の空にしづみ　／あたりが暗くなった
先生は　何かの目的と共に　／山をかけおりて　ゆかれた

（福本中３年・是末幸恵）

暑い

初めて古墳に登った時　／誰れか知らない一教師
私にやさしく話してくれた　／細い竹ベラで　かたくにぎりしめて
一生懸命に掘った　／あせの玉が土にしみこんだ
昔　古墳をきずいた人の　／流れ出たあせは　みんな
この土にしみ込んでいるのだ　／真夏の太陽は かんかん頭から照りつける
私は　真黒く焼けた　／暑い　暑い
こう叫びながら　／一生懸命　掘り続けてきたのだ

（福本中３年・是末幸恵）

（美備郷土文化の会・理論社編集部編『月の輪教室』理論社, 1954 年, 113～142 頁。）

このように体験したことを克明に綴るという「生活綴方」のあり方は, 当時の「生活綴方的教育方法」における「概念くだき」[45]の手法にもとづくものであったことがわかる。当時, 月の輪古墳発掘運動に参加した永瀬清子氏は, このような生活綴方の意義について,「それならば本当はどうなのだろう。その疑問が郷土愛ともつながり, 科学的な知識を求める心ともつながったと思う」[46]と振り返って述べている。

また, 秋山信延弘は, 1960 年の段階において, 報告書『月の輪古墳』（近藤義郎編, 月の輪古墳刊行会, 1960 年）のあとがきで, 生徒たちによる生活綴方を通した成長の様子を以下のようにとらえている。

教師たちは,教室やフィールド・ワークで,社会科や生活綴方を通じ,子供たちと一緒になって新しい教育の創造に意欲を燃やしている。また,『月の輪教室』にもある詩や作文をかいた生徒たちは,その後進学し,あるいは職場にあって,教師への信頼をこめた便りを欠かさない。たとえば地元の福本中学校の卒業生の多くの便りの中にも,めまぐるしい内外の動きの中で自分で方向を見定め,からだごと生活をたたかいながら,新しい歴史のにない手として育っていることが明らかによみとれるのである。[47]

ここで述べられているように,1960年の段階において,『月の輪教室』にもある詩や作文を書いた生徒たちは,その後も,自らの生活を綴る「生活記録」の意義を認めていたのであった。これらのことから,月の輪古墳の発掘調査の中の生活綴方の取り組みが,福本村に生きる生徒たちにとって,「郷土」の歴史を書くことを通した「生活態度」の形成の役割を担っていたことがわかる。

第５節　本章のまとめ

本章では,1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程に関わる中学校教師による取り組みの事例として,岡山県英田郡福本中学校の中村一哉による「新しい郷土教育」実践を取り上げ,検討してきた。本章で明らかになった 1950 年代前半における郷土全協の中学校教師としての取り組みの特質には,以下の三点がある。

第一に,中村における「新しい郷土教育」実践の背景として,郷土研究クラブ主体による調査研究活動が,「新しい郷土研究」の実践という位置づけのもとに行われていたことである。中村は,研究問題解決的な単元学習を重視する立場から,「郷土」における社会科歴史教育のあり方を模索していた。中村は,フィールド・ワークを通して,地域教材の自主編成活動と,郷土研究クラブを主体とした調査研究活動とを結びつけながら取り組んでいたのである。そのような出来事を背景として,中村は,1950 年代前半における戦後の郷土教育運動に関わっていったのである。

また,第二には,中村における教材研究の取り組みとして,「郷土研究を活用した教材研究」にもとづいて,岡山県福本村における地域的課題の解決をめざす調査研究活動を展開していたことである。郷土研究クラブの生徒たちは,郷土の具体的事物に関する調査研究活動を行い,労働人口の歴史的な把握や,封建的社会関係の克服というような現代につながる地域的課題に眼を向けていった。そのような地域的課題の克服をめざした学習を通して,生徒たちが,科学的認識を形成することが可能となっていたのである。

そして,第三には,中村が月の輪古墳発掘運動の中で,「社会科歴史教育と生活綴方の結合」をさせた取り組みを行っていたことである。中村は,社会科歴史授業実践においても,郷土史研究法を活用していた。中村は,生徒の批判力,思考力を養うことをねらい,郷土研究を活用しながら社会科歴史授業実践に取り組んでいた。また,中村は,月の輪古墳の発掘調査の中で生活綴方的教育方法を活用して作文や詩の指導に取り組んでいた。このような「郷土」の歴史を書くことの取り組みは, 生徒たちにおける生活態度の形成を可能としていた。そして,それらのことはまた, 1950 年代前半における郷土全協の立場から取り組まれた「新しい郷土教育」実践に共通する特質でもあった。

以上述べてきたように,1950 年代前半における戦後の郷土教育運動の地域的展開として,岡山県・月の輪古墳発掘運動の中の「新しい郷土教育」実践の事例からは,岡山県福本村の地域的課題と結びついたフィールド･ワークが行われていたことや,発掘調査の中の生活綴方といった特質をあげることができる。

なお,これまの研究では,小国喜弘が,月の輪古墳発掘運動の中の子どもたちの感想の分析を通して,「独自の歴史意識の萌芽」[48]を読み取っているが,本章における事例分析を通じて,郷土研究クラブを主体とした調査研究活動や,発掘調査の中での生活綴方的教育方法の活用などといった実践的根拠を示すことができたと考える。

また,板橋孝幸は,1950 年代前半における郷土全協の運動の特質として,「初期の郷土全協における運動は,フィールド・ワークを行いながら『教育内容と教育方法の統一』に取り組もうとしていた」とまとめているが[49],本章での事例分析を通じて,戦後の郷土教育運動の地域的展開の教育実践レベルでの実態を明らかにすることができたと考える。具体的な

特質としては,労働人口の問題や封建的社会関係の克服といった地域における問題解決型の教育実践が行われていたことなどをあげることができる。

本章では,その後の福本中学校の教育活動の展開として,月の輪古墳発掘運動の中の教育実践がどのように結びついていったのかについては明らかにすることができなかった。そうした点についての検討は,今後の課題としたい。

表 23　中村一哉による論文・著作リスト

年	年齢	論文名・著作名・出版社・発行年月日
1952 (昭和 27)	26	「みんなで,みんなのために」(手記,11 月)
1953 (昭和 28)	27	「準備のための共同研究」(手記,２月) 「百姓の子」『教育評論』No.2(4),1953 年４月。 重歳政雄「社会科日本史　研究会記録」『社会科歴史』No.3(5),1953 年 5 月。 「郷土史研究グループ実践の素描」『社会科歴史』No.3(6) ,1953 年６月。 「いっしょに学んでいくのには」(手記,７月) 「生きてこそーいし子よ」『教育評論』No.2(８),1953 年８月。 「子供の成長を軸として」(手記,10 月) 「見学案内書をつくる」(手記,10 月) 「古墳は動いている」(手記,10 月) 「月の輪のひろがり」(手記,11 月) 「山羊を飼う―生徒協同組合の記録」『職業指導』No.26(11)1953 年 11 月。 「封建社会の農村の実態」『社会科歴史』No.3(12),1953 年 12 月。 「教師としての反省」(手記,12 月) 「月の輪の子ら」(手記,12 月)
1954 (昭和 29)	28	「郷土研究をすすめるために」(手記,１月) 「噴煙となって」(手記,２月) 「読者文芸」『教育評論』No.３（２）1954 年２月。 重歳政雄「月の輪古墳と村の歴史をつくる運動」『地方史研究』No.11,1954 年２月。 重歳政雄・中村一哉「古墳『月の輪』への道―新しい郷土観をはぐくむ―」『歴史評論』No.53,1954 年３月。 美備郷土文化の会「月の輪古墳発掘運動のあらまし―私たちは何を学んだか―」『歴史評論』No.53,1954 年３月。 美備郷土文化の会「月の輪にのぼって 詩と作文集」『歴史評論』No.53,1954 年３月。 「月の輪古墳と福本扇状地の研究」『郷土教育月報』No.6,1954 年６月。 「夏休みの郷土史研究 実践の報告」『社会科歴史』No.4(6),1954 年８月。 「事実から真実を」『私たちの考古学』No.2,1954 年９月。 「＜実践報告＞月の輪古墳 発掘の仕事のなかから」『教師の友』No.4,1954 年 11 月。 中村一哉「月の輪教室」美備郷土文化の会・理論社編集部編『月の輪教室』理論社,1954 年。 重歳政雄「尊い経験」美備郷土文化の会・理論社編集部編『月の輪教室』理論社,1954 年。 美備郷土文化の会・理論社編集部編『月の輪教室』理論社,1954 年。 美備郷土文化の会『スライド 月の輪古墳』1954 年。
1955 (昭和 30)	29	「社会科と考古学的方法について」『私たちの考古学』No.4,1955 年３月。 「“アジアの国々”を終えて ＜地理教育実践記録＞」『教育評論』No.４（３）1955 年４月。 「現場からもの申す 良心的な教科書がほしい」『教育評論』No.４（５）1955 年６月。
1956 (昭和 31)	30	「アジア人としての感情」『教育手帖』No.65,1956 年 10 月。
1967 (昭和 42)	41	中村常定「中学校二年の事例」現代学級経営研究会編著『学級集団の事例研究 第 2 班編成替えをどう行なうか』明治図書出版,1967 年。

2008 （平成 20）	82	中村常定「月の輪運動と歴史教育」角南勝弘,澤田秀実編『月の輪古墳発掘に学ぶ―増補 改訂版―』美前構シリーズ普及会,2008 年。 中村常定「歴史の真実を学ぶために」近藤義郎・中村常定『地域考古学の原点・月の輪古墳』新泉社,2008 年。
2010 （平成 22）	84	柵原中学校美術部絵,中村常定文,角南勝弘編『月の輪古墳の発掘：月の輪古墳発掘 50 周年』月の輪古墳発掘 50 周年記念祭実行委員会,2010 年。
2013 （平成 25）	87	逝去

（角南勝弘氏からの聴取を参考にして筆者作成。※ 中村一哉は,中村常定氏のペンネームである。共著及び,同僚教師であった重歳政雄の論文・著作も含めた。）

[1] 月の輪古墳発掘運動の教育的意義について論じた先行研究として,以下のものをあげることができる。吉田晶「月の輪古墳と現代歴史学」(『考古学研究』第 120 号,1984 年)。西川宏「学校教育と考古学」『岩波講座 日本考古学 第７巻－現代と考古学』(岩波書店,1986 年)。小国喜弘「国民的歴史学運動における日本史像の再構築―岡山県・月の輪古墳を手がかりに―」(『東京都立大学人文学報』第 337 号,2003 年：再収「国民史の起源と連続―月の輪古墳発掘運動―」『戦後教育のなかの〈国民〉 乱反射するナショナリズム』吉川弘文館,2007 年)。中村常定「月の輪運動と歴史教育」角南勝弘,澤田秀実編『月の輪古墳発掘に学ぶ―増補 改訂版―』(美前構シリーズ普及会,2008 年。

[2] 前掲,小国喜弘「国民史の起源と連続―月の輪古墳発掘運動―」,98～128 頁。

[3] 月の輪古墳発掘運動の中の教育活動について小国喜弘は,「月の輪古墳の発掘運動の特徴は,その発掘を一種の教育的営為として組織しようとする点にあった」としている(前掲,小国喜弘「国民史の起源と連続―月の輪古墳発掘運動―」,103 頁)。本章では,その中でも,「新しい郷土教育」実践に着目して,論述を行った。

[4] 1950 年代前半における郷土全協の活動を論じた先行研究として,以下のものをあげることができる。谷口雅子,森谷宏幸,藤田尚充「郷土教育全国協議会社会科教育研究史における＜フィールド・ワーク＞について―戦後社会科教育史の研究（ⅡのⅠ）―」(『福岡教育大学研究紀要』第 26 号第２分冊社会科編,1976 年）。臼井嘉一「戦後歴史教育における内容編成の理論」『戦後教育と社会科』（岩崎書店,1982 年）。木全清博「地域認識の発達論の系譜」『社会認識の発達と歴史教育』（岩崎書店,1985 年）。松岡尚敏「桑原正雄の郷土教育論―『郷土教育論争』をめぐって―」（日本方法教育学会『教育方法学研究』第 13 号,1987 年）。廣田真紀子「郷土教育全国連絡協議会の歴史―生成期 1950 年代の活動の特徴とその要因―」(東京都立大学『教育科学研究』第 18 号,2000 年)。

[5] 前掲,廣田真紀子「郷土教育全国連絡協議会の歴史―生成期 1950 年代の活動の特徴とその要因―」,33 頁。

[6] 臼井嘉一「戦後日本の教育実践の全体像を捉える視点」臼井嘉一監修『戦後日本の教育実践―戦後教育史像の再構築をめざして―』三恵社,2013 年,2 頁。

[7] 大串潤児「国民的歴史学運動の思想・序説」『歴史評論』No.613, 2001 年,2～15 頁。

[8] 勅使河原彰『日本考古学の歩み』名著出版,1995 年,211～212 頁。

[9] 教科書『日本の成長』については,梅野正信『社会科歴史教科書成立史―占領期を中心に―』(日本図書センター,2004 年）に詳しい。

[10] 前掲,中村常定「月の輪運動と歴史教育」,97 頁。

[11] 月の輪古墳発掘の発端は, 小国によって,「福本中学校教諭の中村一哉が中学生と共に古墳（丸山古墳：筆者注）を発掘したことから始まっている」(前掲,小国喜弘「国民史の起源と連続―月の輪古墳発掘運動―」,100 頁)と指摘されている。しかし,発掘運動の発端には,福本中学校の教師たちによる「郷土研究」や,「新しい郷土教育」実践の取り組みも,間接的にではあるが影響を与えていたように思われる。

[12] 重歳政雄・中村一哉「古墳『月の輪』への道－新しい郷土観をはぐくむ－」『歴史評論』No.53,1954 年３月,49 頁。

[13] 中村一哉「月の輪古墳の発掘と福本扇状地の研究」『郷土教育月報』No. 6,郷土全協

事務局発行,1954 年,５～６頁。

[14] 桑原正雄「郷土教育全国連絡協議会の任務と性格について」『歴史地理教育』No.30,1957 年 12 月,17 頁。

[15] 中村一哉「教師としての反省」(1953 年 12 月記) 美備郷土文化の会・理論社編集部編『月の輪教室』理論社,1954 年,42～43 頁。

[16] 中村一哉「郷土研究をすすめるために」(1954 年１月手記),前掲,美備郷土文化の会・理論社編集部編『月の輪教室』,46 頁。

[17] この「福本扇状地の研究」の実践について論及している先行研究として,前掲,小国喜弘「国民史の起源と連続―月の輪古墳発掘運動―」。前掲,中村常定「月の輪運動と歴史教育」がある。しかし,「新しい郷土教育」実践としての位置づけのもとに,論じているわけではない。

[18] 磯田一雄「学習指導要領の内容的検討(２)」肥田野直・稲垣忠彦編『教育課程(総論)〈戦後日本の教育改革 第６巻＞』東京大学出版会,1971 年,459 頁。

[19] フィールド・ワークに参加することによって,具体的にものを見るという地域教材の自主編成の態度は,1950 年代前半において郷土全協に参加した教師に共通する姿勢であったと考えられる(佐藤伸雄『戦後歴史教育論』青木書店,1976 年,75 頁。)

[20] 中村一哉「事実から真実を」『私たちの考古学』No.２,1954 年９月,13 頁。

[21] 桑原正雄『郷土教育的教育方法』明治図書出版,1958 年,1 頁。

[22] この「封建社会の農村の実態の研究」の実践について論及している先行研究として,前掲,小国喜弘「国民史の起源と連続―月の輪古墳発掘運動―」。前掲,中村常定「月の輪運動と歴史教育」の研究をあげることができる。しかし,「新しい郷土教育」実践としての位置づけのもとに,論じているわけではない。

[23] 前掲,中村一哉「月の輪古墳の発掘と福本扇状地の研究」,６頁。

[24] 中村一哉「封建社会の農村の実態」『社会科歴史』No.３(12),1953 年 12 月,31 頁。

[25] 前掲,中村一哉「月の輪古墳の発掘と福本扇状地の研究」,６頁。

[26] 柵原町史編纂委員会編『柵原町史』柵原町,1987 年,732 頁。

[27] 1950 年代前半頃の福本村の社会状況について,角南勝弘は,「美作１市５郡,五千人の農民が参加した『納得のいく所得税』をめざす税金民主化運動」が展開され,労働者の生活を守るための活動が盛んであったことについても述べている(角南勝弘「月の輪古墳発掘 50 周年」『歴史地理教育』No.656,2003 年７月,83 頁。)

[28] 1950 年代前半における「科学運動」とは,「研究＝創造活動とその職能に根ざした社会的実践を統一的に包括する概念として,研究者の対社会的存在の全体性を表す」ものであり,当時の福本村の地域的課題の解決をめざしたものであったと考えられる(戸邊秀明「歴史科学運動」歴史科学協議会編『戦後歴史学用語辞典』東京堂出版,2012 年,325 頁)。

[29] 美備郷土文化の会「月の輪古墳発掘運動のあらまし―私たちは何を学んだか―」『歴史評論』No.53,1954 年３月,30～31 頁。

[30] 中村一哉「＜実践報告＞月の輪古墳 発掘の仕事のなかから」『教師の友』No.４,1954 年 11 月,19 頁。

[31] 中村一哉「見学案内書をつくる」(1953 年 10 月記),前掲『月の輪教室』,32 頁。

[32] 初期社会科期における教育映画の教材としての特色と意義については,以下の研究に詳しい。國分麻里「初期社会科における教材映画の特色－『社会科教材映画体系』をてがかりとしてー」(全国社会科教育学会『社会科研究』第 79 号,2013 年)。

[33] 『あかるい教科書』の記述に関しての検討は,以下の研究に詳しい。須永哲思「小学校社会科教科書『あかるい社会』と桑原正雄―資本制社会における『郷土』を問う教育の地平―」(教育史学会『日本の教育史学』第 56 集,2013 年)。

[34] 近藤義郎編『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会,1960 年,418～419 頁。

[35] 重歳政雄「尊い経験」,前掲『月の輪教室』,74 頁。

[36] 重歳政雄「月の輪古墳発掘と村の歴史をつくる運動」『地方史研究』No.11, 1954 年２月,27 頁。

[37] 重歳政雄「社会科日本史　研究会記録」『社会科歴史』No.３(５),1953 年５月,28 頁。

[38] 前掲,中村一哉「事実から真実を」,13 頁。

[39] 中村一哉「社会科と考古学的方法について」『私たちの考古学』No.４,1955 年３月,25 頁。

[40] 前掲,中村一哉「＜実践報告＞月の輪古墳　発掘の仕事のなかから」,23 頁。

[41] 社会科授業において郷土史研究の成果を活用しようとする教師の研究的態度は,1950 年代前半における相川日出雄による小学校の「新しい郷土教育」実践にも共通するものであった（拙稿「相川日出雄による郷土史中心の小学校社会科授業づくり―『新しい地歴教育』実践の創造過程における農村青年教師としての経験と意味―」全国社会科教育学会『社会科研究』第 79 号,2013 年を参照）。

[42] 中村常定「歴史の真実を学ぶために」近藤義郎・中村常定『地域考古学の原点・月の輪古墳』新泉社,2008 年,47 頁。

[43] 同前,同書,67 頁。

[44] 元・福本中学校生徒の角南勝弘氏からの聞き取り調査の記録より（2012 年 6 月 1 日実施,岡山県美咲町・月の輪郷土館資料館において聴取した。なお,聞き取り調査においては,「中村一哉」が,中村常定氏のペンネームであったことも教えてくださった。本章では,原文資料の表記のまま,全て「中村一哉」として統一した)。

[45] 国分一太郎『新しい綴方教室』新評論,1957 年,30～40 頁。

[46] 永瀬清子「みんなが学んだ―『月の輪』発掘 30 周年に際して―」『考古学研究』No.118, 1983 年 10 月,16 頁。

[47] 秋山延弘「あとがき」,前掲,近藤義郎編『月の輪古墳』,420 頁。

[48] 前掲,小国喜弘「国民史の起源と連続―月の輪古墳発掘運動―」,109 頁。

[49] 板橋孝幸「戦後の郷土教育運動と『地域と教育の会』」,前掲『戦後日本の教育実践―戦後教育史像の再構築をめざして―』,93 頁。

第６章　本研究の成果
―1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程の特質―

本章では,前章まで取り上げた相川日出雄,福田和,杉崎章,中村一哉という四人の教師たちによる 1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程に関わる取り組みを整理しながら,それは,小・中学校段階でそれぞれどのような特質の違いがあったのか,また,いかなる点で共通していたのかについて検討していきたい。

第１節　郷土教育全国連絡協議会の教師たちにおける「新しい郷土教育」実践の背景

（１）　小学校教師における「新しい郷土教育」実践の背景

小学校教師における「新しい郷土教育」実践の背景については,前章までに,以下のように検討してきた。

第１章では,1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程に関わって,考古学・地理学・地質学といったフィールド中心の学問研究を通じて,「研究者（理論）」と「教師（教育実践）」との共同・協力による交流が行われていたことを示した。それは,1950 年代前半のむさしの児童文化研究会による「フィールド学習」においては,専門学問の「理論」の「実践」化といった関係性があった。むさしの児童文化研究会が主催した「フィールド学習」では,研究者より,「理論」としての「新しい郷土研究」の手法が現場の教師へと普及・啓発された。そこでは,現場の教師たちによって,社会科の単元開発や教材の自主編纂活動と結びついて,「新しい郷土研究」の「実践」が取り組まれていたのである。

また,1950 年代前半の第１・２回郷土教育研究大会においては,「新しい郷土教育」に関する「実践」の「理論」化が図られていた。そこでは,相川日出雄実践や岩井幹明実践のような小学校教師による教育実践がモデルとして示され,「生活綴方と歴史教育の結びつき」や,「フィールド・ワーク」と「くらべてみる」などといった教育方法の一般化がめざされた。1950 年代前半における郷土教育研究大会の開催は,1950 年代前半における郷土教育研究大会の開催は,現場の教師同士の実践交流を促し,「新しい郷土教育」実践に関する教育方法の「理論」化をめざしたものであった。

第２章では,相川における「新しい郷土教育」実践の背景として,相川が 1950 年代前半の富里村における農村の貧困問題に着目し,郷土史研究を通してその解決をめざしていたことについて検討した。相川は,郷土の現実的課題に目を向け,その解決をめざして,戦後初期新教育としての自身の社会科授業に対して反省を行う。そして,郷土史研究を通して,社会科が郷土における現実的な問題と取り組んでいくべきことを思い至るのである。そのような経験に支えられて相川は,郷土史を中心とした小学校社会科授業づくりに着想したのである。

第３章では,福田における「新しい郷土教育」実践の背景として,福田が 1950 年代における東京都東玉川町での急激な宅地開発といった郷土の現代的課題を,教育内容として取り上げていたことについて検討した。福田は,児童が郷土の現代的課題について,社会科授業

を通じて,科学的に認識することをねらいとしていた。福田は,「新しい郷土教育」実践を通じて,郷土の現代的課題の解決をめざしていたのである。

以上のことから,小学校教師における 1950 年代前半の「新しい郷土教育」実践の背景には,「郷土」における現実的な課題を,社会科授業実践を通じて問い直そうとする教師のねらいや考えが存在していた。そして,それが,戦後初期新教育の経験主義に対する批判へとつながっていったのであろう。

（２）　中学校教師における「新しい郷土教育」実践の背景

中学校教師における「新しい郷土教育」実践の背景については,前章までに,以下のように検討してきた。

第４章では, 杉崎における「新しい郷土教育」実践の背景として,郷土クラブを主体として,郷土のフィールド・ワークを行っていたことについて検討した。杉崎は,特別教育活動の時間を利用して,郷土クラブを組織し,そして,郷土全協の考え方にもとづいて実践的な学習を重視し,郷土クラブの活動としてフィールド･ワークに取り組んでいた。それは,1950 年代前半における横須賀町の社会問題の解決をめざした取り組みとして結びついていたのである。

第５章では,中村における「新しい郷土教育」実践の背景として,郷土研究クラブ主体による調査研究活動が,「新しい郷土研究」の実践という位置づけのもとに行われていたことについて検討した。中村は,研究問題解決的な単元学習を重視する立場から,「郷土」における社会科歴史教育のあり方を模索していた。中村は,フィールド・ワークを通して,地域教材の自主編成活動と,郷土研究クラブを主体とした調査研究活動とを結びつけながら取り組んでいたのである。そのような出来事を背景として,中村は,1950 年代前半における戦後の郷土教育運動に関わっていったのである。

以上のことから,中学校教師における「新しい郷土教育」実践の背景には,彼らによる郷土研究の経験が存在していた。そして,1950 年年代前半における郷土全協の活動に関わるなかで,郷土研究を「科学的」に高めようとしたのである。そして,それが,戦後初期新教育の経験主義に対する批判へとつながっていったのであろう。

（３）　資本制社会において「郷土」を問う教育の実践

1950 年代前半において,教師たちが置かれた歴史的社会状況について,佐藤伸雄は,「当時,意識的な教師たちは,国史教育の傷痕をぬぐいさり,無国籍･非科学的な社会科をどうのりこえていくか,そのためにはまずみずからがこれまでの歴史学の成果に学ばなくてはならず,みずからが村の歴史をほりおこして書くという以前の姿勢と状況だったのである」[1] と述べている。

そのような状況下において,「新しい教育実践」の創造に取り組んだ郷土全協の教師たちの背景に共通する特質は,次の二点にまとめることができる。

第一に,郷土全協の教師たちは,「新しい郷土研究」の実践を通して,「郷土」における現実的な課題を問いかけ,戦後初期新教育の経験主義教育理論に対する批判を高めていたことがある。桑原は,1951 年の段階で,「新しい郷土研究」について,次のように述べていた。

> 自然の発展はきわめて緩慢なものであって,その上にかつてあらわれた生物もまた,この緩慢なテンポの中で発生し,発展し,滅亡した。この長い歴史を背景として生まれた人類の素晴らしさは,それが自然の条件に左右されているのではなくて,その発展のうちに,自然を改造することを学んだことにある。
> われわれの先祖も,この光栄ある人類の一員として,その苦闘の中に輝かしい足跡をとどめてきた。その足跡を,われわれは具体的に,われわれの郷土の中にもとめようとしたのである。[2]

このように桑原は,「新しい郷土研究」を通して,教師たちが,先祖たちによって「改造」し,「発展」させてきた「郷土」の歴史を学ぶ必要性について主張していたのである。桑原による「新しい郷土」認識について,須永哲思は,「『郷土』の中にこそ,地域社会の深刻な利害対立,賃労働化・都市化といった地域社会の変容といった共同体的な志向とは対局にある『資本』の運動を見出そうとしていた」[3]として論じている。したがって,郷土全協の教師たちは,資本制社会における「郷土」のあり方を問うとする実践として,「新しい郷土研究」の実践に取り組んだのではないか。

また,そうした点に関わって,第２章で取り上げた相川日出雄は,「新しい郷土研究」の経験について,次のように述べている。

> たてあな住居跡は考古学者の和島誠一さんにみていただいたが,そのとき,
> 「たて穴住居跡と水とは必ず関係がある。」
> 「台地は初め狩猟だけだったが,徳川期には広い部分が放牧場となり,現在は広大な畑となっている土地の生産力の発展を考えなければならぬ。しかしだからといってすべてを土地の生産力にもっていってはいけない。」
> という意味のことをいわれ,わたしは「はっ」としたのだった。そして「なんというぼんくらだったろう」と思った。
> そして「その土地とは何か」ということを考えるためには地質をはっきりさせなければならなかった。(中略)
> つまりいろいろな知識をつかんで,それを統一的に使うという意識が欠けていたのだ。[4]

この相川の発言のように,「新しい郷土研究」の実践について,「郷土」における「土地の生産力の発展」や「郷土の発展の歴史」を,いろいろな知識を活用して問う実践としてとらえていたのである。

第二に, 郷土全協の教師たちは,「新しい郷土教育」実践を通じて,児童・生徒に「科学的な批判の精神」を身につけさせ,「郷土」における現実的な課題の解決を見出そうとしていたことがある。桑原は,批判的な「科学」の精神について,次のようにとらえていた。

> 子供たちが自分で材料を集め,自分で料理するところに,あたらしい方法がはじまる。今までのように,中央の動きだけをとらえる歴史ではなく,子供たち自身が,自己の周辺に正しい歴史の目を向けていくことができたら,そこから新しい道がひらけてきそうに思われる。[5]

つまり,桑原は,子供たち自身が,「郷土」に対して歴史の目を向けていくことが,批判的な「科学」の精神を育むための第一歩だと考えたのである。この桑原の「新しい郷土教育」論に関して,寺尾聡は,「昭和22年に成立した社会科の性格をマルクス主義理論の立場から独自に読み直し,当時の社会的要求に見合う形で,子どもの主体性を育成する『郷土教育論』を構築したのではないであろうか」[6]と述べている。つまり,桑原の「新しい郷土教育」論は,「郷土の現実」を,資本制社会のもとで搾取が行われている現実として認識し,その課題の解決を,「科学」[7]的な批判の精神の育成を通してめざす傾向が強かったといえる。

そうした点に関わって,第2章でも論じたように,相川は,「論理的思考力」について,次のように考えていた。

> 文章形式でいうなら,「…だから…である。」とか「それだから…。」というような論理的思考は考古学という科学で,遺跡や遺物からものを見極めていくのにもっとも根本的なものと考える。ではそれを教育に適用した場合はどうなるのであろうか。考古学で当時の社会発展を学ばせるとともに,子どもの論理的思考力を―それは極めて単純な推理,判断であるが―養っていくことをわたしは重視したい。[8]

このように相川は,考古学研究を通じて,「当時の社会発展を学ばせる」と同時に,「論理的思考力」の形成を求めていたのである。話し合いの場面においては,根拠をもった発言や表現を重視していた。そのことが,「科学」的な郷土史の学習であるととらえていたのであろう。

この相川の発言のように,郷土全協の教師たちは,「新しい郷土教育」実践を通じて,児童・生徒に「科学」的な批判の精神を身につけさせ,「郷土」における現実的な課題の解決を見出そうとして,実践に取り組んでいたのである。

第２節　フィールド中心の学問研究を活用した教材研究

（１）　郷土全協の小学校教師における教材研究

郷土全協の小学校教師における教材研究の特質については,前章までに,以下のように検討してきた。

第１章では,1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程に関わって,考古学・地理学・地質学といったフィールド中心の学問研究を通じて,「研究者（理論)」と「教師（教育実践)」との共同・協力による交流が行われていたことを示した。1950 年代前半における戦後の郷土教育運動の展開の中では,「生活綴方との結びつき」や「郷土教育的教育方法」の「実践」に関わる「理論」の深まりが,現場の教師たちによる教育実践の創造過程に影響を与えていたことを示した。

第２章では,相川における教材研究の取り組みとして,「郷土史研究を活用した教材研究」にもとづいて,郷土史中心の小学校社会科授業づくりを行っていたことについて検討した。相川は,考古学研究や古文書研究を用いた郷土史研究を通じて,郷土史教材を開発し,社会科の教材として用いていた。また,郷土教育運動の参加によるフィールド・ワークの経験を通して,フィールド・ワークを授業方法として用いていた。つまり相川は,教材開発や授業構成において,自身の郷土史研究やフィールド・ワークの経験を活用しつつ,小学４年生の社会科カリキュラムを自主編纂していたのである。

第３章では,福田における教材研究の取り組みとして,「歴史地理研究を活用した教材研究」にもとづいて,地理教育中心の小学校社会科授業づくりを行っていたことについて検討した。福田による社会科授業実践では,学習者が郷土の歴史地理的な事象について,具体的な事物に関する学習や,フィールド･ワークを通して,認識を深めることがめざされていた。それは,1950 年代前半における小学校の「新しい郷土教育」実践に共通する特質であった。

以上のことから,郷土全協の小学校教師における教材研究は,社会科授業実践の中に,「郷土」教材をどのように位置づけるかといった問題意識によって,フィールド・ワークを活用して取り組まれたものであった。そして,彼らの実践の中では,社会科授業の方法としてのフィールド・ワークも取り組まれていたのである。

（２）　郷土全協の中学校教師における教材研究

郷土全協の中学校教師における教材研究の特質については,前章までに,以下のように検討してきた。

第４章では，杉崎における教材研究の取り組みとして,「考古学研究を活用した教材研究」が行われていたことについて検討した。杉崎は,発掘調査の作業を中学校における教育活動として位置づけていた。そして,杉崎は,考古学の方法論に学ぶことの重要性を認め，郷土クラブの生徒たちは,実際の発掘調査の作業に取り組んでいた。そのような発掘調査の作業を通じて郷土クラブの生徒たちは,考古学の研究手法を体得していたのである。

第５章では,中村における教材研究の取り組みとして,「郷土研究を活用した教材研究」

にもとづいて,岡山県福本村における地域的課題の解決をめざす調査研究活動を展開していたことについて検討した。中村による指導によって,郷土研究クラブの生徒たちは,郷土の具体的事物に関する調査研究活動を行い,労働人口の歴史的な把握や,封建的社会関係の克服というような現代につながる地域的課題に眼を向けていった。そのような地域的課題の克服をめざした学習を通して,生徒たちが,「科学的」な認識を形成することが可能となっていたのである。

以上のことから,郷土全協の中学校教師における教材研究は,課外活動としてのクラブ活動の時間を活用して行われたものが多かった[9]。そして,彼らは,「郷土クラブ」や「郷土研究クラブ」を主体として,「郷土」教材への「科学的」な理解を深めるために,教材研究に取り組んでいたのである。

（３）　考古学・地理学・地質学を活用した教材研究

佐藤伸雄は,当時の意識的な歴史教師たちが,1950 年代前半における戦後の郷土教育運動に参加するなかで,「具体的にものを見るということを改めて学んだ」[10]ことについても指摘している。

そのような 1950 年年代前半における「新しい教育実践」の創造過程に関わる郷土全協の教師たちによる教材研究に共通する特質は,次の二点にまとめることができる。

第一に,フィールドを中心とした学問研究である考古学・地理学・地質学を活用した教材研究が行われていたことをあげることができる[11]。

第３章で取り上げた福田和は,社会科授業「私たちの町」の実践に際し,次のように「教師のねらい」と「単元の目標」を考えて,実践に取り組んでいた。

○　教師のねらい
・ 郷土の具体的な歴史を理解させる。
・ 郷土の歴史地理を通して,科学的なものの見方,考え方を身につける。
・ たくほんのとり方,郷土地図の見方,白地図の記入の仕方,人の話を聞いてメモができるようにする。
○　単元の目標
・ 郷土にあるうずもれたいろいろな資料を,子供の目でとらえ,自分の村のでき上がり方,発展の仕方,現在の町の様子に関心をむけ郷土を歴史的,地理的観点より理解する。[12]

福田は,「私たちの町」の実践を通じて,児童が,「自分の村のでき上がり方」や,「発展の仕方」,「現在の町の様子」に関心を向けることをめざして,教材研究を行い,実践に取り組んでいた。そこでは，フィールドを中心とした学問研究である「歴史地理研究」を活用した教材研究が行われていたのである。

第二に，1950 年代前半における戦後の郷土教育運動の展開の中で,郷土全協の教師たちにおける教材研究の関心が,次第に「地理教育」へと向いていったことがある。桑原は,1950 年代半ばの段階で,「社会科と郷土教育」の問題について,次のように論じていた。

考えてみれば,明治以降の近代教育において,いち早く「郷土」が教育の場としてとりあげられ,位置づけられたのは,地理教育の分野においてであった。そして,この「郷土」がどのような角度からとりあげられるか,あるいは見すてられるかによって,地理教育は大きく変わってきたのである。「郷土」は他の教科とも無関係ではない。歴史教育との関連はもちろんであるが,理科や国語とも無縁のものではない。しかし,地理教育と郷土との関係は,もっとも直接的であり,切っても切れないつながりをもっている。しかも,戦後の地理教育への無関心さが,今日の社会科をほとんど危機的な状態に追いこんでいることを考えるとき,郷土教育の運動は地理教育の問題に全力をあげてとりくまねばならなかったし,また
わたしたちにはそれだけの責任があったのである。1954 年 8 月,第 3 回お茶の水大会をまえにして,機関紙「歴史・地理教育」を歴教協と共同編集で出す決意をしたのもそのためであった。

第 3 回大会が終わると,わたしたちは運動の焦点を地理教育の分野にしぼっていった。基礎的な地理学習とフィールドを結びつけながら,それを社会科の実践でうけとめようとした。理論も実践も,内容と方法も,ながいあいだの戦後の立ちおくれを,いっきょに挽回しなければならなかったのである。[13]（傍点部は筆者）

ここで桑原が述べるように,1950 年代半ば頃から,「新しい郷土教育」実践の課題は,「地理教育への無関心」として,とらえられるようになっていく。そして, 1950 年代半ば以降の郷土全協の活動は,「地理教育」に重心を置いて取り組まれていくこととなる。その際に,戦後の郷土教育運動の展開に実践的な根拠を与えたのが,第 3 章で取り上げた福田による「地理教育」を中心とした「新しい郷土教育」実践であったのではないか。桑原は,1950 年代半ばの段階で,次のように福田実践を評価していた。

低学年の社会科が修身科から一歩ぬけ出るためには,ものごとを具体的に見ることのできる能力をやしなうことです。ことばをかえていえば,人間を見る目をやしなうことです。郷土教育の方法を「ヒューマニズムの精神につらぬかれたリアリズムの方法」というのも,低学年むきにいえばこんなことになるのでしょうか。「ロウを得てショクを望む」という古いことばがありますが,こんな勝手な注文が出せるのも,福田先生の実践がやはりすぐれているからで,改めて敬意を表したいのです。[14]

このように,桑原は, 1950 年代半ばの段階で,「ものごとを具体的に見ることのできる能力をやしなう」ことを可能にした福田実践について,「すぐれている」と評価していたのである。

そして,第 5 章で取り上げた中村も,1950 年代半ばの段階で,「新しい郷土教育」実践のあり方について,次のように考えるようになっていった。

考古学は歴史の学問であるといってしまえばそれまでだが,私はどうも,考古学的な方法が地理教育の上でも応用できるのじゃないか,考古学的な方法でもって,地理教育の新しい面を開拓していかなければならんのじゃないかと思うようになった。大胆ないい方だけれども,そうする事によって,地理がほんとうに役立つものになっていくのじゃないか,それが,郷土教育的方法であろう。[15]（傍点は筆者）

そして,中村は,1950 年代半ば以降において,中学校社会科における「地理教育」を中心とした「郷土教育的方法」の実践に取り組んでいくのである。そして,それらの実践を引き

継ぐ形で,1950 年代後半以降に,「地理教育」を中心とした「郷土」をふまえる教育実践に取り組んだ教師が,渋谷忠男であり,郷土全協を代表する実践家としてとらえていったのであろう。以上のことから, 1950 年代前半における戦後の郷土教育運動の展開の中で,郷土全協の教師たちにおける教材研究の関心は,次第に「地理教育」へと向いていったことを確認することができる。

第３節　歴史教育と生活綴方の結合が果たした役割

（１）　郷土全協の小学校教師における生活綴方

郷土全協の小学校教師における生活綴方の取り組みの特質については,前章までに,以下のように検討してきた。

第１章では,1950 年代前半における戦後の郷土教育運動の展開の中では,「歴史教育と生活綴方の結合」といった教育方法としての「理論」の追求がなされていた。そのような「理論」は,小・中学校教師による「新しい郷土教育」に関する「実践」の創造を通して,さらに深められていた。また,郷土全協に参加した小・中学校の教師たちには,学習者が歴史を書くという「生活綴方」の意義と,教師が「実践記録」を書くことによる自己教育の価値が共有され,郷土全協の教師たちによって数多くの実践記録が生み出されていたのである。

第２章では,相川が,「郷土史教育と生活綴方の結合」といった取り組みを通じて,「郷土の歴史」を学ぶことに子どもの「生活」の向上を見出していたことについて検討した。相川は,郷土における子どもの生活に着目する中で,子どもを地域における生活の主体者としてとらえていった。また相川は,子どもの意識の変化を,実践記録への記述を通してとらえることを自身の「反省」として位置づけながら社会科教育実践に取り組んでいた。これらのことを通じて相川は,郷土における子どもの「生活」の向上をめざした社会科教育実践に取り組んでいくことができたのである。

第３章では,福田が,「地理教育と生活綴方の結合」といった取り組みを通じて,児童が,郷土における事象を,「くらべてみる」学習を行うことをめざしていたことがある。それは,第２回郷土教育研究大会のテーマを受け,福田が意識的に取り組んだ「新しい郷土教育」実践の創造であったといえる。そして,福田による「くらべてみる」学習は，社会科授業「近所の人びと」の実践において,「学校のまわり」と「家の近所」の絵地図を描き,それぞれを比較する学習活動を行うことにより可能となっていた。

歴史教育と生活綴方の結合が果たした役割として,郷土全協の教師たちによる歴史教育と生活綴方を結合させた取り組みを通じて,「郷土」における認識と表現の問題が問われるようになったことがある。

以上のことから,1950 年代前半における郷土全協の小学校の教師による「歴史教育と生活綴方の結合」の取り組みは,社会科授業実践を通じて,児童の「歴史的なものの見方」や「科学的な考え方」を育もうとするねらいをもったものであったことがわかる。そして,それは,教師たちが,児童を「郷土」における「生活」の主体者としてとらえた経験にもとづいたことにより生じた考え方であったといえる。

（２）　郷土全協の中学校教師における生活綴方

郷土全協の中学校教師における生活綴方の取り組みの特質については,前章までに,以下のように検討してきた。

第４章では，杉崎が発掘調査の中で,「発掘調査と生活綴方の結合」をさせた取り組みを

行っていたことについて検討した。杉崎は,発掘調査の中において教育方法として生活綴方的教育方法を活用して,詩や作文の指導を行っていた。杉崎実践では,生徒における「主体的な生活の姿勢の確立」をねらいとして,発掘調査の中の生活綴方に取り組んでいたのである。

第5章では,中村が月の輪古墳発掘運動の中で,「社会科歴史教育と生活綴方の結合」をさせた取り組みを行っていたことである。中村は,社会科歴史授業実践においても,郷土史研究法を活用していた。中村は,生徒の批判力,思考力を養うことをねらい,郷土研究を活用しながら社会科歴史授業実践に取り組んでいた。また,中村は,月の輪古墳の発掘調査の中で生活綴方的教育方法を活用して作文や詩の指導に取り組んでいた。このような「郷土」の歴史を書くことの取り組みは,生徒たちにおける生活態度の形成を可能としていたのである。

以上のことから,郷土全協の中学校の教師における「歴史教育と生活綴方の結合」の取り組みは,発掘調査やクラブ活動の中で,生徒の「主体的な生活の姿勢」を確立しようとして取り組まれたものであったといえる。そして,それは,教師たちによって,「生徒の主体的な生活の姿勢」の確立を,「郷土」における課題の解決と結びつけていたために生じた考え方であったととらえられよう。

（3）　「郷土」における歴史や生活を書くことの可能性

1950年代前半における「綴方教育の今日のさかんな姿」について,高橋磧一は,「日本中の良心的な先生たちがいわゆる『新教育』,なかんずく現在行われている社会科に不信任状を叩きつけている」[16]姿としてとらえていた。そして,そのような姿は,郷土全協の教師たちにも,共有する姿であったのだろう。桑原は,1950年代前半における戦後の郷土教育運動の展開の中で,「生活綴方と歴史教育の交流」の姿について,次のように述べていた。

> それが教育としておこなわれるかぎり,国民的な感情の形式が問題になる。ことに小学校においては重大である。郷土の事物をたんに知識として理解することであってはならないと思う。事物の科学的な処理とともに,それを自己の感情として表現するところまで到達しなければ,認識を深めることもできないし,まして,先人の労苦に対する共感が,民族的な自覚とも誇りともなって,明日の日本をきずく（ママ）原動力とはなり得ないだろう。ここに歴史教育と生活綴方の結合の必然がある,とわたしは考えている。[17]（傍点部は筆者）

このように桑原は,1950 年代前半において,「郷土」の事物に対して,児童が「自己の感情として表現する」ことの意義を見出し,教師たちが,認識と表現の問題にこだわって,「歴史教育と生活綴方の結合」という課題にもとづいた実践に取り組むべきことを主張していたのである。

そのような「郷土」における「歴史教育と生活綴方の結合」の取り組みを行った郷土全協の教師たちに共通する特質について,以下の二点にまとめることができる。

第一に,「郷土」の具体物を用いた歴史指導と,生活綴方的教育方法による「概念くだき」の指導を通じて,児童・生徒によってすぐれた詩や作文が生み出されていたことがある。そ

れは,第４章で取り上げた杉崎実践と,第２章で取り上げた相川実践の中の生活綴方にも現れていた。

資料26　「考古学と郷土教育」実践の中の生活綴方

社山へ行って

青空は雲一つなく,すみきった春の空。
郷土の知識,ぼくはまだ何ひとつしらない。
澄みきった頭に,社山で
うんと知識をつめこんでかえろう。

ずうっとつづいているどて,
おみなえしやすすきのはえている　どて,
高いどて,
どてから　ななえ（部落の名）がみえる。
先生が
「どての下は　馬が
　でられないようにほってある。」
といった。
とおくのほうのすすきが
風にふかれて　ゆれている。
わあ　ながいどてだなあ。

どて

どては　むかし
ひゃくしょうがつくった。
武士にいわれてつくった。
野馬（のんま）が　すすきのなかをはしっていったり
草をたべたりしただっぺな。（だろうな）

どてのわきに　ちゃっこい（小さい）はか石が　三つ
ふるぼけておいてある。
　てんぽう６年
　あんせい５年
　きょうわ元年
ふるい竹のぽっぽう（つつ）に
かれた花がさしてある。
ほねになった　むかしの
ひゃくしょうが　この下にいべえ。（いるだろう）

野馬のいたのは　むかしのこと。
野馬（ぬま）どりのにんそくや
どてづくりのにんそくや
ほねおったひゃくしょうたち,
いまは　どてばっかりが　のこっている。

（周郷博「考古学と郷土教育」和島誠一編『日本考古学講座 第1巻』河出書房,1955年,246～248頁。）

この二つの生活綴方に対して,当時の郷土全協の会長であった周郷博は,「郷土教育で考古学的な作業と学習がなされることから,子どもたちは,じっさいに眼で見,手にふれる材料をつかって創造的に歴史地理的に生活の知性をみんなでそだてているのはなんてすばらしいことだろう。資本主義社会での現在主義的な生活から彼らはいつのまにか抜けだしてすくすくとのびているのにおどろかされる」[18]と評価している。また,二人の取り組みに対しても,「自然と事物の世界に加えられた遺跡が語る言葉を大事にしなくてはならない。どちらも,歴史地理道徳についての既成の概念くだきと創造的な人間の再生を望んでいる活動なのである」[19]と述べる。つまり, 周郷は,この「新しい郷土教育」実践の成果について,「郷土」の具体物を用いた歴史指導と,生活綴方的教育方法による「概念くだき」の指導の成果だとしてとらえていたのである。

当時,竹内好は,「生活綴方」に対して,「思想解放」[20]の可能性が見出されるものとしてとらえていた。また,小国喜弘は,月の輪古墳発掘運動の中の子どもたちの感想の分析を通して,「独自の歴史意識の萌芽」[21]をも読み取っている。すなわち,1950 年代前半の「新しい郷土教育」実践において,郷土全協の教師たちによって取り組まれた「歴史教育と生活綴方の結合」の取り組みがめざしたものは,「郷土」の具体物を用いた歴史指導と,生活綴方的教育方法による「概念くだき」の指導を通した,児童・生徒における「思想解放」や「独自の歴史意識の萌芽」の可能性を見出そうとしたものであったといえる。

第二に,郷土全協の教師たちにおいて,「実践記録を書く」ことの意義が共通して見出されていたことがある。郷土全協の教師たちによって共通して取り組まれていた「実践記録を書く」ことには,大人版の「生活綴方」としての意味もあった。

第２章で取り上げた相川日出雄は,「実践記録を書く」ことの意義について,次のように述べている。

> わたくし自身, この一年間をふりかえってみて, 驚くほどの変化と前進をしているのを感じている。そして, この教師の自己改造と無関係に子どもたちは変化しているのではない。
> この前例がしめした子どもたちの前進は, この教師の自己改造とどのように関係し, 成し遂げられていったかという過程を, 学習や子どもの作品を通して, 順を追って書いていこうと思う。
> 私には,子どもたちの意識が,どんな契機で,どのように変化していったかというプロセスこそ最大の関心事であり,それはまた次の年度の私たちの前進にとって欠くことのできない反省でもあると信じている。[22]

このように,相川にとっての「実践記録を書く」ことの意義とは,「教師の自己改造」のために必要な「反省」であるとしてとらえられていたのである。第５章で取り上げた中村一哉も,「書くことの熱心になったのも,今迄の教師という職の上にあぐらをかいて安住していた気持ちから,子供と共に村の人々と共に,ものを考えていこうとするようになった人間的変革が,あるいはそうさせたのかも知れない」[23]と述べていた。

また,第４章で取り上げた杉崎章は,教師における「実践記録」のあり方について,次のように述べていた。

> 個々の遺跡を調査した際の生徒の記録を集めた文集とともに貴重な資料を提供してくれ

るものは,同じ道を開拓していく教師たちの実践記録である。考古学的方法を中心とした歴史教育を前進させるためには,一人でも多くの教師が自分の実践を公開する必要があり,その上で共通の資料という立場から検討され,問題点についても批判と解明が何より大切である。この場合も,これも前に述べた相川日出雄氏の報告がすばらしかったため教師の実践記録といえば相川氏の形とまで,無意識の間に一定の形として多くの教師に影響を与え,実践記録の内容までが公式化していく傾向がみとめられるのは問題であり,つねに新しい分野を開拓していく教師の創造性にこそ意義をみとめられるべきである。[24]

この杉崎による発言のように,教師が「実践記録」を書き,公開されて,検討や批判が行われることには,教師における「創造性」の開発の意味も存在していたといえる。すなわち,当時の郷土全協の教師たちにおいて「実践記録を書く」ことの取り組みには,教師同士の「連帯」[25]の可能性を見出していたといえよう。

以上のことから,1950 年代前半における郷土全協の教師たちによる「歴史教育と生活綴方の結合」という取り組みは,「実践記録を書く」という大人版の「生活綴方」につながり,教師自身における「自己反省」や「自己変革」の意義が見出されていたといえる。また,「実践記録」が公開され,その検討や批判が行われることによって,教師同士の「連帯」の意義が見出されていたことについても指摘することができる。

第４節　研究の総括

本研究の目的は,1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程に関して,郷土全協の教師たちの取り組みに共通する特質について,歴史的研究を通して解明することであった。

序章でも論じたように,従来,戦後の郷土全協の活動についての研究は,「戦前の郷土教育の再評価からの着目」「地域に根ざす社会科の前身としての着目」「郷土教育論争への着目」「民間教育研究団体の運動への着目」「個別の郷土をふまえる教育実践への着目」といった五つの観点を中心に取り組まれ,それぞれに研究が深められてきた。

そのような先行研究の成果を踏まえた,本研究のオリジナルな意義は,以下の三点に集約されよう。

第一に,1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の背景に関して,「研究者(理論)」の側からだけではなく,学校現場の「教師（教育実践)」の側からの言説にも着目し,「実践記録」や,複数の「実践資料」を用いて,1950 年代前半における郷土全協の教師たちは,なぜ,戦後初期新教育を批判することができたのか,といった研究史上の課題に対して,検討を加えたことがある。

これまでの先行研究では,1950 年代前半における郷土全協の活動の特質に関して,以下のように論じられてきた。木全清博は，当時の郷土全協の活動について,「戦後いちはやく『地域』に着目した研究サークル」と論じている[26]。谷口雅子・森谷宏幸・藤田尚充は,郷土全協における「フィールド・ワーク」の意味について,「学問と教育の結びつきを教育実践家に,結合の場所を野外―つまり郷土にもとめた」[27]ことを論じている。廣田真紀子は,1950 年代の郷土全協の活動について,「主な活動主体が研究者・学者主催ではなく小学校教師であり,小学校教師自身のための実践交流活動が行われていたこと」[28]について論じている。板橋孝幸は,1950 年代前半における郷土全協の運動に関して,「初期の郷土全協における運動は,フィールド・ワークを行いながら『教育内容と教育方法の統一』に取り組もうとしていた」[29]として論じている。臼井嘉一は,郷土全協が,「1960 年代の郷土教育運動において,子どもの問題意識をどのようにふまえて実践を進め,それをどう生かすのかということ」を問いかけながら,渋谷忠男実践に代表されるような「1960 年代の郷土をふまえる教育実践」に取り組んでいたことについて論じている[30]。

本研究では,そのような先行研究の成果を踏まえ,1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の背景として,学校現場の教師の側からの言説にも着目し,「実践記録」や,「生活記録」や「発言記録」,「調査記録」,「インタビュー記録」,「生活綴方」等の複数の「実践資料」を用いて検討したことにより,1950 年代段前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程に関わって,「研究者（理論)」と「教師（教育実践)」との結びつきが,重要な意味をもっていたことを示した。

すなわち,本研究の第一の成果は,郷土全協の教師たちにおける,むさしの児童文化研究会が主催した「フィールド学習」への参加の経験や,郷土全協が開催した郷土教育研究大会での理論の深まりなどといった要因が,「新しい郷土教育」実践の背景となっていたことを

示したことである。第1章での検討を通して,1950 年代前半のむさしの児童文化研究会による「フィールド学習」においては,研究者より,「理論」としての「新しい郷土研究」の手法が現場の教師へと普及・啓発されいた。そこでは,現場の教師たちによって「新しい郷土研究」の「理論」が学ばれ,社会科の単元開発や教材の自主編纂活動と結びついて,「新しい郷土研究」の「実践」として取り組まれていたのである。また,1950 年代前半における郷土教育研究大会の開催を通じて,「新しい郷土教育」に関する「実践」の「理論」化が図られていた。1950 年代前半における郷土教育研究大会の開催は,「新しい郷土教育」実践に関する教育方法の「理論」化がめざされ,現場の教師同士の「実践」交流をも促していた。さらに,1950 年代前半における戦後の郷土教育運動の展開の中で,「新しい郷土教育」の「実践」に関わる「理論」の深まりが,現場の教師たちによる教育実践の創造過程に影響を与えていた。以上のことから,1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程においては,「研究者（理論)」と「実践（教師)」の関わりが,重要な意義をもっていたことが示された。

第二に,1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程に関して,相川日出雄,福田和,杉崎章,中村一哉という郷土全協を代表する実践家による取り組みを対象事例として取り上げ,教材研究といった場面について検討対象を限定的に絞り,1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程では,どのような教材構成が行われていたのかといった,研究史上の課題に対して,検討を加えたことがある。

これまでの先行研究では,1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程に関する教師の取り組みに関して,以下のように論じられてきた。1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の代表的な取り組みに着目した研究として,相川日出雄による「新しい地歴教育」実践に関する研究がある。その中でも,小原友行は,「実践の中の問題意識から民間教育団体の成果を主体的に取り入れることを通して,教育実践を自己改造していった」[31]と論じている。田中史郎は,社会科の課題や方法を,「歴史的な現実と戦前および戦後の教育運動における教育方法の成果の継承によってとらえ直す」と同時に,「歴史教育内容の創造」の課題に取り組んだためだと論じている[32]。小島晃は,「子どもの現実をとらえ,その上に立って子どもの可能性を伸ばすことが教育の営みであると考えた」[33]として論じている。

また,1950 年代後半以降における「新しい郷土教育」実践の代表的な取り組みに着目した研究として,渋谷忠男による「郷土に学ぶ社会科」実践に関する研究がある。その中でも,臼井嘉一は,「歴史教育を進めるなかで,半封建的なものが残存する『郷土』における思考方法を,まさに『郷土』の特殊性として重視せざるを得なかったからである」と論じている[34]。板橋孝幸は,「『自分たちの生活を意識して見つめ,そして考え,個々ばらばらのものをまとめ,練りあげ,より高く,より広い認識へと移行できるような,そういう教育の場はあるのだろうか』と考え続け,『そういう教育の場』を郷土に見出していくのである」と論じている[35]。

本研究では，そのような先行研究の成果を踏まえ,1950 年代前半における郷土全協の教師たちによる「新しい郷土教育」実践の創造過程に関して,相川日出雄,福田和,杉崎章,中

村一哉という郷土全協を代表する実践家による取り組みを事例として取り上げ,教材研究といった場面を限定的に絞って検討したことにより,「郷土史研究を活用した教材研究」「歴史地理研究を活用した教材研究」「考古学研究を活用した教材研究」「郷土研究を活用した教材研究」といった彼らによる取り組みの特質を示すことができた。

すなわち,本研究の第二の成果は,1950 年代前半における郷土全協の教師たちが,考古学・地理学・地質学といったフィールド中心の学問研究の研究手法を活用した教材研究を行うことによって,「新しい郷土教育」実践の創造を可能にしていたことを示したことである。郷土全協の小学校教師における教材研究の特質は,第２,３章の相川や福田による取り組みの事例で論じたように,社会科授業実践という教科指導の中に「郷土」教材をどのように位置づけるかといった問題意識にしたがって,フィールド中心の学問研究を活用して取り組まれたものであった。また,郷土全協の中学校教師における教材研究は,第４,５章の杉崎や中村による取り組みの事例で論じたように,課外活動としてのクラブ活動の時間を活用して,「郷土クラブ」や「郷土研究クラブ」を主体として,「郷土」教材の自主編纂活動を目的として取り組まれたものであった。そして,1950 年代前半の郷土全協の教師たちにおいては,考古学・地理学・地質学といったフィールド中心の学問研究の研究手法を活用した教材研究という取り組みに,「郷土」における現代的課題の解決の可能性を見出していたのである。

第三に,1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程に関して,相川日出雄,福田和,杉崎章,中村一哉という郷土全協を代表する実践家を対象事例として取り上げ,彼らによる「生活綴方との結びつき」といった場面に限定的に絞り,1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の創造過程では,どのような実践の展開が行われていたのかといった,研究史上の課題に対して,検討を加えたことがある。

これまでの先行研究では,1950 年代前半における「新しい郷土教育」実践の展開に関して,以下のように論じられてきた。1950 年代前半における郷土全協の教師による「新しい郷土教育」実践の代表的なものとして,相川日出雄による「新しい地歴教育」実践に関する研究がある。相川日出雄による「新しい地歴教育」実践の展開について,小原友行は,「相川実践は,子どもの生活現実から出発し,フィールド・ワークや生活綴方を通して,できるだけ子どもの直観を重視しながらも,子どもが科学を主体的に取り込むことによって,科学的な歴史認識を育成することをめざしている」[36]と論じている。田中史郎は,「相川実践は,子どもの切実な問題解決をそれ自体として追求するものではなく,系統的な歴史認識を媒介として,生活現実の問題にアプローチしようとするものである」[37]と論じている。小島晃は,「相川の実践は,郷土史を中心に系統的（通史的）な歴史学習を,作文や詩,劇などを取り入れて展開したことに大きな特色がある」[38]として論じている。

また,これまでの先行研究では,「1950 年代後半以降における郷土全協の教師による「新しい郷土教育」実践の代表的なものとして,渋谷忠男による「郷土に学ぶ社会科」実践に関する研究もある。渋谷忠男による「郷土に学ぶ社会科」実践の展開について,臼井嘉一は,「歴史地理教育内容を『郷土』で受けとめ,そして考えるような『子どもの問題意識』を育てることを主張した」と論じている[39]。板橋孝幸は,「授業を通して将来の社会を担う子ど

もたちがそうした問題を克服していけるための基礎となる学習をつくりあげていった」と論じている[40]。

本研究では,そのような先行研究の成果を踏まえ,1950 年代前半における郷土全協の教師たちによる「新しい郷土教育」実践の創造過程に関して,相川日出雄,福田和,杉崎章,中村一哉という郷土全協を代表する実践家による取り組みを実践事例として取り上げ,「生活綴方との結びつき」いった場面を限定的に絞って検討したことにより,「郷土史学習と生活綴方」「地理学習と生活綴方」「発掘調査と生活綴方」「社会科歴史学習と生活綴方」といった児童・生徒における認識の枠組みの特質を示すことができた。

すなわち,本研究の第三の成果は,1950 年代前半における郷土全協の教師たちによる「歴史教育と生活綴方の結合」が,「郷土」の具体物を用いた歴史指導と,生活綴方的教育方法による「概念くだき」による生活指導の結びつきによって取り組まれ,児童・生徒によって,すぐれた作文や詩を生み出すことを可能にしていたことを示したことである。郷土全協の小学校の教師における「歴史教育と生活綴方の結合」の取り組みは,第２,３章の相川や福田による事例を通して論じたように,社会科授業実践において,児童らが,「郷土」の歴史を書くことを通じて,児童の「歴史的なものの見方」や「科学的な考え方」を育もうとする立場から取り組まれたものであった。また,郷土全協の中学校の教師における「歴史教育と生活綴方の結合」の取り組みは,第４,５章の杉崎や中村による事例を通して論じたように,「郷土」におけるクラブ活動や発掘調査の中で,生徒たちの「主体的な生活の姿勢」を確立しようとして取り組まれたものであった。そして,1950 年代前半の郷土全協の教師たちにおいては,「実践記録を書く」という取り組みに,教師自身の「自己反省」や「自己変革」の意味や,教師同士の「連帯」の可能性が,共通に見出されていたのである。

以上

[1] 佐藤伸雄『戦後歴史教育論』青木書店,1976 年,71 頁。なお,佐藤は,1950 年代前半当時において,民間教育研究活動に積極的に関わっていたことを振り返って語っている。(「《インタビュー記録》歴史教育体験を聞く 佐藤伸雄先生」歴史教育史研究会『歴史教育史研究』第２号,2004 年,36～51 頁)。

[2] 桑原正雄「郷土研究の新しい展開のために」『歴史評論』No.31,1951 年９月,64 頁。

[3] 須永哲思「小学校社会科教科書『あかるい社会』と桑原正雄―資本制社会における『郷土』を問う教育の地平―」教育史学会『日本の教育史学』第 56 集,2013 年,55 頁。

[4] 相川日出雄『新しい地歴教育』国土社,1954 年,82～83 頁。

[5] 桑原正雄「新しい郷土教育」『６・３教室』第５巻 10 号,1951 年 10 月,41 頁。

[6] 寺井聡「『論争』に見る桑原正雄の社会科教育論－桑原正雄の社会科教育史上における位置－」中国四国教育学会『教育学研究紀要』第 39 巻第２部,1993 年,173 頁。

[7] 1950 年代前半において「科学的」であることとは,「研究＝創造活動とその職能に根ざした社会的実践を統一的に包括する概念として,研究者の対社会的存在の全体性を表す」ものであり,当時の地域的課題の解決をめざしていたものであったと考えられる(戸邉秀明「歴史科学運動」歴史科学協議会編『戦後歴史学用語辞典』東京堂出版,2012 年,325 頁)。

[8] 同前,同書,253 頁。

[9] 1951 年度に公示された『中学校学習指導要領（試案)』では,全ての生徒に対して毎週２～５時間ずつの特別教育活動の時間が配当され,時間配当に関する限り,特別教育活動の「黄金時代」であったという（磯田一雄「学習指導要領の内容的検討(２)」肥田野直・稲垣忠彦編『教育課程(総論)<戦後日本の教育改革 第６巻>』東京大学出版会,1971 年,459 頁）。

[10] 前掲,佐藤伸雄『戦後歴史教育論』,75 頁

[11] フィールドを中心とした「考古学研究」が,1950 年代前半において,「研究者と国民が結合」する上で,より多くの機会をもっていたとする点については,次の研究においても指摘されている。十菱駿武「『国民的考古学』運動の『復権』と継承のために」『歴史評論』第 266 号,1972 年９月。

[12] 塚田陽子・福田和「私たちの町(１)」『新しい教室』第９巻１号,1954 年１月,23 頁。

[13] 桑原正雄「戦後の郷土教育運動（３)」『歴史地理教育』No.20,1956 年７月,64～65 頁。

[14] 桑原正雄「人間を見る目（解説)」阿久津福栄編著『教師の実践記録―社会科教育―』三一書房,1956 年,56 頁。

[15] 中村一哉「社会科と考古学的方法について」『私たちの考古学』No.４,1955 年３月,25 頁。

[16] 高橋碵一「民族的教育への前進―生活綴方と歴史教育の交流によせて―」『教師の友』1952 年２月号,２～３頁。

[17] 桑原正雄「戦後の郷土教育（２)」『歴史地理教育』N0.19,1956 年６月,27～28 頁。

[18] 周郷博「考古学と郷土教育」和島誠一編『日本考古学講座 第１巻』,河出書房,1955 年,245 頁。

[19] 同前,同書,248 頁。

[20] 竹内好「表現について」『思想』No.375,1955 年 9 月, 6 ～ 7 頁。

[21] 小国喜弘「国民的歴史学運動における日本史像の再構築―岡山県・月の輪古墳を手がかりに―」(『東京都立大学人文学報』第 337 号,2003 年:再収「国民史の起源と連続―月の輪古墳発掘運動―」『戦後教育のなかの〈国民〉 乱反射するナショナリズム』吉川弘文館,2007 年,109 頁)。

[22] 前掲,相川日出雄『新しい地歴教育』,15～16 頁。

[23] 中村一哉「見学案内書をつくる」美備郷土文化の会・理論社編集部編『月の輪教室―10,000 人が参加した古墳発掘・新しい歴史教育―』理論社,1954 年,32 頁。

[24] 杉崎章「考古学と郷土教育(懇談)」瓜郷遺跡発掘調査会編『野帳』第二期第三冊,1958 年 7 月,25～26 頁。

[25] こうした視点は,先行研究においても,次のように指摘されている。「生活綴方や生活記録に関心をよせた人々が目ざしていたものは,自分の生活を克明に綴り,それを批判的に交流しあうなかで,自他の生活への認識が深まる事,その事を通しての自己変革と真の連帯の確立であった」(谷口雅子「『国民的歴史学』運動にまなぶ歴史教育実践」『歴史評論』第 364 号,1980 年 8 月,91 頁)。

[26] 木全清博「地域認識の発達論の系譜」『社会認識の発達と歴史教育』岩崎書店,1985 年,195～219 頁。

[27] 谷口雅子・森谷宏幸・藤田尚充「郷土教育全国協議会社会科教育研究史における〈フィールド・ワーク〉について」『福岡教育大学紀要』第 26 号,第 2 分冊社会科編,1976 年,33 頁。

[28] 廣田真紀子「郷土教育全国協議会の歴史―生成期 1950 年代の活動の特徴とその要因―」東京都立大学『教育科学研究』第 18 号,2001 年,34 頁。

[29] 板橋孝幸「戦後の郷土教育運動と『地域と教育の会』」臼井嘉一監修『戦後日本の教育実践―戦後教育史像の再構築をめざして―』三恵社,2013 年,93 頁。

[30] 臼井嘉一「(講演記録) 渋谷忠男実践の軌跡」,前掲『戦後日本の教育実践―戦後教育史像の再構築をめざして―』,279～297 頁。

[31] 小原友行「小学校における歴史授業構成について―相川日出雄『新しい地歴教育』の場合―」広島史学研究会『史学研究』第 137 号,1977 年,92～93 頁。

[32] 田中史郎「相川日出雄『新しい地歴教育』における方法と内容―現代歴史教育理論史研究―」『岡山大学教育学部研究集録』第 55 号,1980 年,60 頁。

[33] 小島晃「郷土に根ざす系統的な歴史学習―1954 年・相川日出雄『地域の歴史』(4 年生)の授業―」民教連社会科研究委員会『社会科教育実践の歴史―記録と分析・小学校編』あゆみ出版, 1983 年,94 頁。

[34] 臼井嘉一「子どもの問題意識を育てる歴史学習」『戦後社会科の復権』岩崎書店,1982 年, 66 頁。

[35] 前掲,板橋孝幸「戦後の郷土教育運動と『地域と教師の会』」,133 頁。

[36] 前掲,小原友行「小学校における歴史授業構成について―相川日出雄『新しい地歴教育』の場合―」,110 頁。

[37] 前掲,田中史郎「相川日出雄『新しい地歴教育』における方法と内容―現代歴史教育

理論史研究―」,55 頁。

[38] 前掲,小島晃「郷土に根ざす系統的な歴史学習―1954 年・相川日出雄『地域の歴史』（４年生）の授業―」,67 頁。

[39] 前掲,臼井嘉一「子どもの問題意識を育てる歴史学習」,67 頁。

[40] 前掲,板橋孝幸「戦後の郷土教育運動と『地域と教師の会』」,134 頁。

謝　辞

本研究を進めるにあたり，兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科の諸先生方より，貴重なご指導やご教示を賜ることができた。なかでも，主指導教官の梅野正信先生（上越教育大学大学院教授）には，研究計画の立案から，研究の方法論，研究者としてのあり方についてまで，いつも的確なご指導をいただいた。本博士論文を書き上げることができたのは，梅野先生による懇切丁寧な様々なご指導があってのことである。心より感謝申し上げるとともに，今後も変わらぬご指導ご鞭撻をお願いしたい。

博士候補認定試験では，原田智仁先生（兵庫教育大学大学院教授），越良子先生（上越教育大学教授），井上久祥先生（上越教育大学大学院准教授）より，論文の内容や構成などについて貴重なご意見をいただいた。所属する上越教育大学では，茨木智志先生（上越教育大学准教授）から，研究に対する温かい励ましのお言葉をいただいた。先生方のご指導，ご助言に感謝申し上げたい。

また，梅野先生のご指導のもとに定期的に開催される教育実践論研究会では，新福悦郎先生（石巻専修大学特認准教授），真島聖子先生（愛知教育大学准教授），岡田了佑先生（広島大学大学院後期博士課程）から，毎回貴重なご意見をいただくことができた。教育実践論研究会の皆様にも感謝申し上げたい。

私が，本研究に着想したのは，愛知県の小・中学校現場で教師生活 10 年目を迎えようとしたときに，財団法人（現公益法人）愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化センターへと転任となったことが，一つのきっかけとしてある。愛知県の埋蔵文化財行政に関わっていくなかで，「社会科教師であった私が，なぜ発掘調査に取り組まねばならないのであろう」という問題意識を抱いたことが，過去の教師たちによる「新しい郷土教育」実践に目を向けさせることとなった。翌年度，愛知県埋蔵文化財調査センターにおいて，県内の埋蔵文化財の普及・啓発活動に関わらせていただいたことも，本研究を進める上で大変有意義なことであった。早野浩二様（愛知県埋蔵文化財センター調査研究専門員），伊奈和彦様（愛知県立松蔭高等学校教頭）からは，折に触れて，研究への励ましのお言葉をいただいた。感謝申し上げたい。

2015 年 1 月

白 井 克 尚

＜参考文献一覧＞

- 相川日出雄「家貧しければ」後藤彦十郎編『魂あいふれてー二十四人の教師の記録ー』百合出版, 1951年。
- 相川日出雄「地力等級と取組む―キン青年奮闘記」『農村文化』No. 52, 1951年4月。
- 相川日出雄「私の歩んだ歴史教育の道」『歴史評論』第35号, 1952年4月。
- 相川日出雄「教師ができる実態調査―とくに郷土史について―」『教育』No. 10, 1952年8月号。
- 相川日出雄「農村生活と歴史教育」歴史教育者協議会編『平和と愛国の歴史教育―1952年度歴史教育年報―』東洋館出版社, 1953年1月。
- 相川日出雄「霜降る夜の母子の話―古川先生の質問に答えて―」『教育』No. 15, 1953年1月。
- 相川日出雄「社会科と郷土教育」宮原誠一編『日本の社会科』国土社, 1953年。
- 相川日出雄『新しい地歴教育』国土社, 1954年。
- 相川日出雄「考古学と郷土教育 実践例Ⅰ 小学校の部」」和島誠一編『日本考古学講座 第1巻』河出書房, 1955年。
- 相川日出雄「古文書と歴史教育(実践例 小学校)」高橋磌一編『古文書入門』河出書房新社, 1962年。
- 相川日出雄他「〈座談会〉『あかるい社会』の継承と発展―徳武敏夫氏の新著をめぐって―」『歴史地理教育』No. 220, 1974年1月。
- 相川日出雄「『新しい地歴教育』の背景」『歴史地理教育』No. 239, 1975年7月, 87頁。
- 愛知県知多郡横須賀町立横須賀中学校長・阪野弥生, 白菊文化研究所『権現山古窯址』白菊文化研究所 第二集, 1965年。
- アイヴァー・F・グッドソン著, 藤井泰・山田浩之訳『教師のライフヒストリー―「実践」から「生活」の研究へ』晃洋書房, 2001年。
- 秋山延弘「あとがき」近藤義郎編『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会, 1960年。
- 浅井幸子『教師の語りと新教育―「児童の村」の1920年代』東京大学出版会, 2008年。
- 網野善彦『歴史としての戦後史学』日本エディタースクール出版部, 2000年。
- 池野範男「社会科で『地域』はどう考えられてきたか―『地域学習』をめぐる論争を中心に―」『教育科学 社会科教育』第256号, 1984年。
- 石母田正『歴史と民族の発見』岩波書店, 1952年。
- 磯田一雄「学習指導要領の内容的検討(2)」肥田野直・稲垣忠彦編『教育課程（総論）〈戦後日本の教育改革 第6巻＞』東京大学出版会, 1971年。
- 板橋孝幸「戦後の郷土教育運動と『地域と教師の会』」臼井嘉一監修『戦後日本の教育実践―戦後教育史像の再構築をめざして―』三恵社, 2013年。
- 板橋孝幸「小学校低学年の『時刻・時間』学習に関する教育方法論ー郷土教育実践における算数科と社会科のクロスカリキュラムー」『福島大学総合教育研究センター紀要』2009年。
- 伊藤裕康「桑原正雄と郷土教育（1）―地域に根ざす社会科教育とのかかわりを考える―」愛知教育大学地理学会『地理学報告』第56号, 1983年。
- 稲垣忠彦・松平信久・寺崎昌男編『教師のライフコース―昭和史を教師として生きて』東京大学出版会, 1988年。
- 稲垣忠彦・佐藤学『授業研究入門』岩波書店, 1996年。
- 茨木智志『成立期の世界史教育に関する総合的研究』2008～2010年度科学研究費補助金[基盤研究

（C）］研究成果報告書, 2011 年。
・ 岩田一彦「教育実践学の理念」兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科『教育実践学の構築』東京書籍, 2006 年。
・ 上田薫編集代表『社会科教育史資料１』東京法令出版, 1974 年。
・ 上田薫編集代表『社会科教育史資料２』東京法令出版, 1975 年。
・ 上原専禄『国民形成の教育』新評論, 1961 年。
・ 碓井岑夫編著『教育実践の創造に学ぶ―戦後教育実践記録史―』日本教育新聞社, 1982 年。
・ 臼井嘉一「奥丹後の教師たちの歩みと社会科教育」渋谷忠男『地域からの目―奥丹後の社会科教育―』地歴社, 1978 年。
・ 臼井嘉一「奥丹後社会科学習の特徴と課題」奥丹後社会科教育研究会編『地域に根ざす社会科の創造―奥丹後の教育―』あゆみ出版, 1982 年。
・ 臼井嘉一「子どもの問題意識を育てる『郷土の歴史教育』」『戦後歴史教育と社会科』岩崎書店, 1982 年。
・ 臼井嘉一・板橋孝幸『渋谷忠男教育実践資料集（第１集）』（「2007-2009 年度科学研究費［基盤研究（B）］戦後日本における教育実践の展開過程に関する総合的調査研究」＜研究代表 臼井嘉一＞研究成果報告書第１集, 2008 年）。
・ 臼井嘉一「戦後日本教育実践史を捉える視点」臼井嘉一監修『戦後日本の教育実践―戦後教育史像の再構築をめざして―』三恵社, 2013 年。
・ 臼井嘉一「（講演記録）渋谷忠男実践の軌跡」臼井嘉一監修『戦後日本の教育実践―戦後教育史像の再構築をめざして―』三恵社, 2013 年。
・ 臼井嘉一「戦後日本の教育実践史の新段階と『場の教育』『シティズンシップ教育』」臼井嘉一監修『戦後日本の教育実践―戦後教育史像の再構築をめざして―』三恵社, 2013 年。
・ 梅野正信『社会科歴史教科書成立史―占領期を中心に―』日本図書センター, 2004 年。
・ 梅野正信「江口武正実践記録が描き出す教育専門職としての教師像」二谷貞夫・和井田清司・釜田聡編『「上越教師の会」の研究』学文社, 2007 年。
・ 海老原治善「新しい郷土教育の創造―第１回郷土教育研究大会ひらく―」『カリキュラム』第 53 号, 1953 年 5 月。
・ 海老原治善『新版 民主教育実践史』三省堂選書, 1977 年。
・ 遠藤豊吉「『新しい地歴教育』解説」宮原誠一・国分一太郎編『教育実践記録選集』第３巻, 新評論, 1966 年。
・ 大串潤児「国民的歴史学運動の思想・序説」『歴史評論』No. 613, 2001 年。
・ 大槻健『戦後民間教育運動史』あゆみ出版, 1982 年。
・ 大槻健「民間教育研究運動」『現代教育学事典』労働旬報社, 1988 年。
・ 大橋勤「郷土史学習」『愛知県における考古学の発達』親和プリント, 2005 年。
・ 小熊英二『＜民主＞と＜愛国＞-戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社, 2002 年。
・ 小田泰司「アメリカ社会科教育史研究における新たな研究方法の可能性―ラッググループの社会認識形成論の展開とタバ社会科―」全国社会科教育学会『社会科教育論叢』第 47 号, 2010 年。
・ 片上宗二『日本社会科成立史研究』風間書房, 1993 年。
・ 勝田守一「実践記録をどう評価するか」『教育』５巻７号, 1955 年７月。
・ 加藤章『戦後歴史教育史論―日本から韓国へ』東京書籍, 2013 年。

- 上川淳「第２回郷土教育研究大会―歩いてつくる歴史教育―」『歴史評論』第 49 号, 1953 年 10 月。
- 上川淳「武蔵野児童文化研究会の業績をしのんで―私と歴教協の結びつき―」東京都歴史教育者協議会『東京の歴史教育』第 15 号, 1986 年。
- 木全清博「地域認識の発達論の系譜」『社会認識の発達と歴史教育』岩崎書店, 1985 年。
- 木村博一「古文書と歴史教育(総論)」高橋磌一編『古文書入門』河出書房新社, 1962 年。
- 木村博一「社会科教育と郷土学習」『歴史地理教育』第 115 号, 1965 年 12 月。
- 木村博一『日本社会科の成立理念とカリキュラム構造』風間書房, 2006 年。
- 木村博一「地域教育実践の構築に果たした社会科教師の役割―愛知県三河地方における中西光夫と渥美利夫の場合―」全国社会科教育学会『社会科研究』第 70 号, 2009 年。
- 郷土教育全国連絡協議会編『第２回郷土教育研究大会報告 郷土教育』1953 年 9 月。
- 郷土全協事務局『戦後郷土教育の歩み』郷土全協事務局, 1966 年。
- 草原和博「教科教育実践学の構築に向けてー社会科教育実践研究の方法論とその展開ー」兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科『教育実践学の構築』東京書籍, 2006 年。
- 久冨善之編著『教員文化の日本的特性ー歴史, 実践, 実態の探究を通じてその変化と今日的課題をさぐるー』多賀出版, 2003 年。
- 桑原正雄「郷土研究の新しい展開のために」『歴史評論』31 号, 1951 年 9 月。
- 桑原正雄「新しい郷土教育」『６・３教室』5 巻 10 号, 1951 年 10 月。
- 桑原正雄「青いリンゴの運動―第 1 回郷土研究大会を終って―」『教育』No. 16, 1953 年４月。
- 桑原正雄「創刊を祝って―考古学と教育―」考古学研究会『私たちの考古学』創刊号, 1954 年 6 月。
- 桑原正雄「郷土と地理教育」『新しい教室』No. ９(10), 1954 年 10 月。
- 桑原正雄「戦後の郷土教育（１)」『歴史地理教育』第 18 号, 1956 年５月。
- 桑原正雄「戦後の郷土教育（２)」『歴史地理教育』第 19 号, 1956 年６月。
- 桑原正雄「戦後の郷土教育（３)」『歴史地理教育』第 20 号, 1956 年７月。
- 桑原正雄「郷土の問題をどう受けとめるか」『教育技術』第 12 巻第５号, 1957 年８月。
- 桑原正雄「郷土教育全国連絡協議会の任務と性格について」『歴史地理教育』No. 30, 1957 年 12 月。
- 桑原正雄「『新しい地歴教育』の教育実践について」国民教育編集委員会編『教育実践論―教師と子どもの新しい関係―』誠信書房, 1958 年。
- 桑原正雄「人間を見る目（解説)」阿久津福栄編著『教師の実践記録―社会科教育―』三一書房, 1956 年。
- 桑原正雄「戦後の郷土教育」『教師のための郷土教育』河出書房, 1959 年。
- 桑原正雄『郷土教育運動小史―土着の思想と行動―』たいまつ新書, 1976 年。
- 香村克己『戦後愛知の教育運動史ー地域から綴る運動と教師群像ー』』風媒社, 2006 年。
- 小国喜弘「国民的歴史学運動における日本史像の再構築―岡山県・月の輪古墳を手がかりに―」『東京都立大学人文学報』第 337 号, 2003 年（再収「国民史の起源と連続―月の輪古墳発掘運動―」『戦後教育のなかの〈国民〉 乱反射するナショナリズム』吉川弘文館, 2007)。
- 国分一太郎「民間教育運動の一年についてーその成果と欠落ー」『教師の友』No. 10, 1952 年 12 月。
- 国分一太郎・高橋磌一「対談 生活綴方と歴史教育」『教師の友』第 6 号, 1952 年 7 月。
- 国分一太郎「概念くだき」『新しい綴方教室』新評論, 1957 年。
- 國分麻里「初期社会科における教材映画の特色ー『社会科教材映画体系』をてがかりとしてー」全国社会科教育学会『社会科研究』第 79 号, 2013 年。

・ 小島晃「郷土に根ざす系統的な歴史学習―1954 年・相川日出雄『地域の歴史』（４年生）の授業―」民教連社会科研究委員会『社会科教育実践の歴史―記録と分析・小学校編』あゆみ出版, 1983 年。
・ 小林千枝子『戦後日本の地域と教育―京都府奥丹後における教育実践の社会史―』学術出版会, 2014 年。
・ 小原友行「小学校における歴史授業構成について―相川日出雄『新しい地歴教育』の場合―」広島史学研究会『史学研究』第 137 号, 1977 年。
・ 小原友行「農村青年教師による初期社会科教育実践の授業論―相川・江口・鈴木実践の分析―」日本教育方法学会『教育方法学研究』第 21 巻, 1995 年。
・ 小原友行『初期社会科授業論の展開』風間書房, 1998 年, 463 頁。
・ 近藤義郎編『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会, 1960 年。
・ 斉藤尚吾「私たちの郷土研究はこうして始められた」『月報郷土』第 5 号, 1952 年（桑原正雄「戦後の郷土教育（１）」『歴史地理教育』1956 年 5 月, 第 18 号, 所収）
・ 斉藤尚吾「郷土教育と歴史教育」歴史教育者協議会編『平和と愛国の歴史教育―1952 年度歴史教育年報―』東洋書館, 1953 年。
・ 斉藤利彦・梅野正信・和井田清司・板橋孝幸編『全国青年教師連絡協議会関係資料』（「2007-2009 年度科学研究費［基盤研究（Ｂ）］戦後日本における教育実践の展開過程に関する総合的調査研究」＜研究代表 臼井嘉一＞研究成果報告書第４集）2010 年。
・ 斎藤嘉彦「歴史教育（郷土教育）のあり方を求めてー杉崎章さんの教育実践から学んだことー」知多古文化研究会編『知多古文化研究 10』知多古文化研究会, 1996 年。
・ 坂元忠芳『教育実践記録論』あゆみ出版, 1980 年。
・ 佐藤伸雄『戦後歴史教育論』青木書店, 1976 年。
・ 佐藤学・小熊伸一編『日本の教師９―カリキュラムをつくるⅡ―教室での試み』ぎょうせい, 1993 年。
・ 佐藤学『教育方法学』岩波書店, 1996 年。
・ 重歳政雄「社会科日本史　研究会記録」『社会科歴史』No. ３（５）, 1953 年５月, 28 頁。
・ 重歳政雄「月の輪古墳発掘と村の歴史をつくる運動」『地方史研究』No. 11, 1954 年２月, 27 頁。
・ 重歳政雄・中村一哉「古墳『月の輪』への道ー新しい郷土観をはぐくむー」『歴史評論』No. 53, 1954 年３月。
・ 重歳政雄「尊い経験」美備郷土文化の会・理論社編集部編『月の輪教室―10, 000 人が参加した古墳発掘・新しい歴史教育―』理論社, 1954 年。
・ 渋谷忠男『郷土に学ぶ社会科』国土社, 1958 年。
・ 十菱駿武「『国民的考古学』運動の『復権』と継承のために」『歴史評論』第 266 号, 1972 年 9 月。
・ 白井克尚「1950 年代前半における小学校社会科歴史授業の分析―『平和と愛国の歴史教育』に関する一考察―」愛知教育大学歴史学会『歴史研究』第 47 号, 2001 年。
・ 白井克尚「中学校における歴史研究と歴史学習の協働に関する史的考察―愛知県横須賀中学校『郷土クラブ』の実践の分析を通して―」愛知教育大学歴史学会『歴史研究』第 57 号, 2011 年。
・ 白井克尚「(研究ノート)相川日出雄の郷土教育実践を支えた考古学研究―『考古学と郷土教育』を手がかりに―」日本社会科教育学会『社会科教育研究』第 115 号, 2012 年。
・ 白井克尚「相川日出雄のライフヒストリー研究―小学校社会科教師としての専門性形成に焦点を当ててー」歴史教育史研究会『歴史教育史研究』第 10 号, 2012 年。

・ 白井克尚「1950 年代の中学校における郷土教育実践の特質に関する一考察―愛知県知多郡横須賀中学校の杉崎章の取り組みに即して―」日本学校教育学会『学校教育学研究』第 28 号, 2013 年。
・ 白井克尚「相川日出雄による郷土史中心の小学校社会科授業づくり―『新しい地歴教育』実践の創造過程における農村青年教師としての経験と意味―」全国社会科教育学会『社会科研究』第 79 号, 2013 年。
・ 白井克尚「1950 年代前半における戦後の郷土教育運動の地域的展開―岡山県・月の輪古墳発掘運動の中の教育実践に着目して―」兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科『教育実践学論集』第 15 号, 2014 年。
・ 白井克尚「1950 年代前半における『新しい郷土教育』実践の創造過程に関する一考察―郷土教育全国連絡協議会の『理論』と『実践』の関わりに焦点を当てて―」愛知東邦大学『東邦学誌』第 43 巻第 2 号, 2014 年。
・ 杉崎章『柳ケ坪貝塚』横須賀中学校, 1953 年。
・ 杉崎章『社山古窯調査のあらまし』横須賀中学校, 1954 年（杉崎章「横須賀町の遺跡－社山古窯－」横須賀町史編集委員会編『横須賀町史 別冊』横須賀町, 1956 年に再収)。
・ 杉崎章「知多半島における郷土教育の実践」愛知県教育委員会『教育愛知』第 11 号, 1954 年 11 月。
・ 杉崎章「考古学と郷土教育 実践例Ⅱ 中学校の部」和島誠一編『日本考古学講座 第 1 巻』, 河出書房, 1955 年。
・ 杉崎章「歴史教育における考古学の役割」考古学研究会『私たちの考古学』第 18 号, 1958 年 11 月。
・ 杉崎章「考古学と郷土教育（懇談）」瓜郷遺跡発掘調査会編『野帳』第二期第三冊, 1958 年 7 月。
・ 杉崎章『常滑の窯』学生社, 1970 年。
・ 周郷博「考古学と郷土教育」和島誠一編『日本考古学講座 第 1 巻』河出書房, 1955 年。
・ 須永哲思「1950 年代における社会科と生活綴方―生活綴方から社会認識への『飛躍』はいかになされたのか―」『教育史フォーラム』第 8 号, 2013 年。
・ 須永哲思「小学校社会科教科書『あかるい社会』と桑原正雄―資本制社会における『郷土』を問う教育の地平―」教育史学会『日本の教育史学』第 56 集, 2013 年。
・ 角南勝弘「月の輪古墳発掘 50 周年」『歴史地理教育』No. 656, 2003 年 7 月。
・ 高志信隆「青いリンゴを『第 1 回郷土教育研究会』記」『日本児童文学』第 6 号, 1953 年。
・ 高橋碵一「民族的教育への前進―生活綴方と歴史教育の交流によせて―」『教師の友』1952 年 2 月。
・ 竹内好「表現について」『思想』No. 375, 1955 年 9 月。
・ 田中耕治編著『時代を拓いた教師たち―戦後教育実践からのメッセージ』Ⅰ日本標準, 2005 年。
・ 田中耕治編著『時代を拓いた教師たち―実践から教育を問い直す』Ⅱ, 日本標準, 2009 年。
・ 田中史郎「相川日出雄『新しい地歴教育』における方法と内容―現代歴史教育理論史研究―」『岡山大学教育学部研究集録』第 55 号, 1980 年。
・ 谷川彰英「郷土教育論争」『戦後社会科教育論争に学ぶ』明治図書, 1988 年。
・ 谷川彰英監修, 有田和正・北俊夫協力『社会科教育臨時増刊 名著 118 選でわかる社会科 47 年史』No. 396, 明治図書, 1994 年 9 月。
・ 谷口雅子・森谷宏幸・藤田尚充「郷土教育全国協議会社会科教育研究史における〈フィールド・ワーク〉について」『福岡教育大学紀要』第 26 号, 第 2 分冊社会科編, 1976 年。
・ 谷口雅子「『国民的歴史学』運動にまなぶ歴史教育実践」『歴史評論』第 364 号, 1980 年 8 月。
・ 塚田陽子・福田和「私たちの町（1）」『新しい教室』第 9 巻 1 号, 1954 年 1 月。

・ 塚田陽子・福田和「私たちの町（２）」『新しい教室』第９巻２号, 1954 年２月。
・ 土屋武志『アジア共通歴史学習の可能性―解釈型歴史学習の史的展開』梓出版社, 2013 年。
・ 都出比呂志「共同体」田中琢・佐原真編集代表『日本考古学事典』三省堂, 2006 年。
・ 勅使河原彰『日本考古学の歩み』名著出版, 1995 年。
・ 寺井聡「『論争』に見る桑原正雄の社会科教育論」中国四国教育学会『教育学研究紀要』第 39 巻 第 2 部, 1993 年。
・ 遠山茂樹『戦後の歴史学と歴史意識』岩波書店, 1968 年。
・ 徳武敏夫『新しい歴史教科書への道―『あかるい社会』の継承と発展―』鳩の森書房, 1973 年。
・ 戸邊秀明「歴史科学運動」歴史科学協議会編『戦後歴史学用語辞典』東京堂出版, 2012 年。
・ 富里村史編さん委員会編『富里村史・通史編』富里村, 1981 年。
・ 中内敏夫・竹内常一・中野光・藤岡貞彦『日本教育の戦後史』三省堂, 1987 年。
・ 永瀬清子「みんなが学んだ―『月の輪』発掘 30 周年に際して―」『考古学研究』No. 118, 1983 年 10 月。
・ 中野光編『日本の教師８―カリキュラムをつくるⅠ―学校での試み』ぎょうせい, 1993 年。
・ 中野光「二十四人の教師の記録－『魂あいふれて』を読む－」『中野光 教育研究著作集② 日本の教師と子ども』ＥＸＰ, 2000 年。
・ 中野光・浅岡靖央・白井克尚・森田浩章『教師とは―金沢嘉市が拓いた教育の世界―』つなん出版, 2003 年。
・ 中野光「特別寄稿（講演記録） 戦後教育実践史のなかの上越教師の会」二谷貞夫・和井田清司・釜田聡編『「上越教師の会」の研究』学文社, 2007 年。
・ 中村一哉「封建社会の農村の実態」『社会科歴史』No. ３(12), 1953 年 12 月。
・ 中村一哉「月の輪古墳の発掘と福本扇状地の研究」『郷土教育月報』No. ６, 郷土全協事務局発行, 1954 年６月。
・ 中村一哉「事実から真実を」『私たちの考古学』No. ２, 1954 年９月。
・ 中村一哉「＜実践報告＞月の輪古墳　発掘の仕事のなかから」『教師の友』No. ５（６）, 1954 年 11 月, 23 頁。
・ 中村一哉「月の輪教室」美備郷土文化の会・理論社編集部編『月の輪教室―10, 000 人が参加した古墳発掘・新しい歴史教育―』理論社, 1954 年。
・ 中村一哉「社会科と考古学的方法について」『私たちの考古学』No. ４, 1955 年３月, 25 頁。
・ 中村常定「月の輪運動と歴史教育」角南勝弘, 澤田秀実編『月の輪古墳発掘に学ぶ―増補 改訂版―』美前構シリーズ普及会, 2008 年。
・ 中村常定「皆で発掘した月の輪古墳」近藤義郎・中村常定『地域考古学の原点・月の輪古墳』新泉社, 2008 年。
・ 中村哲『社会科授業実践の規則性に関する研究―授業実践からの教育改革―』清水書院, 1991 年。
・ 西川宏「学校教育と考古学」『岩波講座 日本考古学 第７巻－現代と考古学』岩波書店, 1986 年。
・ 二谷貞夫・和井田清司・釜田聡編『「上越教師の会」の研究』学文社, 2007 年。
・ 日本民間教育研究団体連絡会編『日本の社会科』民衆社, 1977 年。
・ 野々垣務編・民主教育研究所企画『ある教師の戦後史―戦後派教師の実践に学ぶ』本の泉社, 2012 年。
・ 菱山覚一郎「社会科教育における『郷土』概念の一考察―桑原正雄の教育論を中心に―」『明星大学

紀要 日本文化学部・言語文化学部』第7号, 1999年。
・ 日比裕「フィールド・ワークと文集による郷土史学習―相川日出雄小４『野馬のすんでいたころ』(昭27）―」『教育科学 社会科教育』No. 152, 1976年。
・ 日比裕「ダイジェスト・初期社会科をめぐる論争史」『社会科教育』第274号, 1985年。
・ 美備郷土文化の会「月の輪古墳発掘運動のあらまし―私たちは何を学んだか―」『歴史評論』No. 53, 1954年３月。
・ 美備郷土文化の会・理論社編集部編『月の輪教室―10, 000人が参加した古墳発掘・新しい歴史教育―』理論社, 1954年。
・ 平田嘉三・初期社会科実践史研究会編『初期社会科実践史研究』教育出版センター, 1986年。
・ 広岡亮蔵「牧歌的なカリキュラムの自己批判―梅根・海後先生にこたえる―」『カリキュラム』No. 15, 1950年３月。
・ 廣田真紀子『郷土教育全国協議会の歴史―その運動的側面からの評価』東京都立大学修士学位論文, 2000年。
・ 廣田真紀子「郷土教育全国連絡協議会の歴史―生成期1950年代の活動の特徴とその要因―」東京都立大学『教育科学研究』第18号, 2001年。
・ 福田和「私の実践報告」むさしの児童文化研究会編『第１回郷土教育研究大会資料 郷土教育』1953年。
・ 福田和「まつり」「あかるい社会」編集委員会編『小学校における社会科教科書の扱い方 実践例とその解説・批判』中教出版, 1954年。
・ 福田和「近所の人びと(実践記録)」阿久津福栄編著『教師の実践記録―社会科教育―』三一書房, 1956年。
・ 福田和「郷土教育運動を進めるにあたって」『歴史地理教育』No. 23, 1956年12月。
・ 古川原「子どもを全面的に―相川先生の歴史教育を見る―」『教育』国土社, No. 15, 1953年１月。
・ 古島敏雄「郷土教育研究の問題点」『実際家のための教育科学』第１巻５号, 1953年８月, 43頁。
・ 松岡尚敏「桑原正雄の郷土教育論―『郷土教育論争』をめぐって―」日本教育方法学会『教育方法学研究』第13巻, 1987年。
・ 峯岸良治『「地域に根ざす社会科」実践の歴史的展開と授業開発―授業内容と授業展開を視点として―』関西学院大学出版会, 2010年。
・ 宮原武夫「歴史教育と地域の文化財」甘粕健編『＜地方史マニュアル９＞地方史と考古学』柏書房, 1977年。
・ 宮原兎一「郷土史教育の系譜―戦後の論者を中心として―」『社会科教育史論』東洋館出版社, 1965年。
・ 民教連社会科研究委員会編『社会科教育実践の歴史―記録と分析』小学校編, あゆみ出版, 1983年。
・ 民教連社会科研究委員会編『社会科教育実践の歴史―記録と分析』中学・高校編, あゆみ出版, 1984年。
・ 武蔵野児童文化研究会『新しい社会科のワーク・ブックNo. １ わたしたちの武蔵野研究―向ヶ丘篇―』秀文社, 1951年４月。
・ むさしの児童文化研究会「わたしたちの郷土研究No. ２ 府中と国分寺を中心として」『歴史評論』第34号, 1952年１・２月。
・ むさしの児童文化研究会編『第１回郷土教育研究大会資料 郷土教育』1953年２月。

- 無着成恭『山びこ学校』青銅社, 1951 年。
- 村井淳志「国民的歴史学運動と歴史教育」東京都立大学『教育科学研究』第４号, 1985 年。
- 村井大介「社会科教師の専門性に関する言説の展開とその課題―社会科教師研究における新たな方法論の確立を見据えて―」中等社会科教育学会『中等社会科教育研究』第 31 号, 2013 年。
- 村田徹也『戦後愛知の民間教育研究運動の歩み』風媒社, 2006 年。
- 柵原町史編纂委員会編『柵原町史』柵原町, 1987 年。
- 山﨑喜与作「郷土研究の作品をみて―その紹介と批判―」社会科教育研究社『社会科教育』第 35 号, 1950 年。
- 山崎準二『教師のライフコース研究』創風社, 2002 年。
- 山崎準二『教師の発達と力量形成―続・教師のライフコース研究』創風社, 2002 年。
- 山下勝年「敷波の寄せる半島１」知多古文化研究会編『知多古文化研究９』知多古文化研究会, 1995 年。
- 湯山厚「先人に学ぶということ―相川日出雄氏から―」『歴史評論』47 号, 1953 年 7・8 月。
- 湯山厚「実践記録 山城国一揆―虚構の中に歴史をさぐる―」『歴史地理教育』第 14 号, 1955 年 11 月。
- 横須賀町史編集委員会編『横須賀町史』横須賀町, 1969 年。
- 吉田晶「月の輪古墳と現代歴史学」『考古学研究』第 120 号, 1984 年。
- 和井田清司『戦後日本の教育実践－リーディングス・田中裕一』学文社, 2010 年。
- 和島誠一『大昔の人の生活：瓜郷遺跡の発掘』岩波書店, 1953 年。
- 和島誠一「考古学と郷土教育 あとがき」和島誠一編『日本考古学講座 第１巻』河出書房, 1955 年。